

小見出し	ヒンディー語訳 (Pandey 訳)
1 瘡病をわずらった光源氏はすすめにより北山の聖のもとへ出かける	彼はアンタリヤ熱にかかった。あらゆる祈祷まじない薬草が施されたが、効き目はなかった。熱は下がらなかった。その時誰かが言った。北の山岳地方にある寺に非常に徳の高い僧侶がいる。彼は去年（アンタリヤ熱が大流行して、一般の薬草や祈祷まじないではなんの効き目もなかった）たくさんの重病人を治療した。だから彼にすぐに診せなければならない。なぜなら、つぎつぎといろいろな治療を試している間に、病気が身体にもっと広がっていくから。 源氏はその高僧を呼びに使いを送ったが、高齢のためひどく衰弱してきて来ることができない。だから源氏は自ら彼の所へ行くことにした。そしてある日とても朝早く4, 5人のお供を連れて密かに出発した。その場所は深い山奥だった。
2 聖は、峰が高い山に囲まれた奥深いところに籠り、修行をしている	それは3月の最後の日だった。首都の花はすべて枯れていた。野生のハナモツヤクノキにまだ花は咲いていなかった。田舎道を進んでいくにつれて霧が美しくなっていた。これを見て彼の心は晴れた。なぜなら高い地位についていたので、彼の毎日は決まりきったもので、このような美しい風景を見る機会は一度もなかったからだ。寺を見たくらいではしゃぎだした。 とても大きな岩を切り開いて洞窟が作られていた。その中にあの高僧が住んでいた。
3 光源氏は自分を誰とも知らせず、驚き騒ぐ聖から加持祈祷を受ける	源氏は自分の身分をすっかり隠していた。名前も教えなかった。しかし彼の姿はとても評判になっていたので、高僧はすぐに分かってしまった。高僧は言った。「あなたが先日私を呼びに使いを送ったのですか？しかし残念！もう私はこの世のことについて考えていないし、どうやら私はあの呪文のやり方を忘れてしまったようだ。本当に残念だが、苦勞してここまで来たのにあなたには無駄足でした。」そして大変驚いた様子を見せて、源氏のほうを笑いながら見た。しかしその後、彼がとても偉大な学者で聖者であることが判明した。彼はある護符を書き源氏に渡し、呪文を唱えた。 その時はもう陽射しがかなり強くなっていた。
4 光源氏は高い所から見た目がきちんとしきれいな僧坊を見つける	源氏が洞窟から少し外に出てみると、四方に景色がひろがっていた。彼の立つ高い場所から彼は下に多くの小屋があちこちに立っているのを見た。彼は、グモウアの道があるコテージの方に通じているのを見とめた。この田舎屋も他の小屋と同じように四方を茨で囲っていたが、ここは他の家と比べて少し飾りが多かった。そこを通過して、木陰の道が外に通じていた。そこの周りは木を剪定してきちんとされていた。彼がその家について伴の者たちに尋ねると、出家者が2年前から住んでいるとのことだった。出家者の名前を聞かされると源氏は言った。私はその方を良く知っている。私はこのような有様でここに来ているし、こんな有様でその方に会いたくない。私がここに来ていることがあの方に知れないといいのだが。
5 なにかし僧都の僧坊で、光源氏は若い女性と子どもたちの姿を見る	その時、美しい服を着て着飾った子供たちの一団がその家から外に出てきて、祭壇や神像にお供えする花を摘みだした。源氏の一人のお供が言った。「そこには女の子もいる。この女の子たちがあの出家者の所にすんでいるはずないんだが。じゃああの子たち誰なんだろう？」 自分の好奇心を抑えるために源氏は少し下に降りて、どんな様子なのかうかがい始めた。すこしたって、彼は上にもどってきて言った。「あの一団にはとても美しい女の子が何人かいる。成人している者もまだ幼い者もいる」
6 供人たちは病を気にする光源氏を、気分転換のために外へ連れ出す	午前中のほとんどの時間を源氏の病気の治療についやしてしまった。やっと彼の治療が終わると、彼の熱が上がるころになってしまった。彼の御付きやお供の者は心配になって、彼の気晴らしになるようにと都の見える山のほうへ彼を連れだした。
7 光源氏は後ろの山から、遠くまでずっと霞がかかった景色を眺める	源氏は言った。 「霧で半分も見えない遠くの景色、半分夢のような森のぼんやりした様子が四方に広がっている。なんて美しいだろう。この地方に住んでいる者に悲しみを感ずるひと時などありえるだろうか？」 彼の一人のお供の者が言った。 「これは大したものじゃありません。もしあなたが別の地方の湖と山を見たら、ここよりもっと美しいところがあると分かるでしょう」 そして彼はまず富士山や他のたくさんの有名な山々の説明を始めた。そして西の地方の、たくさんの湖や湾の話をしたので、源氏は自分の熱のでる時間になったことを思い出す間も無かった。
8 良清は、光源氏に官位を捨てて播磨で暮らす明石の入道の話をする	その者が言った。 「この下に私たちのすぐそばのハリヤにアカシ湾があります。いいですかよく聞いてください。そこはここからそんなに遠くもなく、遠回りな道でもないのに、四方を水に囲まれていて、他のところから孤立しているため、それはとても一風変わっていて、淋しいところのように思われるのです。そして、そこにはとても広くて美しい宮殿があり、昔その地を治めていた僧侶の一人娘が住んでいる。どこかの首相の家系で、世に有名な人だった。しかし、彼は変わった人で、社会を嫌っていた。しばらくは王宮の庇護者関連の仕事をしていましたが、その地位の仕事を辞めて、ハリマ地方の統治を任せられた。ほどなく彼は地元の者たちと争いになり、こういった。みんなひどく無礼なので私は都に帰る。しかし彼は帰らなかった、でも頭を丸めて、在家の出家者となった。よくあることなのだが、人気のない山のふもとに小屋を作るのではなく、彼は海辺に自分の住まいを建てた。そんなことをするのはおかしいと思うかもしれないが、現実には、この地方には、そここに多くの人の住まいがある。山の地方はとてもさみしくて人気がない。彼の若い妻と子どもたちは嫌気がさしてしまうだから彼は中道を取って海辺を選んだわけだ。

<p>9 光源氏は話を聞いて、誇り高いという明石の入道の娘に興味を持つ</p>	<p>以前に一度私はその地方をあるきまわったことがある。彼の屋敷を見に行ったら分かったのだが、彼は都では全く一般的な暮らしをしていたが、ここではとても広くてきらびやかな屋敷を建てさせた。まるで何かあったとしても、まあもうかれはこの地方を治めることに煩わされなくてもよかったし、彼は自分の残りの人生をゆっくりと過ごす決めたのだ。これとともに彼はあの世の準備もしっかり進めていた。なぜなら代理の出家者はこんな清らかで節制ある生活は送れないから。」 源氏。 「でも君は彼の娘の話をしたかい？」</p>
<p>10 明石の入道は上昇志向が強く娘は容貌と気立てが良いとの話が出る</p>	<p>お供。 「彼女はふたりとしない美女で、とても頭も良い。その地方のいったい何人の有力者が彼女に目をつけたかしのれない。みんな何度も訪ねたが、彼女の父はみんなを冷たくあしらった。思うに、彼は世捨て人であっても、唯一の心配の種である彼の娘こそが彼の秘密の復讐を進行してほしいほど願っているようだった。彼は強く誓った。もし彼の願いに反して彼女が自分で恋人を選んだり、彼が死んだあとその言いつけに背いて彼の目的を達成せず、自分の無分別な知恵を満足させようとするなら、彼の霊が現れて海に彼女を飲み込むようお願いするだろう」 源氏は自分の御付きの者の話をとても考え込みながら聞いていた。なぜ、彼女はあの vesta 女神の娘のようにシェーシャナーガ（蛇の神）以外とは結婚できないのか？そしてその前統治者のおかしな願いにみんな大笑いしてしまった。</p>
<p>11 供人たちは明石の入道の娘を洗練されていない娘であると言い合う</p>	<p>この話を聞かせていた従者はハリマの現統治者の息子だった。彼は以前国庫の事務官だった。去年昇進して彼は五位になった。彼は恋愛結婚したので有名だった。だから他の従者たちは内緒話を始めた。その女性をどうにかして誘惑するため、父親の言いつけを守らせないため、彼は何の考えもなくアカシの海岸に行った。 一人が言った。 「彼女は田舎のやり方で育てられた。それ以外にやりようもない。なぜなら彼女は社会を見る機会もなかったんだから。彼女は古い考え方の父親とだけずっと一緒だった。もっとも、彼女の母親は少し変わっていたようだが。」すると統治者の息子ヨシ・キヨが言った。 「ええ、そうかもしれない。でもだから彼女の母親は都の良い家の男子や女子を海辺を楽しみに来るよう誘惑して納得させた。このようにして彼女は自分の娘のために良い仲間を集め、仲間と一緒にいることで彼女の立ち居振る舞いはとても上品で美しいものになった。」 他の者が言った。 「もし考えなしな者が彼女の所に行きついたら、父の呪いを恐れながらも彼女をあきらめることは難しいだろう。」</p>
<p>12 娘を気にする光源氏を、供人は風変わりな好む性質があると察する</p>	<p>この話は源氏の想像力をひどくかきたてた。場所や人間に関して珍しかったり普通と違っていたりすることに源氏の興味がすぐ向くことを彼の従者は知っていたのだ。だから一生懸命源氏が聞いている姿を見ても誰も驚かなかった。</p>
<p>13 都へ帰ろうとした光源氏は大徳の言葉に従って明け方まで滞在する</p>	<p>その時一人が言った。 「一時を過ぎました。また病気の再発無しに今日は楽しく過ごしたいと思っています。だから私たちはもう家へ帰らなければならない。」 しかしその高僧は彼らにもう少しいるように言った。彼は言った。 「酷い感染がすっかり良くなったわけではない。だから夜の静かな時にまた宗教的なお勤めを行ったほうがいい。君たちは明日の朝まで帰れないと思うよ。」 彼の所の者たちは泊まっていくように勧めた。源氏も嫌ではなかった。なぜならこのような住まいの新鮮さが彼を楽しませたから。彼は言った。 「それはいい。なら朝にしよう」</p>
<p>14 夕暮れ時に僧房をかいま見た光源氏は、気品のある尼君を見つける</p>	<p>寝る時間まで何もすることがなく、寝る時間までまだまだ時間があつたので、彼は山のほうに散歩にでた。夕方の濃い霧の中、彼はその次の周りを歩きまわった。彼の従者たちは出家者の洞窟に行ってしまった。コレミツだけが彼と一緒にいた。彼が立っているところのちょうど目の前の東側で一人の女性出家者が礼拝に没頭していた。窓の幕が半分開いていた。どうやら彼女は神像に花を供えているようだ。真ん中の柱の近くに別の女性出家者が座っていた。彼女の前の三脚の台にはお経の本が置かれていた。彼女はそれを大きな声で読んでいた。彼女の顔は悲しみにくれている。40 歳くらいで、一般の階級の女性ではないように見えた。彼女の肌は柔らかく白かった。痩せてはいたが、彼女の頬は丸くふくよかだった。彼女の髪の毛は眼のところに合わせて切られていて、愛らしい束になって眉毛の所に下がっていた。だから出家者の服を着ていてもとても愛らしく魅力的に見えた。長い髪であつたらこんなに美しくみえないだろう。</p>
<p>15 光源氏は二人の女房と女童たちの中にかわいらしい少女を見出す</p>	<p>二人の良さそうな侍女がお世話をしていた。美しい少女たちが遊びながら部屋に入り、そして出ていった。その中のひとは 10 歳くらいだった。彼女は走って部屋に入ってきた。彼女は黄色い縁取りのついた破れた白いワンピースを着ていた。源氏はそのような少女を一度もみたことがなかった。大きくなったら素晴らしいだろう！彼女の濃い巻き毛が頭の四方に羽のように散っていた。彼女は顔を赤くして唇は震えていた。</p>
<p>16 幼い紫の上は、尼君に「雀の子を犬君が逃がした」と泣いて訴える</p>	<p>「どうしたの？だれか女の子とケンカしたの？」女性の出家者がそう言いながら顔を上げるのを源氏は見て思った。あの少女と女性の出家者の顔は非常に似ている。あの子の母親に違いない。その少女はがっかりして言った。「布の箱にすずめを入れておいたのにウヌが逃がした」</p>
<p>17 雀を逃がして残念そうな紫の上の様子に少納言の乳母が立ち上がる</p>	<p>二人の侍女のうちひとりが言った。 「このウヌはなんという悪い男の子だろう。このようないざづらをしたらひどく叱られないといけない。あのすずめは何処にいったらいい？私たちがとても一生懸命あれを育てていたのに。烏に見つかっていないかしら？」そう言ってその侍女は部屋をでて行った。彼女の顔は美しかった。彼女の髪は長く巻き毛だった。彼女はショーナガンの名で呼ばれていた。その少女の世話の全責任を担っていた。</p>

<p>18 尼君は自らの余命の少なさを語りつつ雀を追っている紫の上を諭す</p>	<p>女性の出家者は少女に言った。 「こちらにおいで。あなたはわからずやの女の子になってはいけません。あなたは四六時中とるに足りないことの心配ばかりしている。少し考えてみなさい。今この時も私は酷い病気で、いつお前のいる所から去ってしまうか分からない。それでもあなたは私の心配ではなくスズメの心配をするのでしょうか。それは冷酷というものだ。それに、生き物をこのように閉じ込めるのは罪深いことだと何度も言ったでしょう。こちらに来なさい」 そして少女は近くに座った。</p>
<p>19 光源氏は、思いを寄せる藤壺に紫の上が本当によく似ていると思う</p>	<p>少女の見目形はとても美しかったが、一番美しいのは、こめかみの上のところに濃い雲の一群のように広がっている髪の毛で、子供らしく額から後ろにかけて流れていた。それは彼女の美しさを2倍に引き立てた。彼は少女を見ながら心の中で大きくなったらどんなに素晴らしくなるだろうと考えていた。その時は思いだした。少女の顔が、心の底から愛していたあの女性と似ていることを。そしてこの出会いに心の中で泣いた。</p>
<p>20 尼君は亡くなった娘の話をしつつ、少納言の乳母と歌を詠み交わす</p>	<p>少女を撫でながら、女性の出家者は言った。 「なんてきれいな髪の毛だろう。髪をとかしたり結んだりするのをすごく嫌がるけどね。しかし、まだあなたがこんなに子供っぽいを見えると困ってしまうよ。あなたと同じ年頃の子供たちは全く違うのに。あなたの母親が12歳のとき彼女の父親は亡くなったのに、彼女は自分のことは何でも自分でできた。それなのに、もし私がどこかへ行ってしまったら、あなたはいったいどうなるのか私にも分からないよ。」そう言って彼女は泣き出した。このすべてを見ていた源氏は悲しみでいっぱいになった。女性の出家者の顔をとても真剣に見ていた少女は、突然頭を下げた。こうすることで、彼女の髪の毛は二つに分かれて頬のところにひろがった。少女の方を優しく見ながら女性の出家者はこのような意味の詩を詠んだ。 「この柔らかい葉の上に落ちた露のしずくの面倒を見る者が誰かいるのかどうか分からない。嫌でたまらないのにこのしずくたちは暑い風に吹き飛ばされてしまう。」これに答えて侍女がいった。 「露のしずくたちよ！若芽がどんな風に成長するのかはっきりするまでは、お前は絶対にそのままいるでしょう。」</p>
<p>21 僧都から光源氏の訪れを聞いた尼君は、恥じて簾をおろしてしまう</p>	<p>その時、家の主の出家者が他の所から中に来て言った。 「君たちは、不適切に自分たちを他人の目にさらしていないかい？君たちはとても悪い日にこんなに窓のすぐ近くに座っているようだ。今知ったのだが、源氏皇子が治療に前の家に来ている。しかし彼は平素な服装で隠しているの、誰だか分からなかった。一日中こんなに近くにいらしたのご挨拶に行かなかった」 女性の出家者は恐れ慄き言った。 「なんと困ったことでしょうか。こちらを通過して、私たちを見たかもしれない」 そして彼女は急いで窓の幕を閉めた。</p>
<p>22 僧都は尼君に、世間で評判である光源氏の姿を見てもないかと誘う</p>	<p>女性の出家者は言った。「あの噂の源氏皇子を見る機会に恵まれるのは嬉しいことだ。聞くところによると、彼の美しさはすごいもので、彼の前では私のような年寄りや出家者も、捨て去ったはずの俗世の罪や悲しみの思い出をわすれてしまう。そしてこんなに美しいこの世にあと少しだけ生きてみたくなるそうさ。しかし、あなたたちはそれについてこっそり聞くように。」</p>
<p>23 光源氏は紫の上に強く心をひかれ、藤壺の身代わりになりたいと思う</p>	<p>この年老いた女性の出家者が家から外に出てくる前に、源氏は洞窟へ続く道に向かった。なんと魅力的な人を見たことだろう！あの雨の夜に彼の友人が言ったことは正しかった。時々外にでると思いがけないところで世にも美しいものにであうのだと。こんな風に突然外出してこのような最高のものにであうなんてなんと良いことだろう！この一般的な少女は誰の子なのだろう？もしいつも私のそばにいたらどんなにいいだろう。ずっと私の心は少女に癒される、以前宮廷のあの女性としていたように。</p>
<p>24 僧都の弟子は、光源氏が臥せるところにやって来て惟光を呼び出す</p>	<p>彼が出家者の洞窟で寝ていると、その年老いた出家者の家の者がコレミツを呼んでいる声が聞こえた。その弟子は言った。 「私の主人はあなた方がこんなに近くにいることを今知りました。道すがらあなた方はお寄りになって下さらなかったけれどその時皇子を歓迎しにこちらから参っていたらと主人は悲しんでおります。しかし私がこの近くに住んでいるのを源氏皇子は知っているだろうと私が考えなかったとしても皇子が私のところいらっしやらなかったのは、今回の旅行の目的を明らかにされなくなかったからだと思います。しかし、主人は、皇子の歓迎を花を散らして自分の家でもできたと言うのです。私の主人に慈悲をかけずにあなた方が行ってしまったら少女悲しむでしょう。」</p>
<p>25 僧都の弟子を通じて、光源氏はなにがしの僧都の招きを受け入れる</p>	<p>源氏は中から返事した。 「10日間も私は、この病気が私に怒り狂ってくるので辛い思いをしていました。私はもう希望を無くしていたところにこの療養の旅にできるよう助言してくれる人がいたんです。言われた通りに私はここに来ました。もし私の病気が治らなかったら、こんなにえらい僧侶の名にひどい傷がつくと考え、姿を変えたのです。もしただの旅を楽しみにここに来ていたら、絶対こんなふうにはしませんよ。あなたのご主人に私の言葉を伝えて、ここに来るように言ってください。」</p>

<p>26 折り返し参上したながしの僧都とともに、光源氏は僧坊を訪れる</p>	<p>このようにして嬉しくなって、出家者は彼の前に現れた。源氏は彼を恐れていた。なぜなら出家者でありながら、彼はとても有能な人だった。俗世においても彼は尊敬されていて、自分の身分を隠すために来ていた服装で彼を迎えるのは源氏の意図するところではなかった。手短に出家者は、どのように都を後にして、その後どうしたか、どうしてこの服を纏っているのかを言った。最後に彼は源氏にお願いをした。</p> <p>「私の家に来て、冷たい水をお楽しみください。家の前を流れているんです。」</p> <p>自分をとりこにした人々について知る絶好の機会を源氏は得た。それでも彼は、出家者があの人たちに自分の過去の話をつらばらしてないだろうかと気がかかっていた。しかしあの少女をもう一度見たいという思いを止められなかったので出家者と共にその家に向かった。</p>
<p>27 光源氏を招くため、僧坊にある南面の部屋はさっぱりと整っている</p>	<p>庭には山間地方の自然の恵みを巧みな技で施してあった。月の光は無かったので、堀の四方は松明が灯されていた。木々にはホタルが輝いていた。前の部屋はきれいに飾られていた。香炉に良い香りのお香が焚かれていた。その香りはあたりに広がっていた。このような良い香りを源氏は今まで知らなかった。そこで彼は中にいる女性たちがこれを用意したのだろうと推測した。このような良い香りの準備をするためにその人たちはとても頭を使ったに違いない。</p>
<p>28 光源氏は夢にかこつけて僧都から紫の上のことを聞き出そうとする</p>	<p>年老いた出家者は今世の無常と来世に償うべき罪について話だした。源氏は自分の罪の重荷を思い出し、震えがきた。生きている間はずっとその記憶が彼を苛めるだろうと考えるともっと苦しくなった。この世のあとあの世でも、どれだけ恐ろしい悲しみを望まなければならないのか！出家者がその話をしている間、源氏は自分の罪について考え続けた。このように出家してこのような場所に住むのが最適だ。しかしその瞬間彼の心はあの三つ時に見た美しい存在のほうに行ってしまった。そして彼女についてもっと多くを知りたくなってしまった。彼は聞いた。</p> <p>「ここにはあなたと一緒に誰が住んでいるのですか。なぜ知りたくなったのかというと、以前夢で私はここをみて、今日ここにきて驚いているのです。」</p>
<p>29 僧都は光源氏に、妹の尼君が故按察使大納言の北の方であると語る</p>	<p>高僧はこれ聞いて笑いながら言った。</p> <p>「話のなりゆきでその夢を見たことになったのですが、その質問にあなたははっきりするしかないでしょう。たぶんあなたは、アゼチ ノ ダイネガンの名前を聞いたことがあるでしょう。もう亡くなってかなりたちました。彼が私の妹（姉？）と結婚していたのです。彼が逝った後彼女のことを気に掛ける者は誰もいなかった。その頃私も大変な時期だったので、都に行けませんでした。だから彼女はここに来て、私と住み始めたんです。」</p>
<p>30 光源氏は僧都に故大納言と尼君の間に生まれた娘について質問する</p>	<p>源氏は思い切って聞いてみた。</p> <p>「アゼチ ノ には一人娘がいたと聞きました。私が何か悪意があってこれをきいているのではないと信じてくれますね。」</p> <p>出家者は言った。</p> <p>「ひとり娘がいましたが、10年ほど前に死にました。その父の念願は彼女を王宮に入れることでしたが、あの子は言うことを聞かなかった。そして私の義理の弟（兄？）が亡くなると、その子の面倒をみるのはこの私の所の女性の出家者の妹（姉？）だけでした。卑しい仲介人を通して彼女をヒョブキヨ皇子に紹介した、彼女はその方の恋人になった。彼の妻はとても傲慢で気性が激しかった。彼女は当初から可哀そうにその少女をいじめて嫌な目に合わせ始めた。この非道がずっと続いた。ついに彼女の心は壊れてしまい、死んでしまった。嫌がらせて死ぬ者などいないと人は言うけれど、私はそう思わない。なぜなら私のあの子が病気になるまで死ぬ原因はそれしかなかった。」</p>
<p>31 紫の上の素性を知った光源氏は、藤壺に似ていることに合点がいく</p>	<p>源氏はあの少女がその方の娘だと推測した。顔が王宮のあの女性に本当によく似ていたからだ。前よりももっとその子に惹かれてしまった。彼女の家柄は良い、そこに何の疑いも無いし、この少女が源氏の弟子になってしまうと、彼女のこの田舎っぽい素朴さは実際利をもたらずだろう。源氏は彼女を手に入れると決めてしまった、なぜなら彼の性分として、興味のあるものを自分の思い通りにするのが常だった。</p>
<p>32 紫の上のことがいっそう気になった光源氏は、僧都に詳しく尋ねる</p>	<p>「あなたが聞かせてくれたそのとても悲しい話の女性はなにか思い出を残していませんか？」</p> <p>源氏はあの少女の話題にもっていくためにこの質問をした。出家者は言った。</p> <p>「子供を産んだ日に彼女は死んだのです。その子も女の子でした。その子の世話是我的妹（姉？）がしています。彼女の健康もあまりすぐれないので、そんな大きな責任を負うのが難しい状況です」</p> <p>これですべては明らかになった。</p>
<p>33 光源氏は僧都に幼い紫の上を後見することを尼君に話すように頼む</p>	<p>源氏は言った。</p> <p>「私の提案をあなたは変だと思うかもしれないが、私はこの少女を養女にしたいと強く願っています。あなたの妹（姉？）に話してみてくださいませんか？みんなは私の結婚を早めにさせたが、みんなの好みは私の好みどおりではなかった。多くの人と交流するのに私は興味がないようなので、孤独な人生を送っています。彼女がまったくの子どもだということは分かっているので、この提案はしていないけれど。。。」</p> <p>ここまで言って彼は黙ってしまった。</p>

<p>34 僧都は光源氏に、尼君に相談した上で返事をする と答えて堂に上る</p>	<p>出家者は言った。 「あなたの御慈悲に本当に感謝いたします。あの少女がまったく何も知らないということをも分あなたは感じていない。あの子はあなたの娯楽の種にもならないでしょう。しかし大きくなった後、この世で良い地位を得るために偉い人々の応援が必要なのも確かです。私はこれがどのような結果を招くのかわかりませんが、この事は彼女の祖母に話してみたほうがいいと思います。」 こう言いながら出家者の様子は深刻に悲しそうになった。 源氏は自分が良識ある行動をとらなかったような気がした。だから困惑して黙っていた。出家者は言った。 「アミダさまの宮殿で少々用事がありまして、少しお暇させていただきたいのです。お祈りもしなければなりません。しかし私はあとであなたの所に参ります。」 こう言って、年老いた出家者は山の方に行ってしまった。</p>
<p>35 光源氏は悩ましい気持ちになり、夜が更けても眠ることができない</p>	<p>源氏はとても元気がなかった。雨が降り出した。冷たい風が吹いていた。滝の轟音も聞こえた。以前は水が落ちる静かな音が聞こえていたのに、今は轟音となり、共に経本の読経が大きくなったり小さくなったりしているのと共鳴していた。このような環境では最も影響されにくい性分の人間でも悲しくなってしまう。だから源氏の皇子の様子も想像がたかない。自分の席に座ってただどうしたものかと考えこんでいた。出家者はお祈りについて言っていたが、もう時間は過ぎていた。</p>
<p>36 奥の人が休んでいない気配を感じた光源氏は扇を鳴らして人を呼ぶ</p>	<p>女性の出家者がまだ起きていたことは確かだった。なぜなら、音を立てないように細心の注意を払っていても彼女の数珠がお祈りの三脚机にあたってしまい、「カタ」という音が出てしまった。この小さなカタという音は少し魅力的だった。この音はすぐ近くから聞こえていた。内側と居間の間にあった仕切り幕を彼は少しだけずらして、自分の扇子を扇いだ。すこしどたばたしている様子だと彼には分かった。その後内側の部屋から誰かが仕切り幕の近くまでこういいながら着た。 「そんなことはありえないけれど、私は断言できる。聞いたところによると。。。」</p>
<p>37 歌を詠んだ光源氏は、女房に尼君へ取り次いでもらうようにと頼む</p>	<p>その時彼女は自分の想像にすぎないと考えて後ろに下がった。暗闇で道に迷ってしまったのだと思った。その時源氏が大声で言った。 「仏陀を祈りなさい。あなたの道は暗闇であっても迷うことは無いでしょう。」暗闇で彼の声をはっきり聞いて、まずはその女性は返事をする勇氣も出なかったが、ついに勇氣をだしてこう答えた。 「彼はどのみちに私を連れていくのでしょうか。私は良く理解できないでいるのです。」 源氏は言った。 「あなたを驚かしてしまって残念です。あなたに小さなお願いがあります。あなたの女主人に私のこの詩を届けてください。 彼がその柔らかい苗木の青々した葉を見た時から、旅人の涙は乾かないのです。」 その女性は言った！ 「ここにそのような言葉を理解するような人がだれもいないことをあなたは知るべきです。あなたが何を言いたいのか私には理解できません」</p>
<p>38 光源氏が紫の上にあてた歌を耳にした尼君は歌の内容を不審に思う</p>	<p>源氏。 「ある特別な理由があって、あなたの女主人に私のこの言葉を届けたいのです。もし君がこの言葉を届けるよう仕立ててくれたら、私は君に本当に感謝するだろう」 女性の出家者は詩を読んですぐ、この詩は孫娘に関するのだと分かった。彼女の歳を勘違いして、源氏は求愛しているのだと思った。しかし孫娘のことをどうやって知ったのだろう？少しの間彼女は考え込み、困っていた。ついに、彼女は詩で返答することにした。その内容は、 「旅人の露に濡れた寝床に一夜の宿をとる者は、山の地方の冷たい苔に定住している者たちのことについて少ししか知ることはできないのです。」 このように彼女は源氏の詩の意味を無害なものにした。</p>
<p>39 歌を返した尼君に対し、光源氏は紫の上への切実な気持ちを訴える</p>	<p>この言葉を聞いて源氏は言った。 「このようにはっきりしない話をするのに私は慣れていない。あの方がどんなに恥ずかしい思いをしよう、今回は私はこうお願いする。きれいごと置いておいて、わたしの話を真剣にきくようにと。」 女性の出家者は源氏が孫娘を若い女性と勘違いしているとおもっていた。だからこう言った。 「彼にこんな間違った話がどうして伝わってしまうのか」 源氏のような偉い人の前で話すように命じられて彼女は怖くなってしまった。彼のところに行かない言い訳を考え出した。しかし侍女たちの思いはこうだった。彼女が行かなかつたら源氏はとても悲しむだろう。ついに中から彼の前にでてこう言った。 「わたしはもう若くないといってもこのように出てくる方がいいことかわからない。でも、あなたが大切な話があると言うので私は断ることができなかつた。」</p>

<p>40 困惑している尼君の気づまりな態度に光源氏は謙虚な言葉をかける</p>	<p>源氏。 「あなたは私の話を時期のあわないそで遊びのように思うかもしれませんが。でも私はあなたに信じてもらいたい。わたしが心から望んでいるということ。仏陀に誓っても。。。しかし彼女の歳と真剣さを見て源氏は怖くなったようだ。 女性の出家者。 「あなたのお話を持ちかけ方はとても変わっていますね。まだご自分の用事についてお話にならないようですが、あなたは自分の目的をよく分かっているとわたしは思います。」</p>
<p>41 光源氏は尼君に自分の体験を語りつつ、紫の上との結婚を申し出る</p>	<p>彼女の話に源氏は元気が出てこう言った。 「あなたの長期にわたる寡婦生活と娘さんの早死のことをきいてとても悲しく思いました。あなたのこの少女のように私も幼い時にわたしを一番愛してくれたひとと別れました。幼いころ私もひとりぼっちで辛いことに耐えねばならなかった。こんなふうには私たちの境遇は同じだ。だから一この少女に対して私の心に深い同情かうまれる。彼女が得られなかったものを与えたい。私は彼女の母になりたい。この希望から私はこんな都合の悪い時間にあなたの我慢の限界も考えずに押しかけたのです。」</p>
<p>42 尼君は紫の上が幼く不似合いなことを理由に光源氏の申し出を断る</p>	<p>女性の出家者。 「あなたが目的があつてこの話をしてはいることは分かっています。でも、あなたは間違つて聞いたのです。もちろんここには私が世話をしている少女がいます。でも、彼女は本当に子供で、あなたの何のお役にもたてません。だから私はあなたのお話に賛成できません。」 源氏。 「しかしながら、私はその少女について全部知っています。もしあなたがその少女に対する私の同情が間違っているかうわべのものだと思つているなら、このお話に関してあなたは私を許すでしょう。」 自分の申し入れが非常に間違つているということを知り、源氏が全く気にしていないのは明らかだったので女性の出家者もこれ以上言う必要はないと思つた。</p>
<p>43 僧都がお勤めから帰つて来られたので光源氏は尼君の前を退出する</p>	<p>年老いた出家者は戻るところだつた。源氏は言つた。 「あなたが私の話にすぐ賛成してくれるとは期待していない。あなたが私の申し入れを違つた角度からきつてくれるだろうと期待している。」 こう言つて、彼はしきり幕を下ろしてしまつた。</p>
<p>44 明け方、深山の景色を見ながら、光源氏は僧都と和歌の贈答をする</p>	<p>夜も終わりを告げる頃、近くの寺で早朝のお祈りが始まつた。贖罪の賛歌を読む僧侶たちの声が山の風に泳ぎながら強く響いていた。その深刻な声と共に滝の水の落ちる音が調和していた。 年老いた出家者を見て源氏は言つた。 「山の嵐の強風を受けて、私は夢から驚いて覚めた。私は滝の言葉を聞き、その水の水の音楽に泣いた。」 年老いた出家者も以下のような意味の詩で返答した。 「私はあの滝の轟音で毎日お腹を満たしているの、もうそれに驚きもしないし、喜びもしない。私はもう慣れてしまつた。」 朝の空は濃い霧が広がつた。山の鳥たちのさえずりも小さくぼんやり聞こえていた。山の近くの木々や若木に様々な色の花が咲いていた。(彼はすべての名前も知らなかつた。)山全体が色とりどりの唐草模様の刺繍で飾られたようだつた。彼がもっとも驚いたのは、傾斜地をあちこち行き来するシカの動きだつた。時に跳びはね、時に突然止まつたりした。この景色を観察することで彼の悲しみの残りの部分が遠ざかつて行つた。</p>
<p>45 身動きできぬ聖は、光源氏のために護身の修法をして陀羅尼を読む</p>	<p>あの高僧は身体の一部が不自由だつたけれど、彼はどうかお祈りを完了した。高齢のために彼の声は震え、どもつていたけれど、経本を非常に丁寧に、一生懸命読んだ。</p>
<p>46 光源氏は迎えの人からの祝いと僧都から酒などのもてなしを受ける</p>	<p>源氏のたくさんの友人が彼の全快祝に駆けつけた。彼らは宮殿の話も持ってきた。下の家の出家者は変わった根を贈り物に持ってきた。それを取るには谷のずっと下まで降りなければならなかつた。かれは、源氏のお供をできなかつたことをお詫びして、言つた。 「私は断食中です。だから今、私は自分にとって嬉しいことを避けているのです。」こう言つて彼は源氏にあぶみを渡した。あぶみを持ちながら源氏は言つた。「もし私が自由だつたら、この山や湖から離れたりしない。でも私の父の皇帝はとても心配して私のことを尋ねています。この季節が終わる前に私はここに来ます」 その時彼はこのような意味の詩を詠んだ。 「私は街に行きそこの人々に言うでしょう。はやく行こう、そうしないと風に花々が吹かれ地面に散らばつてしまうよ。」 源氏の謙虚さとその話し方にうっとりして出家者はこのような意味の詩で返答した。 「沈香の花を見る者はその花の方から目をそらさない。私もちょうどそんな風になっています。」 これに源氏は微笑んで言つた。 「しかし私は沈香の花のように得難いものではありませんよ。」</p>

47 杯をいただいた聖は涙をこぼして光源氏を拝み、守りの独鈷を渡す	その後、出家者は以下のような意味の詩とともに別れの盃を出した。「私は山の自分の洞窟のヒマラヤスギの扉を少し開けただけですが、私は今日目の前にあまり人の見るできない花を見ました。」彼が顔を上げて源氏の方を見ると彼の目は涙でぬれていた。未来のあらゆる災難から彼を守るために彼は魔法の杖を出した。これをみて女性の出家者の兄（弟？）は、ショートク皇子が朝鮮から持ち帰った首飾りを彼に渡した。そこにはサファイアの宝石がついていた。そこからもたらされた箱には中国の物が入っていた。箱は袋に入っていて、そこには刺繍がほどこされていて、5枚の葉のヒマラヤスギの枝だった。彼は源氏に葉をいれるためのサファイアの入れ物を渡して、それ以外にもたくさん、その地で手に入るものを贈った。源氏も都からこの者たちへの贈り物を取り寄せた。まず一番最初に彼はあの高僧を喜ばせた。そして、彼の変わりに経本を読経してくれた出家者たちに布施と謝礼をした。その後彼は近所の貧しい村人たちに褒美を与えた。源氏が旅の準備に賛歌を読んでいたとき、
48 紫の上を引き取りたい光源氏に尼君は四五年先ならばと返事をする	年老いた出家者は自分の妹（姉？）の所に来て、皇子になにか伝言はないかと尋ねた。 彼女は言った。 「いまは何も言えません。4、5年彼がこの話を延ばしてくれたら、私も考えましょう。」 年老いた出家者は答えた。 「私もそれがいいと思う。」 源氏はそれを知って困った。自分の目的を先延ばしにすることは絶対できない。女性の出家者の伝言に対する答えとして、彼はこの地にすむ少女に託してこのような意味の詩を送った。 「昨夜、黄昏の闇に私はあの美しい花を見た。でも今日は濃い霧がそれを私の目から完全に見えなくした。」 この答えとして女性の出家者は書いた。 「その花をあきらめるのが君にとって酷く悲しいことなのか知るために、私はこの霧に包まれた空の様子を注意深く観察するでしょう」 この伝言は美しい文字でキチンと書かれていたが、とりたてて飾り立てられてはいなかった。
49 光源氏を迎えに頭中将や左中弁たちなどの公達が都からやって来る	彼の車の準備は整いつつあった。彼の妻の実家から若者の一団が到着した。彼らは言った。あなたをお探するのは本当に大変でした。もう私たちはあなたをお連れして出発したいと思います。この一団には皇子を慕って来たト・ノ・チュジョ、サチュ・ベンなど若者がいた。彼らは悲しそうに言った。 「あなたのお世話することで得る喜びは他では得られないものです。私たちに何も言わずにいってしまうなんてよくないことでした。」 他の者が言った。 「もう私たちはここまで来たんだから、この花の咲いた木の木陰でしばらく休みもしないで戻るなんて愚かでしょうね。」 これを機に彼らは小高い丘の下に円を作って座り、素焼きの器に酒を皆の手に回し始めた。その近くでは山の滝の水が美しく落ちていた。
50 頭中将は懐の横笛を出して吹き、弁の君は扇を鳴らし催馬楽を謡う	ト・ノ・チュジョは着物の裾から笛を出し、いろいろな曲を奏でた。サチュ・ベンは扇子で調子を取りながら「トヨラカ寺」を歌った。源氏を迎えにきた青年たちは皆高貴な家柄の出だった。しかし源氏の姿はとても魅力的で、岩に持たれて元気がなく座っている姿から誰も目が離せなかった。彼の一人の従者が竹笛を鳴らすと誰かが縦笛を鳴らした。みんな一緒に音楽を鳴らした。
51 僧都も自分から琴を持ち出して、光源氏を弾いてほしいと頼む	その時、年老いた出家者が自分の家からシタールのような楽器を持ってきて、山の鳥たちが楽しめるように、それを皇子に奏でてくれるようお願いした。源氏は当初、今そのような気分ではないと断ろうと思ったが、年老いた出家者の願いを断らず、彼が奏でた曲はけなしのないものだった。その後彼らは立ち上がり家へ向かった。 源氏のこの短い滞在の後彼が行ってしまうと、
52 光源氏の姿に法師と童べは感涙し、尼君たちや僧都は彼を絶賛する	その者たちはみんな、普通の出家者から新しい弟子にいたるまで、大変失望した。たくさんの人の目から涙がこぼれた。年老いた女性の出家者は家の中に座って後悔していた。皇子にほんの一瞬しかお目に掛かれなかったし、たぶんもお目にかかることもないだろうと。年老いた出家者は言った。この日出る国には、この罪深い状況のときにこのような皇子を生み出す権利はなかった。こういながら彼の目から涙があふれた。
53 幼心に光源氏に思いを寄せる紫の上は、人形に源氏の君と名付ける	あの幼い少女も皇子を見てとても喜んでいて。彼女は、自分の父親よりもあの方はとても美しいと言った。 それに対して侍女は言った。 「もしも君がそう考えるなら、あの方の娘になってしまいなさい」 侍女の言葉を聞いて少女はそれはとても良いことだというように頷いた。その後、最高に美しい着物でできた源氏の絵を彼女は書いた。それは彼女のもっとも美しい玩具となった。
54 帰京した光源氏は、宮中へあいさつに伺って父桐壺の帝と対面する	都に戻って、源氏はまっすぐ父の皇帝のもとへ行った。この2日間に会ったことを詳しくお聞かせした。皇帝は彼がとても弱っているのみで心配になった。彼はその高僧の呪文の力についてたくさんの質問をした。源氏はすべてにとても詳しくお返事した。 皇帝は言った。 「彼はもっとずっと前に呪文の高僧の地位を得なければならなかった。彼の呪文はいつもよく効いた。しかしなんらかの原因で人々は彼に注意を払わなかった。」 皇帝はその時、同上の宣言を出した。

55 宮中を出た光源氏は、正妻葵の上の実家である左大臣邸へと向かう	<p>父のところから戻る途中彼は左大臣に会った。山に自分の息子と共に源氏をお迎えに行けなかったことを詫びた。彼は言った。「私は、あなたがこっそり行ってしまったので、あなたをお迎えに誰かがいくのをあなたは好まないだろうと思った。しかし私の所で2、4日ゆっくりされると期待しています。その後私があなたを宮殿までお送りいたします。」</p> <p>源氏は全然そこに行きたくなかった。しかし、彼にはどうすることもできなかった。彼の義父は自分の車で彼を連れて行き、牛を離すと自ら車を引いて門の中に入った。このような行動は最高の敬意を表すものだったが、源氏には正反対に感じた。このすべてを源氏は気に入らなかった。</p>
56 光源氏は久しぶりに葵の上と対面するものの、二人の心は通わない	<p>源氏の訪問を待ちわびてアヴォイの宮殿はきれいに飾られた。このためにいろいろどころが変えられた。とても美しいバルコニーが付けられた。ほんの小さな物にも気を配って置かれた。しかしいつものように、アヴォイはうわの空だった。彼女の父が大変な思いで説き伏せてやっと彼女は夫の所に行くのを承知した。絵の皇女のように彼女はじっと座っていた。彼女だって美しかった。</p> <p>源氏は言った。</p> <p>「もしあなたにご興味あるようにみえて、少しお話もしてくれるような望みがあるなら、私は山の旅のお話をあなたに聞かせるのですが。君がいつもそのような態度をとるのを私は好きではない。君がそんなに憂鬱で冷たくて誇り高いのはなぜですか？もう何年も経ったのに私たちの心は触れ合わないどころか、私が見ているところによると君は前よりも遠くなっていく。ほんの少しの間でも私たちは楽しくおしゃべりできないものかな？私はこんなに酷い病気だったのに、君には一度も私のお見舞いをしなかった。これはおかしいことではない？それとも私はそういう風に思わないといけないのかな。どうあれ、このような状況は私はとてもつらい。」</p>
57 古い歌を引用して恨み言を述べる葵の上を光源氏は避けようとする	<p>アヴォイ。</p> <p>「片方の状況をもう片方が全く気にしないのは、もちろん辛いことです。」</p> <p>彼女は顔をそむけてそう言った。彼女の顔は嫌悪と虚栄心でいっぱいだった。しかし、それとともに、彼女はまたとなくらい美しく見えた。</p> <p>源氏。</p> <p>「いつもは口も開かないのに、話したと思ったら、毒を吐く。他人の罪のない言葉も侮辱しているかのように曲解する。私がどうにかして君を柔らかくしようと努力しているのに、君は前よりももっとかたくなになる。私はいつか君に理解してもらえるのだろうか。」</p> <p>そう言って彼は寝室に行ってしまった。しかしアヴォイは行かなかった。源氏はしばらく悲しく疲れきっていた。しかし、たぶん、源氏が自分の妻を特別心配していなかったのか、源氏の妻が彼の心配をしていなかったのか、とにかく、彼はすぐに眠ってしまった。そしていろいろな他の考えが頭の中をめぐり始めた。</p>
58 光源氏は葵の上への不満と反対に紫の上への思いが強くなっていく	<p>あの少女を自分のそばに置いて成長を手助けするのが彼の秘めた願いだだった。しかし、彼女の母方の祖母の少女がまだ全くの子どもだという言い分も正しかった。この事をむしかえすのは非常に難しいだろう。彼女を都に連れてくる何か良い方法は無いだろうか？そして、呼び出す口実を簡単につくって、その環境で彼女が幸福と平穏を手にするような。彼女の父のヒヨブキヨ皇子は確かに高い地位の人だが、美しくはない。少女の見目形が、おば（父の姉妹）に似ていて、家族の他の者と異なるのはなぜだろう？彼の知っている限り、フジツボとヒヨブキヨ皇子は実の兄弟姉妹で、他は義理の姉妹だった。でもこの少女は、源氏が長い間愛し続けた女性の実の姪だった。だから彼女を手に入れる願いもとても強くなった。彼の頭の中はまたどうしたら願いが叶うのかという堂々巡りを始めた。</p>
59 帰京した翌日、光源氏は僧都や尼君などがいる北山へ消息をおくる	<p>次の日、彼は年老いた出家者にお礼の手紙を書いた。その手紙には彼の企てについても少々書いてあった。</p> <p>女性の出家者に彼は書いた。</p> <p>「私の申し出に対してあなたが反対しているのを見て、私は自分の希望の正当性を思うがままに強調するのは不適當とと思いました。しかし、あなた側に賛成して私が2、3言言ったことがその場限りの激情ではないと、もしもあなたの心がうけいれてくれるのなら、私はとても嬉しく思います。」別に一葉の紙に彼は以下のような意味の詩も書いた。そしてそれをよく折ってその手紙に添えた。</p> <p>「私はあの思い出をそこに起き去ろうと全力を尽くしたが、それは一瞬たりとも私から離れない。あの山の花の美しい形が私の思い出の中でおどっている。」</p> <p>女性の出家者は大変歳をとっていたが、手紙の魅力を見てとても嬉しくなった。なぜなら、彼の書き方が素晴らしいばかりでなく、それが美しく折ってあったからだ。それをみて心がうきうきした。彼女は皇子の様子が可哀そうになった。彼がもし心のままに話していたら、それにとってもふさわしい返事を彼女はしただろう。</p> <p>彼女は書いた。</p> <p>「ここにいらしたとき、私たちの所に御寄りになってくださった。それはとても幸運なことでした。しかし、もしあなたが私たちだけに会いにここにいらっしゃっても（必ずきてくださるとねがっています）私はあなたに別の答えはできません。そしてあなたが書き送った詩の答えをお待ちにならないでください。なぜなら彼女はいまだに「ナニワズ」もキチンと一字一字書くことを知らないのです。だから彼女の変わりに私がお返事差し上げます」</p> <p>「桜の花が、すごい嵐のオノイの岸部に散ることができるようになるまで、あなたは同じ心でいられるのですか？私が思うに、この事にとっても不安になるのです。」</p>

60 僧都からの返事を残念に思った光源氏は、惟光を使者として遣わす	年老いた出家者も同じような返事をした。源氏はとても失望した。二、三日後、コレミツを呼んで、出家者に宛てた手紙を渡した。そして、彼は、少女の侍女のショナゴンの様子を見てくるように言った。コレミツは心の中で言った。なんとあつという間に彼は虜になってしまったことだろう。彼はあの少女を一目見ただけだった。彼女がほんの子供だと分かるのにはそれで十分だったのに、彼女を大変な美女と思い込んで四六時中彼女を思いだしている。この後彼の心が彼をどう動かすか見てみよう。
61 惟光は少納言の乳母に面会するものの、周囲の人々から警戒される	<p>再びゲンジの手紙を受け取ったソウツ・僧が、彼の謝意を表現できる言葉を探している間に、コレミツは乳母ショウナゴンと会うことができ、細かいことも惜しまず彼女にゲンジの気持ちと意向を語った。雄弁の才能に最高度に恵まれ、彼は巧みに言葉を次々に連ねたが、会話に居合わせている婦人達は、皆一致して、耳にしたことになりに不賛成の態度だった：「彼女は全くまだ子供で、それについて考えることができましようか？」</p> <p>ゲンジは尼に温かい懇ろな手紙を書き、その中に再び小さい手紙を入れた：</p> <p>「貴方の手でたどたくしく書かれた文字を一度でも見てみたいものです！</p> <p>深くないと この小川は呼ばれるが、深い感情が 心に生じた。 どうして君はかくも遠いのか、 山の井戸の影？</p> <p>汲むのを急ぐな、 汲むと 一 後で悔やむだろう。 山の井戸の 影を信用する決心ができようか？ それは、噂によれば、やや浅いという…」</p> <p>と尼は答えた。そう、コレミツ自身も何も慰めになるお知らせをすることができなかった。 「もし状況が順調で、病人の状態が改善したら、私どもは都へ移ります。そうすれば、私はよりはっきりしたお返事ができるでしょう。」 乳母が言ったのはこれが全てで、ゲンジは苦しい不安と待ちきれなさの内に日々を過ごした。</p>
62 光源氏は王命婦の手引きで、病気で里邸に退出中の藤壺と密通する	<p>その頃、フジツボ夫人は病気になって、しばらくの間宮殿を出た。皇帝の心配と悲しみげ源氏の心は悲しみにくれた。彼はこれは絶好の機会だと思い、逃したくなかった。その日彼はずっと落ちつきがなかった。自分の屋敷でも王宮でもどこでも彼は他のことが考えられなかったし、誰かと一緒にいることもできなかった。日が落ちると、彼は皇女の侍女オミヨブーに伝言を伝えるようお願いした。オミヨブーは二人の間で交わされる手紙をよく思っていなかったが源氏のご心配の様子をみて彼に同情し、伝言を持っていった。皇女は二人の昔の関係を不適切で恐ろしいものと思っていた。そして彼の思い出にいつも彼女は苛まれていた。だから彼女はあのような関係に二度と戻らないと決意していた。</p> <p>皇女は彼に冷たく悲しい様子で会見したが、それでも彼女の顔の美しさは隠せなかった。そして彼が彼女の見た目を大変賞賛しているのを見て、フジツボは彼に対して、憂鬱そうな、嫌そうな態度で接した。源氏は彼女の落ち度を探したかった。彼女が間違ったと認めて、落ち着いてくれるように。</p> <p>何があったかここで詳しく述べる必要はない。夜は話しているうちに終わってしまった。</p> <p>源氏は彼女の耳にこのような意味の詩を詠んだ。</p> <p>「ついに私たちは会うことができました。私たちが今日夢に見たことを夢のように忘れてしまうだろうか」</p> <p>これに対して彼女は言った。</p> <p>「私が永遠に終わらない眠りにつこうとしていても、私の悪評はこの世のすべての人の口に上るだろう。」</p> <p>そして源氏は、彼女のこの心配と恐れと悲しみに相応の理由があることを良く知っていた。</p> <p>源氏は自分の服と他の荷物を置いてきた。彼が外に出るとすぐオミヨブーが彼の荷物を全部もって走ってきた。</p>
63 光源氏は邸に帰った後、藤壺と密通したことを思い悩んで泣き臥す	彼は一日中悲嘆に暮れて寝床に横たわっていた。彼は手紙を一通送ったが、返事も無く戻ってきた。以前も何度もこのようなことがあったが、今回は彼はとても落胆していて、2、3日自室に横たわっていた。それにいつも恐れていることは、彼が父の新しい心配ごとにならないように、ということと、新しい病気になったのかと父が尋ねださないかということだった。

<p>64 藤壺の懐妊という密通の結末を、王命婦はあまりに嘆かわしく思う</p>	<p>皇女も自らの不運な宿命を嘆き、悲しんだ。日ごとに彼女は気持ちさがさらに悪くなり、帝が絶えず、急いで戻ってくるよう頼む使いを送ってくるにもかかわらず、閉じこもっているのをやめる決心はできなかった。事態は、彼女の体調不良があまり普通ではなかったことによっていっそう複雑化し、一人になってしばしば「一体何がこの原因だろうか？」と考え込んでいた。最も重苦しい疑念が彼女の魂を暗くし、将来についての考えは絶望に陥れた。暑い間は、皇女は床から全然起き上がらなかつた。三ヶ月経って、彼女の体調不良の原因が明らかになつた。</p> <p>自分に対する不審の眼差しに気付きながら、彼女は、自らの不幸な運命を嘆き、苦悩した。何の疑いも持たなかつた侍女達は「今に至るまで帝に知らせないのか？」と驚いた。だが、彼女達は知ることが出来ただろうか…彼女の乳姉妹であるベン、オウミヨウブや、浴室で彼女の近くに仕える他の婦人達は、彼女の病の真の原因を他の人々よりも早く悟り、彼女達の驚きは限りなかつたが、そのような事は声に出して言うべきではないので、オウミヨウブは、誰も逃れることのできない宿命を嘆き、ただ黙って座していた。結局帝には、悪霊の妨げによって、すぐに体調不良の原因を見抜くことが出来なかつたと報告された。そして周囲の皆がこれで落ち着いた。</p> <p>帝は、今やいっそう優しい気持ちを皇女に抱き、始終彼女の家に使いを送つた、それは一瞬たりとも彼女を暗い考えから逸らさせなかつた。</p>
<p>65 ただ事ではない異様な夢を見た光源氏はわが身に起こる運命を知る</p>	<p>その頃チュウジョウ殿は驚くべき、奇妙な夢を見た。この夢が何を予言するのかわかる為、彼は解釈者を自分のもとに呼んだところ、何か理解できない、全く信じられないことを耳にした。</p> <p>「ですがこの夢は大きな不幸も予言しています、ですから極めて慎重に行動しなければなりません」と解釈者は彼に警告し、ゲンジは、突然はっとして、説明した：「この夢を見たのは私ではなく、全く別の人物です。これが実現するまで、このことを誰にも言わないようお願いいたします。」</p> <p>しかしながら、耳にしたことは彼を最も強い不安に陥れた。</p> <p>「一体これは何を意味しているのだろうか？」</p> <p>そこへ、藤の御殿の皇女に関する噂が彼に届いた。</p> <p>「まさか?…」と思ひ当たるが生じ、最終的に平静を失つて、彼は必死で逢瀬を懇願し始めたが、オウミヨウブは、あらゆることから判断すると、思案の上、今仲介すれば以前よりも計り知れないほど悪い結果になりかねないと結論付けたようだ；ともかく、かつても稀であった短い手紙は全然来なくなつた。</p>
<p>66 七月になり、宮中に帰参した藤壺へ桐壺の帝の寵愛はいっそう増す</p>	<p>7か月たつて皇女はまた宮殿に來た。皇帝はこれを大変喜び、皇帝は彼女に雨のような愛を注いだ。彼女の完璧な身体、顔色の異常な悪さと痩せてしまった身体は、限りなく美しく見えた。皇帝はそう感じた。以前のように彼は時間のゆるす限り彼女と過ごした。そのころの宮殿ではたくさんの催しがあった。源氏はすべてに出席しなければならなかつた。時に彼は笛をふかねばならず、時に他の用事で父の援助をしなければならなかつた。そのような機会には、恐れている様子や心配している様子は絶対に人に見せないようにしていた。しかし何度も、恐れている様子を表にだしてしまつたような気がして怖くなつた。源氏に直面することは皇女にとって針のむしろだつた。</p>
<p>67 光源氏は六条京極から歸る途中に、歸京して療養中の尼君を見舞う</p>	<p>女性の出家者の健康が良くなって都に出てきた。彼女の住まいを見つけ、源氏は事あるごとに彼女のところに伝言を送つた。そのたびに（彼は予測していたことだが）以前と同じく、ほんの少ししか楽しい知らせは無かつた。しかしあの少女に対する源氏の思いは減るどころか日ごとにましていった。月日は過ぎたが状況を変える手段は何も見つからなかつた。秋も終わりに近づき、彼の失望は極限に達した。清らかな月夜の晩、彼は自分の意に反して、秘密にどこかへ行こうと決めると雨が降り出した。彼は自分の宮殿からもう出ていた。彼が行こうとしていた場所は6つ目の部屋の近くだつた。彼は雨の中そんなに遠くに行くのは良くないと思つた。さてどうしようかと思つていた矢先、ぼろぼろの屋敷が彼の目に入った。とても古い木で囲まれていた。彼はコレミツに聞いた。このさびしく人気のない屋敷は誰のものか。コレミツはだいたいいつも彼と一緒にだつた。</p> <p>彼は言つた。</p> <p>「なぜですか。この屋敷はアゼチ ノ ダヤノガンのものです。2、3日前私がそこに行くと、女主人の女性出家者がとても歳を取つて力も亡くなつていなのを見ました。彼女は周りで何が起つているのかすら分らない様子です」</p> <p>これに対して、源氏は酷く狼狽して言つた。</p> <p>「君はもっと早く何故私に教へなかつたんだ。もっとずっと前にここに来て彼女に同情したのに。すぐに言つて状況を聞いてきなさい。」</p> <p>コレミツは使いを送つた。そして状況に応じて、源氏自らご機嫌伺いに來たと伝えなさいと命じた。その使いは中に行つてこの知らせを伝えた。源氏自ら自分をご機嫌伺いに送り、彼が外に立っていると伝えた。すると家中が大騒ぎになつた。使用人たちは、もう何日も女主人の様態は非常に悪く、誰も面会しないと伝えた。しかし、これほど高貴な方を追ひ返す勇気は誰にも無かつた。だから南のあたりを急いで掃除して彼らの中に招き入れ、言つた。</p>

<p>68 病床の尼君は、紫の上が成長した暁には光源氏に託すことを決める</p>	<p>「この汚い部屋にあなたを私たちは座らせている。申し訳ありません。しかしあなたは突然いらした。このような状況で私たちは最前を尽くしました。」</p> <p>源氏はこのような部屋に座ることに慣れていなかった。</p> <p>彼は言った。</p> <p>「私は何日も前からここに来ようと思っていたが、私はある準備のために何度も手紙で申し込んでいたがいつも受け入れてもらえなかった。それで私はがまんできなくなった。あなたの女主人の容態がこんなに酷いことをもっと前に知れなかったことは残念です。彼女に伝えてください。今私の頭はとてはっきりしている。また闇に閉ざされるかもしれないけれど。」</p> <p>この返事に女性の出家者はこう伝えた。</p> <p>「私の病床まであの方がわざわざ来て下さったことに本当に感謝しています。しかし今私はあの方に対面してお話はできません。あの方に言ってください。あの方がいつか私にしたお話についてもしもあの方のお考えが変わってなければ、都合の良い時間にどうぞ彼女を自分の宮殿の侍女として迎えてください。私はひどく心配しながら彼女を後に残して行こうとしています。私にとってもう一つ恐ろしいのは、このような俗世のものへの執着は、私がずっと神に祈ってきた場所にたどり着く障害になるのではないかということです。」</p>
<p>69 光源氏は紫の上の無邪気な声を聞き清純な彼女にいっそうひかれる</p>	<p>女性の出家者の部屋は隣だった。間の幕は非常に薄くて、彼女がショナゴンに伝言していると源氏は彼女のたどたどしく震える声が聞こえるほどだった。この時彼女が誰か他の人に言っているのが聞こえた。</p> <p>「あの方のなんと慈悲深いことでしょうか。ここに来るなんて。ああ、娘があの方に最適な方法でお礼ができる年齢だったら。」</p> <p>源氏はショナゴンに言った。</p> <p>「慈悲の問題ではありません。でも確かなことは、心の深い感情が私にこうするよう勧めるのです。あの少女を始めて目にした日、私の心に奇妙な優しい感情が芽生えました。その思いはとて深く、それが今生の関係とは言えないほどです。それが私の単なる愚かな願いだとしても、彼女の話すのを聞きたいと本当に思うのです。私が行く前に彼女を呼ぶことはできませんか？」</p> <p>ショナゴン。</p> <p>「可哀そうに自分の部屋でぐっすり眠っています。彼女は私たちの現在の困難も全く分かっていないのです。」</p> <p>しかし、その時 キタの方で誰かの足音が聞こえた。そして次の瞬間誰かが話した。</p> <p>「おばあさん、おばあさん、源氏の皇子、山で私たちのところにきた人、ここに来てるんだって。あなたあの方を呼んで何故お話をしないの？」</p> <p>女性たちはみんな驚いて言った。</p> <p>「これ、静かに、静かにしなさい！」</p> <p>娘。</p> <p>「いや、いや。おばあさんが言った。その皇子をみれば具合も良くなるって。私は間違ったことは言っていない。」</p> <p>これを聞いて源氏はとても嬉しくなった。しかし、家の女性たちは少女がこのように間に入ってくるのは良くないし、具合の悪いことだと思った。そして、彼女たちはその子の話を無視した。彼女が最後に言ったことを聞かなかったように。源氏は彼女に会うのをやめにして、帰った。少女の行動は全くの子供だったと思った。それでも、彼女を教育するのは簡単で楽しいことだろう。</p>
<p>70 翌日、光源氏は尼君への見舞いととも紫の上へも結び文をおくる</p>	<p>次の日彼は彼女に会おうとそこに出かけた。そこについて彼は一葉の紙にこのような意味の詩を書いて送った。</p> <p>「サギの子どもの声を初めて聞いた時から私の船は水草に絡まってしまい困っています」</p> <p>この詩はあの幼い少女のために書かれていた。なぜなら彼の文字は大きく太かった。子供の書き方で書かれていた。しかし字は大きくて美しかった。この手紙を見てすぐ中の女性たちは言った。</p> <p>「この手紙はあの少女の書き方の帳面にいれましょう。」</p> <p>ショナゴンは彼にこの伝言を送った。</p> <p>「私の女主人は死期が近いのを感じて、山の寺に行くことを望んでいました。だから彼女をここから送りました。私たちはあなたが来て、お尋ねになったことをあの方に知らせます。もしまだ生きていたら、知らせも受け取れるでしょう。」</p> <p>この手紙に源氏はひどく悲しくなった。</p> <p>秋のこの頃の夕方、彼の心はいつも晴れなかった。彼の意識は別のところにあったが、彼の意識が向いているところの近くにこの少女に関する事があったので、この嵐の日々も彼女を手に入れる願いは日ごとにましていった。彼はあの夕方のことを覚えていた。その日彼は初めてあの少女と女性の出家者の詩を見た。</p> <p>「この柔らかいつばみの世話をしてくれる人がいるかどうか知らないにしても」</p> <p>彼女はいつも楽しくすごせるだろう。自分の少女時代の願いをかなえられないことがいくつかあったとしても。何かしらの危険は冒さざるを得ない。そして彼はその意味の詩を書いた。</p> <p>「沼地のあの黄色い若木の柔らかい草は私の手にいつ入るのでしょうか」</p>
<p>71 十月に朱雀院の行幸が予定され、舞人は練習など多忙な日々を送る</p>	<p>10月に皇帝は赤い葉の祭のために スザカー イン に行くところだった。この祭の機会にもっとも高貴な家柄の男子たちが舞を舞うのだった。皇帝自ら皇子や臣下や他の身分の高い人々の中からもっとも上手な人を踊り手に選んだ。源氏も大臣たちも躍りの練習に忙しかった。</p>

72 尼君の死去という知らせが届き光源氏は母更衣との死別を思い出す	源氏は山にいる友人たちに便りをしなかったことを突然思い出した。すぐに使いを送った。彼は年老いた出家者の手紙をもって戻ってきた。「先月の20日に女性の出家者が亡くなりました。この世に生を受けたものはみな最後にこうなるとはいえ、彼女の死は私にとってショックでした。これ以外に彼はいろいろ書いた」この手紙を読んで源氏は人生の無常と空虚さに悲しんだ。あの少女はどうしただろう、その子の未来について故女性の出家者はとても心配していた。その答えは乳母のシヨナゴンが自分の重要さを誇示し名から書いた。
73 夜、光源氏は自分から、忌みの期間が終わった紫の上の邸を訪れる	葬式とボダシャ儀礼を済ませてから少女は都に連れてこられた。この知らせがあつてからしばらくの間源氏は静かにしていた。その後、ある静かな夜に彼は自らそこに行った。彼はこの憂鬱で荒れた淋しい屋敷は少女の頭脳に酷くわるい影響を与えるだろうと思った。以前のように、彼女をその部屋に座らせた。ここでシヨナゴンが女性の出家者の詩について最初から最後まで泣きながら彼に言って聞かせた。源氏もそれを聞いて泣いてしまった。シヨナゴンは言った。「私は小さいご主人を父親の所に届けます。しかしあの家でこの子の母がどんな酷い目にあつたか私が覚えていないとでもいうのですか？この少女が養女だったら、こうするけれど、この子が何処に連れて行かれてそこの者が彼女をどう思っているか彼女には分からない。しかし、もうこの子は成長したので見ず知らずの男の子たちと一緒に住むことはできないし、昔のように遊べないでしょう。この子の母方の祖母は最期までそう言っていた。あなたは私たちに非常に慈悲をかけてくださる。しばらくの間この子があなたの所へ行くと知って、私の頭の荷物はとても軽くなるので、私は後でどうなるのかを知りたがってあなたを困らせることはしません。ただ私が悲しいのはこの子の歳があまり上でなく、あなたにふさわしくないということです。育ち方のせい、歳のわりに子供っぽい娘です。」
74 光源氏は少納言の乳母に紫の上への気持ちを伝えて歌を詠み交わす	源氏。 「君は何度も彼女の歳についてなぜ私に聞かせるの？彼女の年齢と身よりのない境遇から私は心から可哀そうと思うのだよ。それでも、このことは君に隠したくないのだが、私たちの魂はそれよりももっと密接な関係で結ばれている。私は彼女に少し言いたいのだ、その関係について私たちがどんな決定をしたのかを。」その後彼はこのような意味の詩を詠んだ。そこで尋ねていることは、もしも 「彼女がああのように後ろに戻るためだけに前に進むのなら、海岸に茂る野生の草木を身にまとうためにあちらに行く」 彼は言った。 「これに彼女はとても驚くだろうか」 少女を連れてきましょうと言いながらシヨナゴンは詩をとおして彼に警告した。あなたは期待しないほうがいい。あなたの思いを理解する前に彼女は海の水草のように波にあちこち揺れ始めるでしょう。その後で言った 「彼女に会わせないで私があなたを行かせるとでもおもったのですか」 上記の話でシヨナゴンは優しくしかしつっけんどんに言ったが、源氏は彼女のつっけんどんな言い方を全く気にしていなかった。 源氏はあの少女を待って座っている間、このような意味の詩を心の中で呟いていた。 「山を越えるのはなぜこんなに大変なのか」 その時の彼の深刻な姿がその屋敷の高貴な男性たちに衝撃を与えた。そしていつまでも彼らはその衝撃を忘れられなかった。
75 尼君を恋い慕って泣く紫の上は、訪問した光源氏を父と勘違いする	少女は自分の床に横になっておばあさんを思い出して泣いていた。彼女の世話をしていた女性たちの中から誰かが言った。 「とても偉い人が君と遊びに来ました。たぶんあなたのお父さんです。」 これを聞いてすぐ彼女は床から跳ね起きて言った。 「乳母、その偉い人は何処？それは私のお父さんなの？」 こう言って彼女は走って部屋に入ってきた。
76 少納言の乳母は紫の上を年よりも幼い様子であると光源氏に伝える	源氏は言った。 「ちがうよ。君のお父さんじゃない。でも別の人で、君に愛してほしいと思っている。こっちにおいで。」 源氏についてみんなが言っていることから彼女は源氏がとても偉い人だということしか分からなかった。だから彼女の心に恐れが生まれた。彼に関して自分が使った言葉で彼は絶対に怒るだろうと。それで彼女はまっすぐ乳母の所へ行って言った。 「私は眠い」 源氏。 「君はもう私に恥ずかしがってはいけないよ。もし眠いならここに来て私の膝で眠りなさい。君は私のそばにきて私とお話もしたくないの？」 シヨナゴン。 「分かりましたか、この子はこんな野生の少女なんです」 そう言って彼女は少女を源氏のほうに行かせた。 彼女は黙って源氏の隣に立っていた。自分の髪をいじりだした。それで彼女の柔らかい着物の上に東のように広がり、彼女の方にブランコのようにぶら下がった。

77 幼い紫の上の手を強引にとらえる光源氏に少納言の乳母は困惑する	<p>源氏は彼女の手を自分の手に取った。あまり知らない人とこの恐ろしい面会で彼女はなんだか怖くなって叫び出した。</p> <p>「私は寝に行きたいって言ったでしょ。」</p> <p>こう言って、自分の手を振りほどいた。キタの方?の方に逃げた。</p> <p>源氏はこういいながら彼女を追いかけた。</p> <p>「愛しい人、こんなふうには私から逃げないでください。おばあさまが逝ってしまった後、彼女の変わりに君は私を愛しなさい」</p> <p>源氏のこの最後の言葉でシヨナゴンは衝撃を受けた。彼女は言った。</p> <p>「いいえ、それは全く間違っています。このような悪い事をあの少女に言う勇氣はどこからでたんですか。誰々を愛しなさいなんて、人に言うべきことではありません。」</p> <p>源氏。</p> <p>「今これが適切でないとしても、もしも誰かの心が何かしらの物にぶつかってしまったら、つまり私の心がこの少女にぶつかってしまっているようにね、すると、この世ではおかしいことが起こるものなんですよ、あなたも目の当たりにするでしょうね。」</p>
78 あられが降り風が激しく吹く夜、光源氏は紫の上の御帳の中に入る	<p>アラレが降っていた。夜はとても恐ろしかった。あの少女をあの手荒れて憂鬱な屋敷に残すことが気がかりで苛まれていた。彼女の近くにいる口実として彼はこんなふうにした。</p> <p>「仕切りの戸を閉めてください。私はここにすることにします、この恐ろしい夜にあなたの警護をしますよ。みなさん、私の近くに集まって来ててください。」</p> <p>こう言って、彼は少女をこんなふうにはぎに抱えた、あたかもこれはとても自然で普通のことのように。そして彼女を自分の寝台に置いた。家の女性たちはあまりに驚きおびえたため、自分の場所から身動き一つ出来なくなった。</p>
79 少納言の乳母がため息をつく中、光源氏は紫の上に一晩中寄り添う	<p>シヨナゴンは彼のこの自由奔放な振る舞いに激昂していたが、心の中でこう思った。このことに干渉するいかなる現実的な理由もないと。そして隅に座って泣き続けていた。幼い少女は最初はとても怖かった。彼が自分と何をしているのか分からなかった。彼女は酷く震えた。彼が彼女を持ち上げた時の、彼の肌の柔らかく冷たい感触で彼女は身の毛がよだった。彼は狙いをつけた。しかし彼はゆっくりそして慎重に彼女の上の服を脱がせて、彼女を横たえた。その後、彼は彼女と一緒に優しく、ゆっくりと話を始めた。しかし彼女が今このときもまだ自分を恐れていると分かっていた。彼は尋ねた。</p> <p>「君はいつか私の所に来たいと思うかな。そこには美しい絵やおもちゃや車もあるけど？」</p> <p>その少女がとても興味がありそうなものについて彼はとても優しく話をし始めた。それで、すぐに彼女は彼と仲良くなった。それでもかなり長い間彼女は不安だったので眠くならなかった。</p>
80 女房たちは、悪天候の中での光源氏の訪問が心細さを慰めたと話す	<p>嵐は続いていた。女性の中のひとりが言った。</p> <p>「もしこの紳士がここにいなかったら、私たちはどうなっていたらろう。私は怖くてもうだめ。私たちのこの主人が彼の歳に近かったらよかったのに！」</p> <p>シヨナゴンは源氏を全面的には信用していなかった。だからいつも彼女の近くに座っていた。</p> <p>ついに、嵐の勢いも収まり始めた。夜はとても更けてしまった。それでもこのくらの夜更けならもどつても誰も驚くようなものでもなかった。源氏は言った。</p> <p>「この子は私をこんなに好いてくれました。他の事はさておき、彼女の人生のこの悲しい時期に、ほんのひとときの間であっても、彼女を独り残していくことに私の心は震えている。私が好きな時に彼女を見れる場所に、彼女を置きたいと思うのです。荒れた地でも彼女が怖がらないのが私には一番驚きだ。」</p>
81 尼君の四十九日後に、兵部卿宮は紫の上を邸に引き取る意向を示す	<p>シヨナゴン。</p> <p>「彼女の父が連れにくるところでした。しかし49日の前にはできません。」</p> <p>源氏。</p> <p>「通常なら彼女の父が彼女の面倒をみるのもいいが、彼女の世話は何の人もがしたわけだし、彼女が私よりも父親を気にかける理由は私には見つからない。私が彼女とかかわったのは少し前からだけど、私が彼女を思う気持ちは彼女の父には無いものだ。」</p> <p>こう言って彼は少女の髪を撫でた。そして何度も彼女を見ながら、しぶしぶ部屋から外へ出た。</p>
82 紫の上と別れた後、光源氏はかつて通った女性の家の門を叩かせる	<p>四方は濃い霧に包まれていた。菜の花にはアラレが厚く重なっていた。突然彼の心にこの熱い思いがこみ上げた。彼女と私が本当に恋人の関係だったらいいのに。こう考えて怒りが生まれた。道中で彼は以前よく通っていた屋敷に出くわした。彼は戸をノックしたが、何の返事もなかった。すると彼は使いの者に、声の大きい者だったが、この詩を大声で読むように言った。</p> <p>「朝の霧が世には立ち込めているが、私は妹の戸口に止まることを止められない。」</p> <p>彼がこの詩を2回繰り返すと、屋敷の女主人は無礼で愚かな使いを戸口に送った。彼はこう言った。</p> <p>「もしこの場所を囲んで立っている霧が嫌いなら、木の枝の門は道行く君を止めて立ったままにはしていないだろう。」</p> <p>彼はまた中に行ってしまった。彼はそこにとどまったが、誰も他に戸口まで来なかった。日の光がさしていたので彼は悲しそうな顔で家に帰りたくなかった。でもどうしようもなかった。</p>
83 光源氏は紫の上のかわいらしい面影が恋しくて文を書き絵をおくる	<p>自分の宮殿で彼は少女のことや彼女の振る舞いを思いだして横になりながら微笑んでいた。屋間に起きて、彼は彼女に手紙を書き座ったがよい言葉が思い浮かばなかった。何度も筆を唇にあてて考えた後彼女の所になにか美しい絵を送ることに決めた。</p>

84 父兵部卿宮は少納言の乳母に、紫の上を引き取ることをうち明ける	古い約束を果たすためにその日ヒヨブキヨ皇子は女性の出家者の屋敷に訪れた。数年前に比べて屋敷はもっと荒れて廃墟のように見えた。この崩れそうな大きな部屋々に数少ない人間が住むのはひどく悲しく憂鬱に感じることだろう。四方を見て彼は乳母に言った。「この屋敷は一瞬でも子供が住むところではない。私は彼女を自分といっしょに連れて行く。私の屋敷に部屋がたくさんある。(シヨナゴンのほうをむいて)君はそこで侍女の位を得るだろう。少女はそこで幸せに暮らすだろうなぜなら彼女の遊び相手にたくさんの子供がいるから。」
85 紫の上の着物がしおれているのを目にした兵部卿宮は、娘を憐れむ	彼は少女を自分のそばに呼んだ。より源氏が彼女を膝に抱いたので彼女の服には香水の香りがついていた。その良い香りをかいで彼は言った。「君の服はなんと素敵な香水がついていることか。しかしこの服は汚いな」こう言ってすぐ彼は思いだした。彼女は祖母の喪に服しているのだと。彼は少し恥ずかしくなった。彼は言った。「私は彼女の祖母に何度も言っていたんです。この子が私たちの暮らし方になれるように私のところに送るようにと。日に日に健康を失っていく人と一緒に子供を育てたりしつけたりするのはどうしたってきちんとはできないのです。しかしなんらかのことであの方は私に良い態度を取らなかった。それに(ヒヨブキヨの)第二夫人のほうでもあまりそれをのぞんでいなかった。今の状況もそれほど変わったようには私には思えない。」この返事にシヨナゴンは言った。「そういうことならば、まったく悪いことかもしれないけれど、彼女が自らどこかへ行ける歳になるまでここから外に出してはいけない。」
86 少納言の乳母の言葉と紫の上の様子に兵部卿宮はもらい泣きをする	少女はずっと悲嘆にくれていた。何日間も何も食べないので、ひどく痩せて顔色も悪かった。しかし彼女の美しさは変わらなかった。彼女の父は愛おしそうに彼女を見て言った。「もう泣いたりしてはいけないよ。人々が死ぬことを私たちが止めることはできない。我慢して耐えなければならぬ。それに代わりに私が来たんだから、もう全部大丈夫でしょう。」もう遅くなってしまっていたので、彼はもうあまり長く居られなかった。彼が出発しようと振り向くと彼はみた。自分が面倒みる話をしたのに、少女は全く落ち着いた様子もなく、そればかりかもっとひどく泣き始めた。彼女の父の目にも涙があふれたが、一生懸命彼女を落ちつけようとした。彼は言った。「そんなにおびえないで。1,2日のうちに君を私の所に連れて人を送るからね」こう言って、彼は行ってしまった。しかし少女は泣き続けた。どうやっても彼女の気を紛らわすことはできなかった。
87 紫の上は幼いながらも、自分の身の上と今後の事を思っ涙を流す	自分の将来を心配して泣いていたのではなかった。なぜならそのことを考えられるほど彼女は大きくなかった。彼女の悲しみの原因は祖母との別れだった。こんなに長い間一瞬も離れたことがなかったのだから。子供なのに、遊びも何もすべて忘れるほどとても悲しかった。日中は彼女の様子もまあよかったが、夜になるとすぐ、こんな状態がいつまで続くのだろうとシヨナゴンが怖くなるほど彼女は悲嘆にくれた。ついにどうやっても落ち着かせることができず彼女も泣いてしまった。
88 光源氏は宮中へ行く自分の代わりに、惟光を紫の上の屋敷に遣わす	その時、コレミツが来た。彼は言った。「源氏は自らいらっしゃる予定でしたが、王宮に緊急に呼ばれてしまい、ご自身は来れなくなりました。しかし、少女の悲嘆にくれた様子を非常に当惑されています。だから、様子をお尋ねに私を送りました。ここの夜の見張りのために使用人も一緒に送られました。」シヨナゴン「このようなご慈悲はよろしくありません。この見張り番たちをここに置くのはあの方にとっては何でもないことですが、もし少女の父にこの事が知れたら、彼はすべて私たちのせいにするでしょう。私たちが少女を既婚者にあづけようとしていると。彼は、すべて私たちの仕組んだことだと言うでしょう。」彼女は仲間の乳母のほうを見て言った。「この見張り番の話について彼女の父の耳に入らないように注意なさい。少女もこの事を父に話さないように。しかし残念なのは、少女がこのような言いつけを理解できないということです。」
89 少納言の乳母は、屋敷を訪問した惟光へ自分の考えと不安を訴える	この後、コレミツにさまざまな泣き言をして、こう言った。「時がくればこの子があの方の妻になることにまったく疑いはありません。二人の運命にはそう書いてあるのです。しかししばらくの間はこのような話は全くしないほうがいい。あの方がいろいろと私におっしゃったことはここに他の者も含めよく理解しております。でも、今あの方が何を欲しているのか私には理解できません。今日ヒヨブキヨ皇子がここに来ました。少女にしっかりと目を光らせているようにと命じられました。彼女にいかなるうかつな行動あつてはならないと。その時私は気になったのですが、よく考えもしないであなたのご主人の自由にさせてしまったのは良いこととは言えない。」言うことはすべて言ってしまったが、次の瞬間、こう思われた。コレミツが私の言葉を誤解してあの方にどんな風に間違っって伝えるか知れない。だから彼女は黙ってしまった。彼女の考えはそれほど間違っってもいなかった。なぜならコレミツは源氏はいったい少女に対してどんな罪を犯したのかと考えていたからだ。

<p>90 光源氏は惟光から父兵部卿宮が紫の上を引き取る予定であると聞く</p>	<p>コレミツからすべてを聞いて源氏のころはあの時自分が行っていればと少女が可哀そうになった。しかし彼は思いついた。愚かな者たちは、私が何度も行ったり来たりするのを勘違いして少女の歳を現実よりも大きく思って、いろいろと彼女の悪い評判を流すだろう。だから彼女をこの宮殿につれてきてここにおくほうが適当だろう。日中に彼は手紙を何通も送った。夕方コレミツはまた行き言った。 「重要な仕事ができしまい、あの方は来られませんでした。この失礼をあの方は詫びています。」 ショナゴンは本当のことを返事に言った。 「少女の父が明日連れに来るでしょう。私たちもとても忙しいので、どんなご訪問者にも会うことができません。この屋敷はとても長い間住んできました。この汚れて、荒れ果てた屋敷を後にして新しくとても大きな屋敷に行くと考えたと使用人たちも浮き足立っています。」 彼の別の質問の答えも彼女は完結に言った。コレミツが諦めて帰ってしまうほど、彼女は縫い物に忙しくしていた。</p>
<p>91 左大臣邸に来ている光源氏は惟光に紫の上を連れ出すことを命じる</p>	<p>源氏は妻の実家にいた。しかしいつものように妻は口も開かなかった。憂鬱になり、彼は笛を出して静かに奏でていた。 「この雨の夜に君はなぜそんなに急いで畑や山を横切っていくのか」 歌の言葉はアヴォイーのためだった。源氏はとても悲しそうに歌っていた。彼がこんな風をしているところにコレミツがきた。源氏はすぐに彼を近くに呼び、あちらの様子を尋ねた。コレミツが持ってきた伝言は大変心配なものだった。父の家に行ってしまったら少女が了解しても源氏が彼女を自分の所につれてくるのは不適當で難しいだろう。源氏は泥棒のように彼女を略奪したと人は言うだろう。そうならば、いっそ、こうした方がいい。あちらの人たちに黙る約束をさせて、彼女の父が到着する前に彼女を宮殿に連れて来よう。 彼はコレミツに言った。 「私は明日の早朝あちらに行く。ここまで私が乗ってきた車に朝までここにいるように言いなさい。今の状態のままに役にはたつだろう。2, 4人の供も連れて行こう。」 コレミツは頭を下げて命令を受け、行ってしまった。 源氏はよく分かっていた。どんな道をとったにせよ、この事が人々の耳にはいったら彼女の汚名がひろがるだろう。絶対にこんなうわさでもちきりになるだろう。まだ幼いのにあの少女はなんと頭の良いことだろう。源氏の皇子が彼女を自分の宮殿に住まわせるなんて、どんな目的で連れてきたのか。人々には勝手に言わせておけ。そんなこと心配するべきではない。しかしそれよりももっとひどくなる可能性もある。もしヒヨブキヨ皇子に彼女のいる場所がわかってしまったら、どうなるだろう？他人の女の子をこんな風に無理に連れて行くのはとても悪く非難されることだろう。彼はとても恐れていたが、もしこの機を逃したら後でとても後悔することも分かっていた。だから夜明け前に彼は出かけた。アヴォイーは前と同じく憂鬱そうで機嫌がわるかった。</p>
<p>92 思案のあげく、光源氏は滞在中の左大臣邸から夜明け前に出かける</p>	<p>源氏は彼女に言った。 「たった今とても大切な仕事を思い出した。絶対にやっしまわなければならないんだ。本当にすぐに戻ってくるからね。」 こう言って彼はこっそりとでて行った。彼が行くのを使用人たちにも分からないように。彼の服は彼の部屋から持ってこられていた。彼は車にのって出かけた。彼と一緒になのはコレミツだけで、馬に乗っていた。</p>
<p>93 少納言の乳母が応対に出るものの光源氏は制止も聞かずに奥へ入る</p>	<p>長い間ノックしてやっと、門が開いた。しかし、戸を開けた使用人は彼の秘密を知る者ではなかった。コレミツは源氏の車をゆっくりと中に引き入れるように言い、自分は戸口に着いた。ショナゴンに自分だと分かるように彼は大きく咳払いをした。彼女が戸口に来るとコレミツは言った。 「私のご主人がお待ちです」 ショナゴンは、源氏は夜中どちらかでお過ごしになってこちらにお越しになったのだらうと思った。彼に彼女は言った。 「少女はもうぐっすり寝ています。あの方はこんなに朝早くこちらになぜこなければならなかったのでしょうか」 その時源氏が前に現れて言った。 「彼女が父の家に行く」と聞いた。あそこに行く前に私は彼女にどうしても少々言わなければならないことがある。」 ショナゴンは不快な表情をして言った。 「あなたがどんなに大切なことを言っても、彼女はちゃんと聞きませんよ！ 10歳の少女に大切な話って！」 源氏は北の方に行った。ショナゴンは困って言った。 「そちらにはいかないでください。そこでは老女がたくさん服も着ないで寝ているんです」 源氏。 「みんなぐっすり眠っているよ。私は少女だけを起こします」 こう言って、彼は彼女の前にかがんで言った。 「朝の霧がはれていきます。起きる時間になりました」 そしてショナゴンが何か言う前に</p>

<p>94 光源氏は父宮の使いであると嘘をついて、寝ている紫の上を起こす</p>	<p>彼は少女を膝に抱えて起こそうとした。寝ぼけながら少女は父が連れに来たのだと思った。彼女の髪をなでながら源氏は言った。 「行こう、君の父が君を連れてくるように私を送ったんだよ。」 そこに父がいないのをみて彼女は一瞬怖がって、恐怖ですすり泣きを始めた。 源氏は言った。 「お父さんであっても、私であっても同じことだ」 そう言って、彼は彼女を抱き上げ、北の方から外に連れてきた。 コレミツとシヨナゴンはふたりともいったい源氏はどうするつもりだと怖くなった。</p>
<p>95 二条院へ誰か来るようにと指示して、光源氏は紫の上を連れて行く</p>	<p>源氏は言った。 「あの日、私が、ここに来て彼女に会うのは私にとって都合が悪いから私は彼女を私が好きな時に行き来できる場所に起きたいと言ったとき、君は心配そうだった。君は、私が行ったり、彼女を見たりするのが難しいばかりか不可能な場所に彼女を送りたがっていると私は知った。だから……。君たちの中から何人か私と一緒にいく準備をしなさい」 シヨナゴンは彼が少女を奪っていくつもりなのだと分かった。彼女はとても困って言った。 「あなたはとても悪い日を選びました。今日彼女の父が連れにくるのです。私たちはあの方になんとお答えしましょう？数日待ってください、全部都合をつけますから、私を信じてください。でも、こんな風に急いでもあなたにとっていい事はありません。ここの使用人たちも困ってしまいます」 源氏。 「それだけの事なら、その者たちは急いで私についてくればいい」 そういって彼は車を中に呼んだ。少女は我慢できなくて泣いていた。彼の望みに反することはできないとあきらめ、シヨナゴンは少女に急いで着物を着せて、自分も着物を着て彼と一緒に車に座った。</p>
<p>96 少納言の乳母は困惑するもの紫の上のことを思っ て涙をこらえる</p>	<p>源氏の宮殿はそれほど遠くなかったので、日の出前に彼らはそこに着いた。西の殿？の前について車を止めた。源氏は車を降りた。少女をゆっくりと車からおろして、地に立たせた。シヨナゴンはすべてが夢のように感じた。彼女は家に入ろうかどうしようか考えていた。 源氏は言った。 「君がいやなら君がくる必要はない。少女はここに無事到着した。もう私のやることは終わった。もし君が戻りたいのなら、私が君を送らせます。」 どうしようもなくなり、彼女は車から降りた。すべてがあっという間に起こり、彼女が驚くには十分だった。それとともに、彼女はこの心配に苛まれていた。ヒヨキヨの皇子が娘がいなくなったと知ったら、あの方はどうお考えになるだろうと。それに、この哀れな子はいったいどうなるのかと。さまざまな事情で私の女主人はみな私から離されていく。そういって彼女は泣いた。ずいぶん長い間泣き続け、失望すると、彼女は泣きやみ祈り始めた。</p>
<p>97 紫の上のために、光源氏は通常は使わない対屋に調度などを整える</p>	<p>西の殿はもうずっと前から空いていた。そこには必要な物なども無かった。しかしコレミツがすぐにすべての必要なものを揃えた。幕の必要な場所には幕が下げられた。源氏のためにも公式の幕が張られ、仮の準備が整えられた。夜の身の回りの物を取り寄せて寝に行った。</p>
<p>98 二条院へ連れてこられた紫の上は、気が悪くなり 体をふるわせる</p>	<p>そこからほんの少し離れたところに少女の床があった。彼女を寝かしつけたが、この新しい環境に彼女は酷く不安で打ちのめされていた。彼女の唇は震えていたが、大声で泣いたり、何か言う勇氣も出なかった。ついに彼女は子供のようにおずおずと言った。 「私はシヨナゴンと一緒に寝たい」 源氏。 「君はもう大人なんだから、乳母と一緒に寝るのは良くないでしょう？今いるところで黙って寝よう努めなさい。」 彼女は一人ぼっちで酷く悲しくなり、いつまでも泣いていた。シヨナゴンはあまりに怖くて寝床にも入れなかった。彼女は使用人の部屋に夜中座って泣き嘆いていた。彼女は周りで何が起きているのかも知らなかった。</p>
<p>99 少納言の乳母は、輝くばかりの立派な二条院で間の悪い思いをする</p>	<p>朝になるとすぐに、彼女は少女を探した。この大きな宮殿の柱や彫刻はまたとなく素晴らしいものだったばかりだった、そればかりか庭の土は宝石のように輝いていた。目が眩んで彼女は怖いくらいだった。それでも、彼女は北の方に送られなかったのでほっとしていた。 その時、屋敷にたくさんの人が外から仕事にやってきた。彼女の窓の外を何人かが行き来していた。ある人がもう一人の耳にこういつているのを彼女は聞いた。 「この殿？に新しい人が住みに来た」とみんな言っている。いったいどんな人たちだろう。高貴な女性ということは言えるけど」 その時、屋敷にたくさんの人が外から仕事にやってきた。彼女の窓の外を何人かが行き来していた。ある人がもう一人の耳にこういつているのを彼女は聞いた。「この辺りに新しい人が住みに来た」とみんな言っている。いったいどんな人たちだろう。高貴な女性ということは言えるけど」</p>

<p>100 かわいらしい女童を呼び寄せた光源氏は休んでいた紫の上を起こす</p>	<p>別の辺りから入浴用の水と軽食の米が持ってこられた。源氏はとても遅く起きた。彼はシヨナゴンに言った。  「少女を独りにしておくのは良くないだろうから、君の所へ行く前に、私はここに来て一緒に住むように女の子を何人か用意しておいた」  そう言って、彼は女の子たちを呼ぶように東の辺りに使いを送った。彼はできるかぎり若い少女を連れてくるよう命じた。彼の命令通り、4人の本当に幼いかわいらしくて美しい少女たちがそこに到着した。  ムラサキは源氏の上着にくるまって、その時まで寝ていた。源氏は大変苦労して彼女を起こした。  彼は言った。  「もう悲しんではいけないよ。もし私が君をこんなに好きでなかったら、何故こんなに君の面倒をみるだろう。この小さな女の子たちは何でも君の言うことを聞くよ。君と一緒に楽しく過ごすでしょう」  このようにムラサキの教育は始まった。</p>
<p>101 紫の上の気をひこうと、光源氏は面白い絵などを見せて相手をする</p>	<p>やっと源氏は彼女をゆったりと見たり、知ったりする機会を得た。彼が思っていた以上に彼女が美しいことに気付いた。まもなく二人の間には愛にあふれた話が始まった。彼は彼女のために非常に良い絵やおもちゃを取り寄せた。彼は彼女を喜ばせておくためにあらゆる努力をしはじめた。すこしづつ彼は彼女にみだしなみを教えた。濃い茶色の普通の服を着ていても彼女はとても美しく見えた。彼女は一日中楽しく笑い、遊ぶ。彼女は悲しいことはすべて忘れた。源氏も彼女を見るととても楽しかった。</p>
<p>102 紫の上は光源氏が留守にしている間に、二条院のあちこちを見回す</p>	<p>最後に彼が東の辺りに行くと、ムラサキは外にでて庭に出た。彼女は木々の中を歩き回り、湖の岸を行き、絵のように美しい霞に包まれた花の若木を見て、色とりどりの服で着飾った人々がずっと屋敷を出たり入ったりするのを見る。このすべてのことから彼女の心はここは絶対に一番よい場所だと思った。その後彼女はたくさん戸や幕に描かれた絵を見てそれに夢中になった。</p>
<p>103 留守にする光源氏は紫の上のために手習いの手本などを残していく</p>	<p>2、3日源氏は玉宮に行かなかった。昼夜あの少女を楽しませるのに忙しかった。彼女の帳面に入れるために彼は様々な絵を書いた。彼はひとつひとつ絵を見せてから帳面に入れた。そんなに美しい絵を彼女は見たことがなかった。その後、彼はムサシーの詩を何行か書いた。紙を黄色に染めて太い文字で書かれたその詩をみて彼女はとても嬉しくなった。小さい文字でこんな意味の詩を書いた。  「木の祖先を私は見れないけれど、私はその子孫、ムサシーの湿原に茂る露のついた若木を心から愛している。」</p>
<p>104 光源氏は紫の上へ手習いを教え、人形などの家を作って一緒に遊ぶ</p>	<p>彼女がその詩を褒めると源氏は言った。  「君も何か書かないといけないよ」  彼女は言った。  「私はまだきちんと書けないの。」  こう言って彼女は無意識に彼のほうを流し目で見たので、源氏は笑ってしまった。  言った。彼は言った。  「上手に書けなくてもすぐにあきらめるものではない。私が君に書き方を教えてあげよう」  彼女は何度も彼の方をおどした目で見て書き始めた。無邪気に筆を握る姿にも源氏は説明できないほどの強い喜びを感じた。突然彼女が言い出した。  「あっ、間違えてしまった」  そして書いたものを恥ずかしがってかくしてしまった。しかし源氏は彼女からむりやり帳面を取って見た。そこにはこんな意味の詩が書いてあった。  「私は知らない、ムサシーが君の頭になにを吹き込んだのか。私はとても驚いている。君が私の関係者だというのはどんな木なのか。」  子供のような書き方だった。まだ成熟していないが、それを見て懸念が生まれた。亡くなった女性の出家者の字にとても良く似ていた。良い紙に彼女は美しい文字を書くことができると彼は確信した。  次の日、みんなは人形のために家を作った。そして二人はその遊びをいつまでも遊んでいた。源氏は頭に渦巻く心配事を忘れてしまった。</p>
<p>105 事情を知らぬ兵部卿宮は紫の上の失踪を嘆き、少納言の乳母を疑う</p>	<p>ヒヨブキヨ皇子が彼女を連れにくるとムラサキの屋敷に残った使用人たちは非常に恐れてしまった。源氏はその者たちになにがあっても決して口を割らないと約束させた。シヨナゴンもそのほうがいと良く分かっていた。だから、シヨナゴンが少女をつれてどこかへ行ったことと彼女がそのことについて何も言っていかなかったこと以外彼らは何も知ることができなかった。ムラサキの父はびっくり仰天して負けてしまった。彼は思った。  「たぶん、祖母が乳母をこう洗脳したのだろう、父の家では彼女はよく扱われないだろうと。このような状況ですべてを明らかにする絶好の機会を得るやいなや彼女はうまく少女を連れて逃げた。彼はとても悲しく家にもどった。行くときに言った。少女の知らせが入ったらすぐに私に知らせるようにと。それで使用人たちはもっと怖がってしまった。彼は山に行つて寺の出家者にも聞いてみたが、何も分からなかった。その少女がとても純粋でかわいらしく思われた。こんな風に彼女を失いかねは失望した。</p>
<p>106 継母の北の方は、紫の上を意のままにできなくなったのを残念がる</p>	<p>彼の妻の気持ちは少女の母の方からずっと前が変わってしまった。それで、彼が非常に悲しかったのは、少女に対する義務を果たせなかったことと彼が信じてもらえなかったことだった。</p>

<p>107 紫の上は尼君を慕って泣く時があるものの、光源氏にもなれ親しむ</p>	<p>だんだんとムラサキの使用人は全員彼女の新しい住まい、つまり源氏の屋敷にやってきた。ムラサキの遊び相手として連れてこられていた少女たちは新しい仲間をととても嬉しがった。みんなとても仲良く遊んでいた。時々皇子が仕事に忙しくしている時やいない時、さびしい夕方には祖母を思い出して彼女は泣いた。しかし彼女は父親のことは全く心配していなかった。なぜなら彼を一、二回見ただけで、親しくなかったからだろうか？でも今は新しい父がいて、彼に対して日に日に愛情が増していた。</p>
<p>108 光源氏は、かわいらしい紫の上を「風変わりな秘蔵っ子」だと思う</p>	<p>源氏がどこか外から来ると、一番初めにムラサキが彼のそばに行き、二人は遊びやお話を始めた。何の恥じらいも戸惑いもなく彼女は彼の膝に座った。彼よりも魅力的な友人を想像することすらできなかった。歳が大きくなったら、こんなにゆっくりできないかもしれない。彼女の振る舞いに新しい成熟さが増していく頃には。例えば、源氏がだれかほかの女性を好きなのではないかという疑いがあると、彼女はひどく嫌な気分がして、そんな時は様々な予期しないことが起こりえる。しかし今彼女は楽しい、娯楽の対象だった。もし彼女が彼の娘だったら社会のしきたりに従って彼は彼女とこんなに密接に暮らせなかっただろうが、ここではそのような配慮は必要ないと彼は思っていた。</p>

●ウルドゥー語訳『源氏物語』「若紫」データ

小見出し	ウルドゥー語訳 (Pandey 訳)
1 瘡病をわずらった光源氏はすすめにより北山の聖のもとへ出かける	彼は瘡に見舞われた。どんなドゥアー（祈り）やターヴィーズ（護符）もまったく効果がなく、何度も熱がぶり返していると、ある人が、北の山のとある寺院に、ひとりのとても聖く、碩学な人物が住んでいて、昨年の夏に（この病気が大流行して、通常のお祓いでは何の効果もなかった時に）人々を何とも奇妙な方法で治したのです、と言った。助言をした者が言った。 「時間を無駄にははいけません。効き目のない治療の後に、さらに別の治療をすると、その間、病気はさらに重くなります」。彼はすぐさま、その聖者を選んでくるとある者を遣わした。彼は、老齢のせいでもどこへも行き来することができないのです、と伝言を送った。源氏は考えた。 「さあ、どうしたものか？ わたしが彼のもとを密かに訪ねよう」。 そして3、4人の信頼のおける従者を供に連れて、まだ夜が明ける前に出発した。その場所は遠い山々の中にあった。
2 聖は、峰が高い山に囲まれた奥深いところに籠り、修行をしている	3月の末日だった。都の花はすっかり落下してしまっていた。野生のイヌナツメは未だに実をつけていなかったが、彼が平野に差し掛かると、霧がなんとも不思議で美しい雰囲気醸し出していた。身分が高いせいで、彼の言動は厳しく制限されていて、このような美しい景色を見たことがなかったので、彼はこれにとっても喜んだ。彼は寺院も大変気に入った。聖い老人は岩の高い壁を切り出した深い洞窟の中に住んでいた。
3 光源氏は自分を誰とも知らせず、驚き騒ぐ聖から加持祈禱を受ける	源氏は自分の名を明かさず、巧みに変装もしていたが、彼の顔はとても有名だったので僧はすぐさま気が付いた。 彼は言った。 「お許し下さい。昨日、あなたがわたしをお呼びになったのですね？ 悲しいかな、わたしはもはや、この世の事はまったく考えられないのです。それに、病をどうやって治すのか忘れてしまったのです。あなたにこれほど遠くまで足を運んでいただいて、本当に申し訳ない限りです」。 そして、とても困惑していることを明らかにしながら、笑顔で源氏の方を見やした。しかし、すぐさま彼が大変碩学で賢い人であることが判明した。彼はいくつかのターヴィーズを書いて身に付けさせると、マントラ（呪文）を唱えた。それらすべてが済む頃には太陽が昇っていた。
4 光源氏は高い所から見た目がきちんとしてきれいな僧坊を見つめる	源氏は少し外へ出て、洞窟の四方を見渡した。彼が立っている高地からは、下の方にあちこちに広がったハーンカー（イスラム教のスーフィーたちが共同生活をする修行場）が見えた。山道が、曲線を描きながら、四方を低木で囲われた一軒の美しい苦屋の傍まで続いていた。そこから遠く、しかし幾分か広く見える、影のできた道が外へ向かって伸びていた。その道の若木は、あちらこちら剪定されて整えられていた。彼は、これは誰の屋敷か、と尋ねた。彼の従者のうちのひとりが、ここには二年前からひとりのサードゥー（修行者）が住んでいる、と教えた。サードゥーの名前を聞いて、源氏が言った。 「わたしは彼をよく知っている。しかし、わたしのこの服とこの恰好では、彼に会うのは好ましくないだろう。わたしに来ていることを、彼が耳にすらしなければいいのだが」
5 なにかし僧都の僧坊で、光源氏は若い女性と子どもたちの姿を見る	ちょうどその時、上等な服に身を包んだ子供たちの一団がその屋敷から出てくると、礼拝所と仏像を飾るために使う花を摘み始めた。源氏の部下の中の誰かが言った。 「あの中には、少女たちもいます。わたしには、彼女たちが聖い老人のところに住んでいるとは思えません。とすると、誰なのでしょう」。 そして自分の探求心を満たすため、その人は少しばかりそちらへ行くと、彼女たちを凝視し始めた。戻ってくると、彼は言った。 「ええ、あの中にはとても美しい少女たちもいますよ。中には大きな娘もいれば、また全くの子どももいます」
6 供人たちは病を気にする光源氏を、気分転換のために外へ連れ出す	朝のほとんどを、源氏は投薬や治療に費やした。やっとその一連のことが済むと、彼の従者のひとりが、彼が熱を出す時間が近づいていることを恐れて、彼の意識をあちこちに集中させるため、山のあちら側の都の見える場所へ連れて行った。
7 光源氏は後ろの山から、遠くまでずっと霞がかかった景色を眺める	源氏は喜んで言った。「霧のもやに沈んだ空間と、四方に散らばる光り輝く木々の霞んだ姿が、なんと美しいことか！ こんな場所に住む人は、一瞬たりとて悲しみに暮れることなどないだろう！」。彼の従者の中のひとりが言った。「こんなものは何でもありません。もし、他の地域の山や湖を見ることができたら、あなたがお気に召したこれを、それらがいかにも凄いでいるか、自ずとわかるでしょうに」。そして、彼はまず富士〔フヌージ〕山や他の有名な山々の様子を話して聞かせた。それから美しい入り江や海岸のある西の地域の話をした。この時、彼はこの時間になると熱が出ていたことをすっかり忘れていた。
8 良清は、光源氏に官位を捨てて播磨で暮らす明石の入道の話をする	その人は言葉が続いて、海の方を指して言った。 「あちらの、わたし達が一番近い播磨〔ハリーマー〕に、明石〔アーカーシー〕の入り江があります。それを、よく目を凝らしてご覧になってください。この土地は、それほど変わっているわけではありませんが、ここへ来て生まれる、海以外の場所から切り離されたような感覚は、わたしが知るどんな場所よりもそこを不思議で荒涼とした場所にするのです。そしてそこに、見苦しいほど大きく豪華な宮殿に、以前はどこかの州の知事だった、ある無職のサンニャースィー（出家者：四住期の第四住期の遊行期に入った人）の一人娘が住んでいるのです。彼は大臣の家の出身で、この世に名を馳せるだろうと見込まれていたのですが、彼の性格も変わっていて、世間づきあいを毛嫌いしているのです。しばらくの間、宮廷の警備隊の役人でした。しかし彼はそれを辞め、播磨の州を選んだのです。ほどなくして、その人々との仲がこじれました。彼は、ひどい扱いを受けた、都へ戻るとの意思を示しましたが、そういったことは決してすることなく、頭を丸めてサンニャースィーとなったのです。そして、一般的な習慣に基づけば、どこか人里離れた山に住むべきところを、彼は海辺にあの宮殿を造らせたのです。あなたはこの話を奇妙だと思うでしょうが、実際のところ、多くのサードゥーたちがあちこちに自分の住居を造ったものですから、この山岳地域はとても退屈で、隔離された場所のように思われるのです。彼の年若い妻や娘たちは、ここに大変戸惑ってしまうだろうと、彼は海辺を選んで、中間の道を選んだのです。
9 光源氏は話を聞いて、誇り高いという明石の入道の娘に興味を持つ	一度、わたしが播磨の地を旅していた時、その屋敷へ行く機会を見つけ出しまして、都ではたいそう質素な生活をしておりましたが、こちらではとても豪勢に暮らしているのを目にいたしました。今まで起きた事にも関わらず（今や彼には州の管理という厄介ごとがありませんでした）、彼は残りの日々をすっかり安楽に過ごしがっているようです。しかしこのような状況においても、彼は来るべき人生のために入念な準備をしているのです。正統な僧侶ですら、これほど厳格な修行と清純な生活を送るのは難しいでしょう。 源氏は言った。 「それからお前は、彼の娘の話もしていたね」

<p>10 明石の入道は上昇志向が強く娘は容貌と気立てが良いとの話が出る</p>	<p>彼は返した。 「彼女は見た目が大変良く、どのような素養から見ても愚かではないようです。州の複数の知事や統治者たちが、彼女に恋い焦がれ、求婚の申し立てを送りましたが、彼女の父親がすべて送り返してしまいました。彼は、自分のことに関しては世俗の華やかさには無頓着であるかのように見せかけていますが、彼の一人娘が彼の無名さの埋め合わせをしてくれるだろう、と決めているようです。そして、もし彼女が彼の意に反して誰かを好きになったり、彼の死後、不適切な望みを叶えようと彼の命令や指示に背いた時には、海から彼の幽霊が立ち上がるだろう、そして彼女を飲み込むだろう、と言い渡したのです」。</p> <p>源氏はこの話をとても注意深く聞いていた。 「そうだろうとも。彼女の境遇は、海の竜の帝王以外に夫を得ることのできない、「永遠の処女たち」のようだ」。</p> <p>そして彼は年老いた退任知事の愚かな考えを大いに笑った。</p>
<p>11 供人たちは明石の入道の娘を洗練されていない娘であると言い合う</p>	<p>これを話して聞かせた者は、播磨の現在の知事の息子で、昨年、宝物庫の事務官から昇格して、第五の位を与えられたのだった。彼は女好きとして有名だった。 「この人はきっと、その娘に父の命令に背く決心をさせるために、明石の岸辺へ行ったのだろう」</p> <p>と、人々は互いにひそひそ話をしていた。 ひとりが言った。 「わたしが察しますには、彼女はかなり田舎びた養育を受けたことでしょう。古い考えの両親以外、他の誰とも共に暮らす機会がなかったことを考えると、どうしてそうでないと言えましょうか。彼女の母親は、高い身分の女性だそうですが」。</p> <p>知事の息子、良清〔コーシーキーヨー〕が言った。 「ええ、そうですとも！ だからこそ、都のありとある最高の家々から、幼い少年少女をここに呼び寄せることができたのです。そこで彼女の幼い娘と一緒に遊んでくれるように、とね。このように、彼女は大変洗練された教養を受けました」。もうひとり、他の仲間が言った。 「もし、思慮に欠ける者がそこへたどり着いたとしたら、彼女の亡き父親の呪いなどあっても、彼女の魅力に抗うことは難しいのではないかと心配です」</p>
<p>12 娘を気にする光源氏を、供人は風変わりを好む性質があると察する</p>	<p>この話は源氏の思考に強い影響を与えた。風変わりだったり、珍奇な人物や機会に、彼がとても惹きつけられることを、源氏の仲間たちは良く知っていた。それゆえ彼らは、彼がすべてに注意深く聞き入っていることに、驚きはしなかった。</p>
<p>13 都へ帰ろうとした光源氏は大徳の言葉に従って明け方で滞在する</p>	<p>彼らの中のひとりが言った。 「もうすっかり昼も過ぎました。もう病気がぶり返すこともなく、良い1日になることでしょう。ですので、早急に出立すべきです」。</p> <p>しかし僧侶は、もうしばらく留まるように、と説得した。 彼は言った。 「不吉な祟りがまだ完全に消えたわけではありません。もう一度夜、既定の祈禱をするのが良いでしょう。明日の朝までには、出発できるまでになられることでしょう」。</p> <p>彼の仲間はみな、彼に留まるように説得した。この土地の珍妙さに惹かれていたので、彼もその意見に反対ではなかった。彼は言った。 「そうか、それでは朝に」</p>
<p>14 夕暮れ時に僧房をかいま見た光源氏は、気品のある尼君を見つける</p>	<p>そして、床に就くまで何もすることもなく、それにもまだかなり時間があったので、彼は山の方へと出かけた。そして夕方の濃い霧の中、生い茂った低木の囲いの方に向かって、ぶらぶらと歩き出した。彼の家来たちは、就寝しようと僧侶の洞窟の中に戻っていた。惟光〔コーレーミツ〕だけが彼と一緒にいた。彼が立っているところは反対の、西側で、ひとりの尼僧が修行に勤んでいた。窓が少しだけ開いていた。彼女は、仏像に花をあげているようだった。中の柱の近く、三脚の椅子に立てかけて1冊の宗教書が置かれているところに、もうひとりの尼僧が座っていた。彼女は大きな声で何かを読んでいた。彼女の顔には、ひどい不安が表れていた。彼女の年は40歳近くにみえたが、並の女性ではなかった。彼女は大変色白で、とても柔和な顔をしていた。彼女はひどく疲れ果てているように見えたが、頬はふっくらとしていた。彼女の髪は目の高さに切りそろえられ、眉の近くでカールして垂れており、尼僧の姿には長い髪であるよりも美しく、装われている、と源氏は思った。</p>
<p>15 光源氏は二人の女房と女童たちの中にかわいらしい少女を見出す</p>	<p>2人のとても清潔な侍女たちが、彼女の傍に仕えていた。何人もの幼い少女たちが部屋に出入りして遊んでいた。その中にひとり、10歳くらいであろうか。彼女は濃いサフラン色の縁飾りのついた古い白いワンピースを着て、部屋の中へやって来た。彼は、これまでこんな娘を見たことがなかった。彼女は、大きくなったらどれほど目を見張るような人になるだろう！ 彼女の髪は濃い巻き毛だった。団扇のようだった。彼女はひどく怒っているようで、唇は震えていた。</p>
<p>16 幼い紫の上は、尼君に「雀の子を犬君が逃がした」と泣いて訴える</p>	<p>尼僧が頭を上げて言った。 「どうしたの？ 少女たちの誰かと、喧嘩でもしたのですか？」。娘が彼女を見ると、彼女と娘はどこか似ているようだった。彼女の母親であることは、間違いないかった。娘はとても悲しそうに言った。 「犬〔イヌ〕がわたしの小鳥を逃がしてしまったの。わたしが、服の籠の中に放しておいたのに」</p>
<p>17 雀を逃がして残念そうな紫の上の様子に少納言の乳母が立ち上がる</p>	<p>ふたりの侍女のうちのひとりが言った。 「犬はなんていたずらっ子なのでしょう！ こんな馬鹿げたことをするなんて、しかりつける必要がありますね。小鳥はどこへ行ってしまったのでしょうか。わたしたちが、どれだけ一生懸命飼育して、しつけたことか！ 鳥があの子を見つけたりしていなければ良いけれど」。</p> <p>そう言いながら、部屋の外へ出て行った。彼女は見た目の良い女性だった。彼女の髪は長く、巻き毛だった。みなは彼女を少納言〔ショナーゴーン〕乳母と呼んでいた。そして彼女が、その娘のお目付け役だった。</p>
<p>18 尼君は自らの余命の少なさを語りつつ雀を追っている紫の上を諭す</p>	<p>尼僧は娘に言った。 「こちらへいらっしゃい。あなたは、こんな娘になってはいけません。あなたはいつも、くだらないことにばかり気を留めているのですから。考えてごらん下さい！ わたしはいつ死んでもおかしくないほど病気のようです。あなたはわたしのことをこれっぽっちも心配しないどころか、小鳥のことを嘆いているのね。なんて非情なことかしら。そして特に、わたしはあなたに生き物をかごの中に閉じ込めておくのは悪いことだと言いましたね。さあ、こちらへいらっしゃい！」。</p> <p>娘は、彼女の脇に座った。</p>

19 光源氏は、思いを寄せる藤壺に紫の上が本当によく似ていると思う	彼女の顔立ちは大変魅力的だった。しかし、それ以上に美しいのは、両のこめかみのところを立ち込める雲のように覆っているが、子供らしく額のところで分けてある彼女の髪だった。この趣が、彼は大変気に入ったようだった。彼がそうやって彼女を見ながら、成長したらいったいどのようになるだろう、と考えていた時だった。彼は突然、彼女が、自分が全身全霊で愛したあの人にそっくりであることに気が付いた。そして、そう思いながら彼はひっそりと泣き出した。
20 尼君は亡くなった娘の話をしつつ、少納言の乳母と歌を詠み交わす	尼僧は娘の髪をそとなどでながら言った。 「髪はとても上等だけれど、こんな風に梳かすなんて、あなたはとても行儀の悪い子ね。あなたは未だにこんなに子供っぽくて、わたしは心配で仕方がないわ。あなたの母親のお父様が亡くなった時、彼女はまだ12歳だったけれど、それでも彼女は自分のことはすべて自分ですることができましたよ。でも、もし今日、わたしがあなたを置いてこの世を去ったとしたら、あなたはどうするのか、わたしには見当もつかないわ。まったく見当もつかないわ」。 そう言うと、彼女は泣き始めた。この場面を遠くから見ていた源氏も、とても感化された。今まで尼僧の顔を大人びた気持ちで見ている娘は、ひどく戸惑ってうなだれた。彼女がそうすると、髪が頬に二筋の黒い波のように流れ落ちた。 尼僧は、とても愛おしげに彼女を見ると、このナズムを詠んだ。 「露の滴は、自分が佇んでいる若葉の世話をしてくれる人が現れるかどうかを知らず、熱風の中にどうすることもできずに消えて行く」。 侍女がこれに答えて言った。 「ああ、露の滴よ。新葉がどの様な美しい姿で花咲くのかを明かすその時まで、あなたは留まることでしょう」
21 僧都から光源氏の訪れを聞いた尼君は、恥じて簾をおろしてしまう	ちょうどその時、屋敷の主であるサンニャースイーが反対側から部屋へ入って来て言った。 「女性たちよ！ お前たちは、風の当たるところに出てはいないだろうね？ 窓の傍に立つのには、よろしくない日だ。今聞いたことだが、源氏皇子がああサンニャースイーのところへ癒の治癒にやって来ているそうだ。しかし、彼はわたしが彼だと認識できないような服装に身をやつていて、挨拶に行くことすらできなかった。一日中、彼のすぐ近くにいたというのに、だ」。 尼僧は恐怖におののいた。 「大変だわ！ もしかしたら、彼がここを通ったかもしれない。そして、私たちのことも目にしたかもしれないわ…」。 そう言うと、彼女は急いで窓の扉を閉めた。
22 僧都は尼君に、世間で評判である光源氏の姿を見てもみないかと誘う	年老いたサンニャースイーは言った。 「源氏皇子のもとに参上するという、これほど名誉な機会を得られるとは、とても嬉しいことだ。彼の美しさは、わたしの様な面白みのない性格の年老いたサンニャースイーですら、彼のところを訪れると、捨てた人生の悲しみと罪を忘れ、これほどまでに美しい人がいるなら、もう少しこの世で人生を過ごそうという情熱がよみがえる、と言われている。まあ、すべてお前たちのきくところとなるだろう…」。 彼がそこを発つよりも先に、源氏は聖い老人の洞窟の方へと向かっていた。
23 光源氏は紫の上に強く心をひかれ、藤壺の身代わりになりたいと思う	彼はなんと魅力的なものを見たことか！ このような一風変わった旅の途中、時々思いもよらないところから美が姿を覗かせているのを目にすることがある、とは、あの夜の夜に彼の友人たちもなんと的を射た話をしたことか！ このように突然旅に出て、このような珍しいものの所在を知るとは、なんと楽しいことか！ この美しい娘は誰のだろう？ もし彼女がいつも彼のそばにいて、宮殿にいるあの女性でそうしていたように、いつも心を癒すことができたなら、何と素晴らしいことか！
24 僧都の弟子は、光源氏が臥せるところにやって来て惟光を呼び出す	彼は聖い老人の洞窟に戻り、横になっていた。（そこはすべてがそれぞれのすぐ傍にあったため）年老いたサンニャースイーの弟子が、惟光を呼んでいるのが聞こえた。弟子は言った。 「わたしの師が今しがた、あなた方がすぐ近くに滞在されていると耳にいたしました。彼は、通りかかりながらも、あなたが榮譽を与えてくださらなかったことをとても悲しんでおりますが、それでももし彼が、源氏皇子はわたしが近くに住んでいることを知っているはずだが、あちらへご足労くださらなかったのは恐らく、この旅の目的を明かしたくないからであろう、と考えていなければ、今すぐにでも御前に参上するでしょう。しかしわたしの年老いた師は、私どもも、貧しい我が家にあなた方のささやかな寝床をご用意することができたのに、と申しております。もし、あなたが彼に榮譽をお与えくださることなくここを立ち去ってしまったら、彼は悲しむことでしょう」。 源氏は中から返事をした。
25 僧都の弟子を通じて、光源氏はなにがしの僧都の招きを受け入れる	「10日前から、癒を患ってしまっていてね。それが度々ぶり返していたので、気を落としていたのです。そんな折、ある者がわたしにこの山のサンニャースイーに助言を求めてはどうか、と勧めたのです。そしてここへやって来たのですが、わたしのような者に関して、彼の治療が効かなかったと知れ渡ってしまったら、これほど偉大なサンニャースイーにとって大変不快なことだ、と考え、わたしは己の身を隠すよう精一杯努めたのです。もし、わたしが一介のペテン師のもとを訪れたのであれば、この様なことは決してしませんでした。どうぞ、あなたの師に伝えてください、どうかわたしをお許しになって、洞穴の中へお越しください、と」
26 折り返し参上したなにがしの僧都とともに、光源氏は僧坊を訪れる	このような勇気の沸く言葉を得て、サンニャースイーは中へやって来た。源氏は、彼に対して恐怖のようなものを覚えた。なぜなら、彼は宗教者であったが、素晴らしい頭脳の持ち主で、宗教界の外でも尊敬されていたからだ。変装するために身に付けていた粗末な古い衣装を着て彼に会うのは好ましくなかった、と源氏は思った。都を捨てた時から、この山裾で隠遁生活をするを選んだ時までの様子をいくつか話し聞かせた後、彼は、自分と一緒に来て、彼の山小屋の庭にある冷水の泉を見てほしい、と源氏に懇願した。これほど興味をもったあの人たちを、もう一度目にする機会を再び手にしようとしていた。しかし、このサンニャースイーは一体、自分について彼女たちにどんな話をしたのだろうかという思いが、彼を少しばかり戸惑わせた。いいや！ それがなんだというのか！ 何が何でも、あの美しい娘をもう一度目にしなくては、そう考えて、彼は年老いたサンニャースイーと共に彼の山小屋へと向かった。
27 光源氏を招くため、僧坊にある南面の部屋はさっぱりと整っている	山の斜面に自生している若木を、絶妙に庭に用いていた。月が出ていなかったため、堀の端々に松明が灯されていた。そして木々にはカンディール（シャンデリアの一種）が吊るされていた。向かいの応接間はとても品良く整えられていた。隠して置かれているウッドダーン（沈香を焚く香炉）からは、高価な芳香が湧き出ていて、部屋に優美な香りを漂わせていた。源氏はこの香りが気に入った。彼は、中の部屋にいる女性たちがこの芳香を用意したのだろうか、そして丹精を込めてこの仕事をしたのだろうか、と推していた。

28 光源氏は夢にかこつけて僧都から紫の上のことを聞き出そうとする	サンニャースィーは、この世の無常と、来世の罪と恩恵について話し始めた。源氏は、すでに自分の罪の重みが、どれだけ重くなってしまったことか、と考えて不安になった。それが良心の呵責となって一生存在し続けるのかと考えることは、源氏にとって大変苦痛なことだった。彼は、どれだけ厳しい罰を待たなければならないのか！ サンニャースィーが話をしている間ずっと、源氏は自分の罪深さについて思いをめぐらせていた。彼もサンニャースィーとなって、どこかこと同じような場所で暮らすというのはどうだろうか…！ しかし、すぐに彼の考えは夕方目にしたあの美しい顔へと逸れ、彼女についてもっと他にも知ることができたら、と思い、尋ねた。「ここには、あなたと一緒に誰が住んでいるのですか？ わたしがそれに興味があるのは、一度この地のことを夢で見たからなのです。今日ここへ来たとき、それを知って驚きました」
29 僧都は光源氏に、妹の尼君が故按察使大納言の北の方であると語る	サンニャースィーは、この話に笑って言った。「あなたはまるで、夢を突然、会話の最中に見たかのようなですね。ですがわたしは、もしこの問答を続けたら、あなたの意に反して、失望するような答えを得ることになるのではないかと危惧しているのです。按察の大納言〔アゼキノデーナグン〕の名を、恐らく耳にしたことがおありでしょう。彼が亡くなってから、かなり日が経ちました。彼は、わたしの姉（妹？）と結婚しました。そして彼が亡くなった後、わたしの姉（妹？）は出家しました。ちょうどその頃、わたしはいくつか厄介ごとに巻き込まれていて、都へ行くことができませんでしたので、彼女もこちらのわたしの山小屋へやって来て、一緒に住むようになりました。」
30 光源氏は僧都に故大納言と尼君の間に生まれた娘について質問する	源氏は憶測で言った。「大納言には娘もいたと聞きましたが、違いますか？ わたしがこの話を、何か良からぬ意図があって尋ねているなどと、お考えにならなければ良いのですが…」。サンニャースィーは答えた。「彼にはひとり娘がおりました。彼が亡くなり10年になります。彼女の父親は、彼女を宮廷に上げるのだ、と常に望んでいました。しかし、彼女は聞き入れませんでした。ですが、父親が亡くなり、わたしの尼僧である姉（妹？）が彼女の保護者として残されると、どこかのならず者の仲介者が、彼女を兵部卿〔ヒョーブーキョー〕皇子に引き合わせたのです。そして、彼女は彼の妾になりました。皇子の妻はとても高慢で厳しい女性で、始めから彼女を困らせ、侮辱していました。昼夜、このように絶え間なくいじめられ、ついに彼女は精神的苦痛を負って亡くなってしまいました。不親切で人は死なないと言いますが、わたしはそうは思いません。わたしの愛する者が、そのせいで病気になり、死んでしまったのを知っているのですから」。
31 紫の上の素性を知った光源氏は、藤壺に似ていることに合点がいく	源氏は、この娘がその女性の娘なのだ悟った。彼女が宮殿の女性にこれほど似ていたのは、そういう理由だったのだ。彼の心は、以前にも増して彼女の方へ引きつけられた。彼女は、文句のつけようがないほど高貴な家の出身なのだ。もし、彼女が彼の保護下に来たとしたら、彼女の田舎風な素朴さはそのまま残るだろう。そして彼は、そうあるべきだと決心した。これは、彼にとってますます都合がいいだろう。なぜなら、彼女の柔らかな子どもらしい性格を、彼は容易に自分好みの型にはめることができるはずだ。
32 紫の上のことがいっそう気になった光源氏は、僧都に詳しく尋ねる	「あなたが痛ましい話を聞かせてくれたその女性は、何か忘れ形見も残したのでしょうか？」 源氏はこの話を、直接彼女に関する会話ができるようにとの望みから尋ねた。サンニャースィーは返答した。「子どもが生まれた数日後に、彼女は亡くなりました。その子ども女の子でした。その子の面倒を見る義務は、健康の衰えゆえにその責任を果たすことができないと感じている、わたしの姉（妹？）が負うことになりました」。今や、すべてが明らかであった。
33 光源氏は僧都に幼い紫の上を後見することを尼君に話すように頼む	源氏は言った。「あなたは、わたしのこの申し出を奇妙なことと思うことでしょう。ですが、わたしはその娘を引き取りたいと強く願っているのです。この話を、あなたは自分の姉（妹？）にもしていただけますか。一部の人が、わたしを年端もゆかぬうちに結婚という厄介ごとに巻き込みましたが、彼らの好みは、わたしにとってとても不愉快なものであることが分かりました。それにわたしは、人付き合いをあまり面白く思わないもので、すっかり孤独に過ごしています。わたしは、彼女がまだほんの子どもであるということ、よく理解しています。わたしは結婚の申し出をしているわけではありません…」。ここまで言うと彼は黙り、
34 僧都は光源氏に、尼君に相談した上で返事をする答えて堂に上る	サンニャースィーが返答した。「わたしは、あなたのこの申し出に大変感謝しております。ですが、娘がまだほんの子どもであるということ、あなたがまったくお考えになっていないのでは、と気がかりです。彼女には、あなたの一時の興味を満たすものを差し上げることすらできないでしょう。しかし、大人になる頃には、娘にとって、この世に自分の居場所を作るため、影響力のある友の後ろ盾が必要となるのも、もっともなこと。結論を引き出せるかどうかは約束できませんが、それでも、彼女の母方の祖母に話をする必要があります」。彼の口調の中に突然、若干の冷たさと厳しさが生まれた。源氏は、少々不用心に事を進めてしまった、と感じた。そして、動揺して押し黙った。サンニャースィーは言葉を続けて言った。「わたしは、阿弥陀〔アミーダー〕神の寺院へ行き、儀礼を行わなければいけません。そのため、しばしお暇を頂戴いたします。夕方のドゥアー（イスラーム教の祈り）もしなければなりません、またお目にかかりましょう」。そう言って、彼は山へと登って行った。
35 光源氏は悩ましい気持ちになり、夜が更けても眠ることができない	源氏は不安になった。雨が降り始めていた。山々に冷たい風が吹き始め、その中に滝の音も混じっていた。それまで、途切れ途切れに穏やかな水の滴る音と共に聞こえていた音は、その後、激しい音へと化した。その中に、一様に宗教書を読む声の、眠気を誘う高低も混じっていた。鈍い者でも、このような環境にいては憂鬱になってしまうだろう。源氏皇子は、自分の寝床に眠れないまま横になり、戦略の宮殿を建てたり壊したりしていた！ サンニャースィーは夕方のドゥアーと言っていたが、もうかなり遅かった。
36 奥の人が休んでいない気配を感じた光源氏は扇を鳴らして人を呼ぶ	尼僧がまだ起きていることは明らかだった。なぜなら、彼女はできるだけ音を出さないようにしていたが、時折、彼女の数珠が三脚にあたり、微かな音を立てていたからだ。この微かな、そして繊細なぶつかりあう音はとても魅力的だった。どこかすぐ近くから音が聞こえているようだった。彼は、寝室と中の部屋を隔てるカーテンの間に割れ目のようなものを作って、自分の扇をそこに滑り込ませた。

<p>37 歌を詠んだ光源氏は、女房に尼君へ取り次いでもらうようにと頼む</p>	<p>誰かが、しばらくためらった後、部屋の中のそのカーテンの傍へ、こう独り言を言いながらやって来たようだった。「そんなことはあり得ない、でも誓って、わたしは聞いたの…」。そう言うと、彼女は後ろへ下がった。まるで、「おそらく、これは単なるわたしの空想だったのよ!」と考えているかのようだった。彼女が暗闇の中を手探りで歩いていると感じた源氏は、幾分大きな声で言った。「マハートマ・ブダに従うのだ。もし、お前の道が真っ暗であったとしても、お前は道に迷うことはないだろう」。突然、暗闇の中から彼の若々しい澄んだ声を聴いて、女性ははじめ言葉を発する勇気がなかった。しかし、ついに彼女は勇気を振り絞って答えた。「あなたが、わたしをどの方向へ呼んでいらっしゃるのか、教えてください。わたしはよく理解できずにいるのです」。</p> <p>源氏は言った。 「そなたを驚かせてしまってすまない。このナズムを、そなたの女主人に届けてほしい、わたしのそなたへの頼みはそれだけだ。 「旅人がか弱い低木の青葉を目にしてからというもの、熱望の露がその袖から乾かずにいるのです」。</p> <p>女性は言った。 「ここには、そのような詩句の意味が理解できるような者はいないと、ご存知のはずですが。これが誰に宛てられたものなのか、わたしには見当もつきません」。</p> <p>源氏は答えた。 「わたしはある特別な理由から、わたしの言伝がそなたの女主人のもとへ届くように、と望んでいるのだ。どうにかしてこれを届けてくれたらありがたいのだが」</p>
<p>38 光源氏が紫の上にあてた歌を耳にした尼君は歌の内容を不審に思う</p>	<p>尼僧はすぐに、このナズムは彼女の孫娘に向けられたものだ、おおよそ誤った情報を得たせいで彼女に愛の告白をしているのだ、と理解した。しかし、彼は孫娘の存在をどうやって知ったのだろうか？ しばらくの間、彼女は怒りと戸惑いの中で思索していた。それから、大変機転を利かせて、返答にこのナズムを詠んだ。その意味はこうだった。「たった一晩だけ、旅人たちの露に湿った寢床で過ごしている人が、生涯、山々の凍った藻の上に住み着いた者たちの様子を、どうして知ることができましょう」。このように、彼女はそのナズムに無害な意味に変えてしまった。</p>
<p>39 歌を返した尼君に対し、光源氏は紫の上への切実な気持ちを訴える</p>	<p>言伝の返答があると、源氏は言った。 「彼女に伝えてくれ。わたしはこのように、間接的に話をすることに慣れていないのだ。彼女がどれだけ恥ずかしがりやだとしても、わたしは今この機会に、本来従うべき仕来りはすべて取り払って、彼女がわたしとこの問題について真剣に話をしてくれるよう望んでいるのだ」。</p> <p>尼僧は、源氏は間違いなく彼女の孫娘を年若い女だと思っているのだ、こんな誤った情報をどこから得たのだろうか？と考えた。これほど特別な人物の前に参上しろとの命令を突然聞いて、彼女は怯えた。そして、なんと言い訳をしようかと考え始めた。彼女の侍女たちは、もし彼女が彼の前に参上しなければ、源氏はたいそう立腹するだろう、と考えていた。ようやくザナーナ（女性専用居住区）の外へ出ながら、尼僧は彼に言った。 「わたしはもう若くはありませんが、それでも、このように外へ出てくるべきだったのかどうか、疑問に思っています。しかし、あなたが何か深刻な、そして重要な問題についてわたしと話がしたいと言伝されましたので、お断りすることができませんでした…」</p>
<p>40 困惑している尼君の気づまりな態度に光源氏は謙虚な言葉をかける</p>	<p>源氏は言った。 「おそらく、あなたはわたしの申し出を色好みで時違いなものだと思われることでしょう。しかし、わたしはこれを大変重要に捉えている、とあなたに断言します。ブダが、それを判じてくれるでしょう」。</p> <p>尼僧の年齢と慎重さに気圧され、彼はそれより先、何も言うことができなかった。尼僧は言った。 「あなたは本当に、わたしに申し出をなされるのに、奇妙な方法をお選びになりましたね。そして、まだあなたはわたしにその申し出をされてはませんが、そのことについて、あなたが真剣であると確信しています」</p>
<p>41 光源氏は尼君に自分の体験を語りつつ、紫の上との結婚を申し出る</p>	<p>こうして少し勇気が出ると、源氏は言った。 「あなたの長年のやもめ暮らしと、娘が亡くなった話を聞いて、わたしはとても心を動かされたのです。その気の毒な子のように、わたしもまだ幼い頃に、心から愛してくれていた人の愛情を失いました。そして、わたしは孤独と悲嘆の年を何年も過ごしました。このように、私たちふたりの境遇は同じです。それ故、その娘に対して深い同情が生まれたのです。そして、彼女が失ったものを補ってあげたいと、わたしは心から望んでいるのです。あなたに尋ねたかったのは、わたしが彼女の母親代わりとなることをあなたが承諾してくれるかどうか、ということです。それを尋ねるために、わたしはこのような不適切な時間にあなたにご面倒をおかけしたのです」</p>
<p>42 尼君は紫の上が幼く不似合いなことを理由に光源氏の申し出を断る</p>	<p>尼僧は答えた。 「あなたが仰っていることは、すべて善意によるものだと分かっています。ですが、申し訳ありません。あなたは誤った情報を得られたようです。娘がひとり、確かにわたしと一緒に、わたしの保護のもと暮らしていますが、まだ彼女はほんの子供です。どう転んでも、あなたの興味をひくものにはなり得ません。ですから、わたしはあなたの申し出を受け入れることはできません」。</p> <p>源氏は言った。 「それとは逆に、わたしはその娘についての仔細はすべて承知していますが、もし彼女へのわたしの同情が、単なる感情的で時機を失したものであると思われるのであれば、どうぞわたしをお許しください」。</p> <p>この話から、彼が自分の申し出を全く不適切だと思っていないことがはっきりと分かった。それゆえ、彼女はこの問題について、これ以上彼と話をするのは適切ではないと思った。</p>
<p>43 僧都がお勤めから帰って来られたので光源氏は尼君の前を退出する</p>	<p>サンニャースィーが、戻って来るところだった。彼女がこんなにもすぐに、彼の申し出を却下するとは思ってもいなかった、彼女がこの問題をすぐに別の視点から見えてくれるだろうと確信していた、と言うと、源氏はカーテンの隙間を閉じた。</p>

<p>44 明け方、深山の景色を見ながら、光源氏は僧都和歌の贈答をする</p>	<p>夜明けが近づいていた。近くにある寺院では、朝の特別な礼拝（法律の花の4の瞑想）が始まっていた。礼拝を指導する予言者たちの懺悔の祈りを捧げる声が、強く吹く山の風と一緒に流れて来ていた。そしてこの真剣な声の中に、流れる池の喧騒が加わっていた。源氏は年老いたサンニャースイーにこのような言葉で朝の挨拶をした。</p> <p>「山風の突風に、夢からはっと目覚めた。滝の音を聞き、その音楽の美しさに涙した」。</p> <p>彼は、ナズムで答えた。</p> <p>「わたしが毎日自分の杯を満たしているあの騒がしい急流の音がわたしを幸せにしたり、怯えさせたりすることは難しいでしょう！」。</p> <p>それから彼は、申し訳なさそうな口調でこれだけ言った。</p> <p>「わたしは、それに慣れてしまったものですから」。</p> <p>濃い霧が朝の空を覆っていた。山鳥たちのさえずりも、ぼんやりとして遠慮がちに聞こえた。大きな岩々の上に一枚の色鮮やかなカムハープ（鉦）を広げたのかと思うほどの花や、花をつけた木々が山腹に生えていた（それらの名前すら、彼は知らなかった）。彼は山腹の斜面をシカたちが時にはゆっくりと優雅に歩き、時には立ち止ることにとりわけ驚いていた。彼はそれらをずっと見ていた。それは、彼の病の最後の兆候すらその喜びのうちに消えてしまうほどだった。</p>
<p>45 身動きできぬ聖は、光源氏のために護身の修法をして陀羅尼を読む</p>	<p>年老いたサンニャースイーは、己の手足を駆使することはなかったが、それでもジョーグ・アーサン（座位で行う瞑想の一種）を行った。そして、彼の年老いた声は鈍く、流暢ではなかったが、彼は宗教書をとても厳かに、熱意を込めて読んだ。</p>
<p>46 光源氏は迎えの人からの祝いと僧都から酒などのもてなしを受ける</p>	<p>源氏の多くの友人たちが、彼に快復の祝いを述べに来た。その中には宮殿の使者もいた。下の苦屋のサンニャースイーは、彼に贈り物として不思議な形をした根を持ってきて渡した。それを探しに、彼は遠くの谷まで行ったのだった。彼は、源氏を送り届けられないことを詫言った。そして言った。</p> <p>「わたしはこの年の瀬まで、ある誓いを立てたのです。そのため、このような芳香を遠ざけなければなりません」。</p> <p>それから彼は、出発の準備を整えた源氏に別れの杯を差し出した。源氏は杯を受け取りながら言った。</p> <p>「もし、自分の望み通りにできるのであれば、この山や池を離れたりしません。ですが、天皇がわたしをご心配あそばされていると聞きました。春が終わる前にもう一度戻ってきます」。</p> <p>彼はこの詩句も詠んだ。</p> <p>「わたしは、街の住人たちのもとへ戻り、強い風が先を越して蕾を木からむしり取ってしまう前に、早く訪れるように、と言いましょ。」。</p> <p>年老いた僧侶は、源氏の礼儀正しさにとても満足し、彼の声の魅力に酔った。それから、彼は詩句で返答した。</p> <p>「たわわな花をつけたアロエの木を手にした人のように、もはやわたしは山桜の花の方を見向きもしません」</p> <p>源氏は微笑みながら言った。と言っても、わたしはアロエの花ほど珍しいものではありませんが」</p>
<p>47 杯をいただいた聖は涙をこぼして光源氏を拝み、守りの独鈷を渡す</p>	<p>その後、僧侶が別れの杯を渡しながらかこの詩句を詠んだ。「わたしは、滅多に山の洞穴の杜松の扉を開けることはありません。しかし、わたしは人生の中でほんのわずかな人しか見ることのない花を見ました」。そう言って彼が源氏の方を見ると、その目に涙が浮かんた。彼は、あらゆる厄災から身を守るよう、一本の魔法の杖を与えた。それを見た尼僧の兄がタスビーフ（数珠）を渡した。そのタスビーフは聖徳〔ショートークー〕皇子が韓国から持ち帰ったもので、翡翠の原石が付いており、持ち帰った時と同じ唐風の箱の中に今でもしまわれていた。目を粗く編んだ袋に入っていて、それと共に、五枚の葉が付いた松の枝も入っていた。その地域で入手できる贈り物の他に、彼は源氏に葉を入れるための青い陶磁の壺も贈った。山桜の蕾と藤の枝も添えられていた。源氏はこの歓待へのお礼として渡せるよう、都から贈り物を取り寄せていた。彼はまず僧侶に褒美を与えると、彼のために祈りを捧げた祈祷者たちに喜捨を分け与えた。彼は、近所の村人たちにも十分な贈り物を与えた。源氏が宗教書の中から別れのマントラを詠んでいた時、</p>
<p>48 紫の上を引き取りたい光源氏に尼君は四五年先ならばと返事をする</p>	<p>年老いたサンニャースイーは奥へ行くと、自分の尼僧の姉（妹？）に、源氏に何か伝えることはないのか、と尋ねた。彼女は言った。</p> <p>「今すぐに何かを言うのは難しいです。しかし、もし四、五日後も彼の意思が変わらなければ、わたし達はこの問題について熟考に熟考を重ねることにしましょう」。サンニャースイーは言った。</p> <p>「わたしもそう思う」。</p> <p>源氏は、それについて何の進展もなかったことを悲しんだ。尼僧の言伝の返答に、彼はその家のひとりの小さな少年にこのナズムを持たせて送った。</p> <p>「昨夜、薄暗いたそがれ時だった。わたしは、あの美しい花を見た。しかし、今日は憎々しい霧がそれをわたしの視界から完全に隠してしまった」。</p> <p>尼僧は返答した。</p> <p>「その花を失うことがあなたにとってどれだけ辛いかを測るために、わたしはこの霞んだ空の移り変わりを注意して見守ることにしましょう」。</p> <p>この詩句は、大変風格のある、称賛すべき書で書かれていたが、技巧的な工夫を凝らそうという試みは一切されていなかった。</p>
<p>49 光源氏を迎えに頭中将や左中弁たちなどの公達が都からやって来る</p>	<p>彼の帰還用の乗り物が用意されていたちょうどその時、「大殿」から何人もの若い貴族たちがやって来て、あなたを探すのに大変苦労しましたよ、今度はあなたのお供をして行きたいと思っています、と言いつ出した。やって来た者の中には、頭中将〔トーノーチュージョー〕、左中弁〔サーチューベン〕、そして源氏を慕ってここまでやって来た、その他の位の低い貴族たちがいた。彼らは悲しみながら言った。</p> <p>「わたし達にとって、あなたにお仕えすること以上に好きなことはないのです。わたし達を置き去りにするなんて、あなたはとてもひどい仕打ちをなさったものです」。</p> <p>その中のひとりが言った。</p> <p>「しかし、ここまで来たからには、しばらくこの花の咲いた木の陰の下で休むことなく帰るといいうのも、行き過ぎです」。</p> <p>それからみな背の高い岩の下に、列をなして青草の上に腰を下ろし、土製の杯で酒を酌み交わし始めた。近くの岩の上では、池が魅力的な滝のように勢いよく流れていた。</p>
<p>50 頭中将は懐の横笛を出して吹き、弁の君は扇を鳴らし催馬楽を謡う</p>	<p>頭中将は服の中からムルリー（笛）を取り出し、幾つかの旋律を奏でた。左中弁は扇で拍子をとりながら、「豊浦〔トーヨーラー〕寺院」という名の歌を歌い出した。彼を迎えに来た若い貴族たちは、卓越した人格の持ち主だったが、不安げに岩にもたれかかって座る源氏の顔は、誰も視線をよそに向けることができないほど魅力的だった。彼の従者のひとりがバーンスリー（横笛）を奏で、別の者は「笙〔ショー〕」の名手であることがわかった。</p>

51 僧都も自分から琴を持ち出して、光源氏に琴を弾いてほしいと頼む	その時、年若いサンニャースイーがバルバット(琴)を手に外へやって来て、源氏に手渡し、山鳥たちも酔いしてしまうような、そんな旋律を奏でほしい、と懇願した。彼は、今はまったくその気になれない、と断ったが、サンニャースイーのしつこい要求によって仕方なく、彼はバルバットを奏でた。それも、決してひどいと言えない演奏をした。その後、みな立ち上がり、家へ向けて出発した。
52 光源氏の姿に法師と童べは感涙し、尼君たちや僧都は彼を絶賛する	身分の低いサンニャースイーやサンニャースイーたちの新しい弟子たちを含む、山に住む者たちみなが、彼のこの滞在の短さにとても悲しんでいた。多くの者たちが、涙さえ流した。家の中で尼僧は、彼を一目しか見ることができなかったこと、そしてもう二度と目にするのができないかもしれないことを考えて、悲しんでいた。僧侶は、この没落の時期にこのような皇子が生まれるには「太陽出る国」はふさわしくなかったと思う、と言って涙をぬぐった。
53 幼心に光源氏に思いを寄せる紫の上は、人形に源氏の君と名付ける	娘も彼を見て喜んでいて。そして、この皇子は彼女の父親よりもハンサムだ、と言っていた。彼女の乳母が言った。「それならば、彼の娘になったらどうかしら」。娘はうなずいて、まったくその通りだとの意思を示した。後に彼女は絵を描き、その中で一番上等な服を着ている人物の名を源氏皇子と名付けた。そして一番上等な人形にもその名前を付けた。
54 帰京した光源氏は、宮中へあいさつに伺って父桐壺の帝と対面する	都に着くと、源氏は真っすぐ父親のもとへ行き、2日間の体験について語った。天皇には彼の顔がひどく怯えているように見え、心配になった。彼は、僧侶の魔法がかった力について多くのことを尋ね、源氏は詳細に答えた。天皇は言った。「彼をもっと以前に「魔術師の長」とするべきであった。彼の奇跡は、繰り返し成功を収めてきたが、何らかの理由で、今まで公に認められることがなかった」。そういって、彼はその人に関する勅命を下した。
55 宮中を出た光源氏は、正妻葵の上の実家である左大臣邸へと向かう	彼は天皇の御前から戻る途中、舅である左大臣に出くわした。そして、息子たちと共に彼を山まで迎えに行くことができなかった非礼を詫言始めた。彼は言った。「あなたがあちらへ内緒で行かれたので、誰かが迎えに行くことを、あなたが好まないのではないかと思ったのです。ですが、今わたしは、あなたはしばらくの間お越しになり、わたし達のもとで静かに平穩に過ごしていただき、と期待しております。その後、あなたを宮殿までお送りできれば光栄です」。彼はそちらへまったく行きたくなかったが、逃げ道もなかった。彼の舅は、彼と一緒に大殿へ連れて行った。そして、2頭の雄牛が車から外されると、彼は自らの手でその人を引いて、玄関の中へと連れて行った。これは誠意の表れであったのだが、源氏はこのすべての配慮に嫌気がさし始めた。
56 光源氏は久しぶりに葵の上と対面するものの、二人の心は通わない	源氏が来るかもしれないとの期待から、葵〔アーオーイー〕の部屋はうんと飾り立てられた。彼が最後にここへ来て以来の長い間に、かなりの修繕がされた。バルコニーが特別に作られた。このきちんと飾り立てられた屋敷には、その場に相応しくないものなど何もなかった。父親が再三頼み込んで、彼女は夫の前に出ることを承諾した。(前に来ても) 皇女たちが肖像画を描いてもらう時にするように、彼女は身動きせずに座っていた。彼女は間違いなく美しかった(源氏が沈黙の時を破って言った)「君が興味を持ってくれるだろう、もしくは何か返事をしてくれるだろうという望みがあれば、君に山の旅の様子について話して聞かせるものを。わたしは、こういう代わり映えのしないやり方が嫌いなのだ。君はどうしてこれほど高慢で、無関心で、よそよそしいのだろう? 年を重ねても、わたし達は一切歩み寄ることができていないばかりか、君は以前にも増してわたしから遠ざかっている。少しの間だけでもいいから、わたし達も普通の人たちのように会うことはできないのだろうか? わたしがどれだけひどい病だったかを目にしながら、君はわたしに具合を尋ねようとしなないと、驚いた。期待するべきなのかもしれないが、とにかく、わたしにはとても辛いのだ」
57 古い歌を引用して恨み言を述べる葵の上を光源氏は避けようとする	葵〔アーワミー〕が答えた。「ええ、何も尋ねてもらえないのは、間違いなくとてもつらいことです」。そう言いながら、彼女は横目で自分の肩の方を見た。彼女の顔からは、嫌悪感と高慢さが見て取れた。しかしその時、彼女は異常ほど美しかった。源氏は言った。「君はめったに話もしない。話してくれても、苦痛を与えるようなことを言ったり、誰かの悪意のない言葉を、侮辱であるかのように捻じ曲げてしまう。わたしが、少しの間でもいいから君が楽しくなるよう努めると、君は以前にも増してわたしから遠ざかってしまう。君に理解してもらえる日は来るのだろうか?」そういって彼は寝室へと去っていった。彼女は、彼と一緒にいかなかった。彼はしばらくの間、大変な腹立たしさと苦痛の中、横になっていた。しかし、おおよそ彼自身も彼女を好いていなかったせいだろう、すぐにうとうとし始めた。そして、彼の頭の中に様々な考えが浮かびだした。
58 光源氏は葵の上への不満と反対に紫の上への思いが強くなっていく	彼は、あの幼い娘を養育のために手中に収めることができれば、そして彼女が若者へと成長していく姿を見ることができれば、と願い始めた。しかし、彼女の年若い母方の祖母の意見ももっともだった。彼女はまだ本当に幼い。この件について再び話を切り出すことは難しく思えた。何とか彼女をいずれかの方法で都へ連れてくることはできないだろうか? 今は、彼女を何らかの口実でここへ連れてくるのが容易だろう。それに、もししたら彼女が、絶え間ない喜びを与えてくれる物になるかもしれない。彼女の父親である兵部卿皇子は、抜きんでて優れた身分の持ち主だったが、全くハンサムではなかった。他の誰でもなく、父方の叔母にそっくりになるとは、何ということか? 彼はにわかには、藤壺と兵部卿皇子が同じ母の子であり、他は母違いの兄弟姉妹であると気が付いた。彼が長いこと誠心誠意愛した女性と親縁関係にあるという事実が、あの娘を手に入れたという思いに拍車をかけ、彼は再びどうしたものか、との思いに捕らわれた。

<p>59 帰都した翌日、光源氏は僧都や尼君などがある北山へ消息をおくる</p>	<p>次の日、彼はサンニャースイーに礼状を書いた。その中には、それについても少しほめかしてあった。尼僧にあてて彼は書いた。「あなたがわたしの申し出に対してこれほどまで反対なさるのを見て、わたしは自分の思いのたけを、自分が望むようにぶつけることはしませんでした。ですが、もし、わたしの言ったわずかな言葉から、これがわたしの妄想や気まぐれな考えではなかったと確信してくださったと分かれば、その知らせを受けてどれだけ嬉しいことでしょう！」</p> <p>小さく折りたたんだ一枚の紙切れに、彼はこの詩を書いてその手紙に挟んだ。</p> <p>「そこに置き去りにしようと、できる限りの努力をしました。しかし、山花の美しい幻影が、わたしを一瞬たりとも離してくれないのです」</p> <p>彼女はもうずいぶん前に、若さの盛りを過ぎてしまっていたが、この手紙の素晴らしさにとても喜び、感銘を受けた。というのは、これは単に見事な手で書かれていただけでなく、無造作ながらも器用に折りたたまれていて、彼女はそれがとても気に入った。彼に対し、彼女は申し訳なく思った。彼女の良心が、好意的な返事をするを許してくれたなら、彼女は喜んだだろう。彼女は書いた。</p> <p>「近所におりますが故に、あなたが私どもの処へも足をお運びくださったことは、喜ばしいこととございました。しかし、あなたが私どもの処をわざわざ訪ねてくださったとしても（そうしてくださることを強く望んでおりますが）、その時も、既にあなたに申し上げたこと以上、何も言うことはできないだろう、と懸念しております。あなたがお送りくださった詩句ですが、それに関しましては、彼女が返事をするだろうと、期待しないでください。なぜなら、まだ彼女は一文字一文字、アブジャドすら書くことができないのです。ですので、わたしが彼女に代わってお返事いたします。</p> <p>「荒々しい風の吹く大野〔オーノー〕の岸边にサクランボの花が散らずに残っている間、たったそれだけの間、あなたは誠意を示したに過ぎないのです。わたしとしましては、それがとても不安なのです」</p>
<p>60 僧都からの返事を残念に思った光源氏は、惟光を使者として遣わす</p>	<p>サンニャースイーも、同様の返答をした。源氏は、たいへん気を落とした。そして2、3日後、彼は惟光を伝手に尼僧に宛てて手紙を送った。そして彼にも、彼女の乳母である少納言からも、知り得るだけの情報を得てくるように、と指示をした。惟光は考えた。</p> <p>「源氏はなんと影響されやすいのだろうか！」</p> <p>彼は娘をたった一目見ただけだったが、それだけで、彼女はまだほんの子どもであると確信した。それでも、彼は彼女が大変美しいと思っていた。今後、彼の心が彼女にどのような感情を持つのか、見てみることにしよう！</p>
<p>61 惟光は少納言の乳母に面会するものの、周囲の人々から警戒される</p>	<p>年老いたサンニャースイーは特別かつ信頼の厚い使者がやって来たことにとても感銘を受けた。手紙を渡した後、惟光は乳母を探した。源氏が彼女に伝えるように言ったことを、彼はすべて伝えた。そしてその他にも、自分の主人について多くのことを話して聞かせた。話好きであったため、彼は話し続けた。ほんの少しでも関係があると思った話も、彼はその中に付け加えた。しかしこれらすべての後、少納言もまた他の者たち同様、これ程小さな子どもに彼がここまで興味を示すのはなぜか、と困惑した。彼の手紙はとても洗練されていた。その中で彼は、尼僧曰く一文字一文字書いているという、彼女の手を見たい、との願望を明かした。いつも通り、彼は一編のナズムも書き送った。</p> <p>「山の井戸に映る映像がそなたに、わたしの望みは一つの冗談であった、と言っただろうか」。</p> <p>その返答に、彼女は書いた。</p> <p>「おそらく、この井戸の水を飲み、ひどく後悔している人もいるでしょう。陰よ、わたしに教えてくれますか。また、同じことが起きるのでしょうか」。</p> <p>惟光はこのような返答を口頭でも持ってきたが、彼はその他にも、尼僧の体調が良くなり次第、彼女が都へやって来て、彼ともう一度話しをするだろう、と確信させた。彼女がやって来るという期待が、彼の心の中に嵐のようなものを巻き起こした。</p>
<p>62 光源氏は王命婦の手引きで、病気で里邸に退出中の藤壺と密通する</p>	<p>その頃、藤壺が病気になる、しばらくの間、宮殿の外へ退いた。天皇の苦痛と不安を目にして、源氏は胸がいっぱいになった。しかし彼は、この機会を逃してはいけない、と考えずにはいられなかった。一日中、彼はひどく困惑して過ごした。自宅でも宮殿でも、他に何も考えられず、誰かに会いに行くこともできなかった。日が暮れると、彼はある侍女、王命婦〔オーミヨーブー〕を、言伝を届けてくれるよう説得することができた。その侍女は、二人の間に入って何らかの使者となることを、愚かなことだと思っているようだったが、彼の顔に浮かぶ夢の中を歩む者のような表情を見て、彼を憐れに思い、言伝を持って行った。皇女は彼との以前の関係をとても悪悪で、迷惑なものだと思っていた。そして彼の記憶が、彼女をずっとひどく悩ませていた。彼女は、もう二度とこのようなことは起こさない、と決心していた。</p> <p>彼女は彼に（源氏に）不愛想で不快な様子で会った。しかし、彼女はその魅力をヴェールに包むことはしなかった。彼が必要以上に彼女を称賛していると感じ、冷淡でうんざりしたような態度を取り始めた。彼女は、彼が何か欠点を見つけてくれれば良いのに、彼が自分は間違っていたと理解し、彼女が安樂を得られれば良いのに、と望んでいた。過ぎたことをすべて語る必要はない。夜は、あつという間に過ぎて行った。彼は、藤壺の耳もとでこの詩を聞かせた。</p> <p>「今、わたし達やっと会うことができたのだから、わたし達が今夜見た夢の中に、永遠に浸っていられたらいいのに」。</p> <p>しかし、良心の呵責によって不安になり、彼女は言った。</p> <p>「もし、わたしが永遠の眠りの闇の中に隠れたとしても、わたしの罪は人々の言葉を渡って世の中に広まることでしょう」。</p> <p>彼女が急に羞恥心と恐怖に見舞われたのは、理由無くしてのことではない、と源氏も知っていた。彼がそこを去ると、王命婦は彼がそこへ残してきたリバーダ（外套）とその他のものを持って、その後を追いかけた。</p>
<p>63 光源氏は邸に帰った後、藤壺と密通したことを思い悩んで泣き臥す</p>	<p>彼は一日中自分の寝床に横になり、深く苦悩していた。彼は一通の手紙を送ったが、開封されることなく差し戻された。このようなことは過去にも何度もあったが、今回は2、3日の間、ひたすら自分の部屋に籠って悩ませた。その間ずっと、彼をこよなく愛する父、天皇が、彼が今度どんな悩み事に見舞われたのか尋ねてきほしなまいだろうか、との不安に捕らわれていた。</p>

<p>64 藤壺の懐妊という密通の結末を、王命婦はあまりに嘆かわしく思う</p>	<p>完全に破滅したと確信した藤壺は、深い悲しみに捕らわれた。そして、彼女の健康は日に日に悪化していった。宮廷からは、遅くならずに戻るように、との言伝が毎日来ていたが、彼女はその気力を得られずにいた。彼女の病気は、彼女の心の中に自ら不思議な疑念を生み出し、彼女は、彼女の最後の審判は一体どうなるのか、と一日中考えてばかりいた。夏がやって来ると、彼女は寝床から起き上がることもすらしなくなった。3ヶ月が過ぎた。そして彼女の様子について、今や間違いようがなかった。すぐにそれは知れ渡り、いたるところで騒ぎが起きるだろう。襲いかかった災難が、彼女をとっても不安にしていた。彼女の家の者たちは、彼女がなぜ隠しているのかを知らなかったので、彼女がもっと前になぜ天皇に自分の様子について知らせなかったのか、と驚いていた。憶測が広まったが、皇妃以外、正確に解くことができない問題だった。王命婦と、彼女の乳母の娘で彼女の身支度や浴室での世話を任されていたものは、この変化を見て驚いた。しかし、王命婦はこれに関して何も話しながらなかった。彼女は、残酷な早さと順調さでこのように明白になったこれは、彼女が面会をさせたことの結末なのではないか、という呵責を生み出すような疑念を抱いていた。宮殿では、ほかの不調が彼女の傍にいる者たちを迷わせ、彼女の真の症状について気が付くことができなかった、と告知された。皆がこの話を受け入れた。天皇も、彼女と心を通わせていた。使者が絶えず彼に知らせを持ってきていたが、大きな疑念や考えが彼の頭の中に常に浮かんでいた。</p>
<p>65 ただ事ではない異様な夢を見た光源氏はわが身に起こる運命を知る</p>	<p>この頃、源氏はとても不思議で恐ろしい夢を見た。彼は、夢占い師に尋ねたが、あまり答えることができなかった。その中には、彼には意味が全く理解できない部分があった。しかし、ひとつはっきりしていることは、夢を見た者が何かしら過ちを犯したこと、そして十分に用心した方が良い、ということだった。源氏は怯えて言った。「これは、わたしの夢ではない。わたしは、別の者に代わって聞いたのだ」。彼が、その「過ち」とは何だろうかと、驚いていたちょうどその時、皇妃についての知らせを受けた。そうか、これが夢の中で示された、恐るべき破滅か！ 彼はその場で、彼女の従者や彼女への励ましに満ちた、一通の長い手紙を書いた。しかし、王命婦は、それによって動悸が増すばかりだろうと考え、それを届けることを拒んだ。そして、彼は他の使者を信用していなかった。彼女が時折送ってきていた、数行の憎しみに溢れたそれも、今や完全に止んでしまっていた。</p>
<p>66 七月になり、宮中に帰参した藤壺へ桐壺の帝の寵愛はいっそう増す</p>	<p>7ヶ月目に入り、彼女は再び宮廷にやって来た。彼女が戻ったことをこの上なく喜んだ天皇は、彼女に対してものすごい愛情を示した。彼には、彼女の躰の膨らみや、青白くやつれた顔が、彼女に新たなそして比類ない魅力を生み出しているように思えた。以前のように、暇な時間はすべて彼女のもので過ごすようになった。その間に、宮廷では源氏の出席が必須となる、いくつもの式典が行われた。時には、彼に琴（コートー）やパーンスリーを演奏するように言われることもあれば、時には別の立場で、父の傍に控えさせられることもあった。このような折には、彼は不安でも困惑してもいないということを示そうと、ものすごい努力をした。しかし、自分を裏切ったのだ、という恐怖が常に付きまとっていた。藤壺にとって、こうした機会はものすごく苦痛なものだった。</p>
<p>67 光源氏は六条京極から帰る途中に、帰京して療養中の尼君を見舞う</p>	<p>尼僧の体調は僅かに回復し、彼女は都に住むようになった。彼は、彼女がどこに住んでいるのかを調べ、時折手紙も送っていた。（彼が思っていたとおり）その返事は、あまり元気づけてくれるものではなかった。ここ数か月のうちに、彼の中では、娘を手に入れたという願望が衰えるどころか、ますます膨らんでいた。しかし、日だけが過ぎて行った。そして、状況を改善できるような良い方法も思い浮かばなかった。秋も終わりに差し掛かった頃、彼はひどく気落ちしたような感情に包まれた。ある美しい月夜に、自分の気分に戻して、六条のもとを密かに訪れようと決めた時、小雨が降り始めた。彼は、宮殿を出た。彼が向かう先は第六の区画にあったため、それほど遠くまで雨の中を行くのは妥当ではない、と考えた。彼がどうしたものかと考えていたちょうどその時、古木が群生する中にある、一軒の崩れかけた屋敷が見えた。この荒れ果てた、傷んだ屋敷は誰のものか、と尋ねると、いつも彼と一緒にいる惟光が答えた。「これ！ これは按察大納言の屋敷です。一、二日前に行つて様子を見たところ、気の毒な尼僧は大変弱ってしまった、彼女は周りで何が起きているのかすら理解できない、と知りました」。源氏は大変悲しんで言った。「お前は、どうして先に教えてくれなかったのだ？ わたしが同情をする気持ちを伝えに、彼女の家へ行くのに。頼むから、今すぐ行って、あちらの様子をうかがってきておくれ」。惟光は、ひとりの使用人を様子伺いに送り、あちらへ行ったら源氏皇子が様子伺いに来たと明かすように、と言った。使用人が、源氏皇子が彼をご機嫌伺に送ったこと、自身も外で待っていることを伝えると、家じゅうが大騒ぎになった。使用人たちは、彼らの女主人は何日間も危篤状態が続いていて、おおよそ誰にも会うことはできない、と言った。しかし彼らには、これほど身分の高い来訪者をそのまま帰す勇気はなかった。そこで、大急ぎで座するための南側の部屋を掃除して、こう言いながら中へ招き入れた。</p>
<p>68 病床の尼君は、紫の上が成長した暁には光源氏に託すことを決める</p>	<p>「あなたをこのような汚い部屋にお通ししますのを、どうかお許しください。でき得る限り、きれいにしました。あなたが突然いらしたものですから、このようなところにお連れしたことをお許しください…。間違いなく、彼が住み慣れている部屋とは違っていた。源氏は言った。「わたしはずっと、こちらへ来るつもりでいたのだが、手紙で提案していき申し出が何度も却下されたものだから、勇気を出さずにいました。もし、尼僧の体調がこれほど悪いと知っていたら…」」。尼僧が伝言した。「わたしの方から伝えておくれ、今、わたしの頭は冴えきっています、また暗がりが生じるかもしれませんが、皇子が、死の床にいるわたしを見舞うためにご足労くださったのだと、非常に強く感じております。しかし、目の前に出てお話しできず、申し訳なく思っています。こうも伝えておくれ。もし偶然にも、以前すでにお話したことに関して、あなたの意志が変わっていなければ、その時が来たら、喜んであの子を連れて行き、侍女の中に加えてくださって結構です（文法上、連れていくのは女性。誤訳か？書道家の誤りか？）。わたしはとてもつらい思いで、あの子を残して行くのです。わたしは、現世のこの愛が、常に願ってきた生活を手に入れる妨げになるのではないかと、恐れているのです」</p>

<p>69 光源氏は紫の上の無邪気な声を聞き清纯な彼女に いっそうひかれる</p>	<p>彼女の部屋はとても近く、カーテンもとても薄かったため、彼女が少納言に自分の言伝をしている時、彼は何度も彼女の苦痛に満ちた震えた声を聴いた。その後、彼は誰かにこう言っているのを聞いた。 「ここへ来て、彼はこんなに慈悲をかけてくれた。ああ、娘の歳が、上等な言葉でお礼が言えるくらいであつたら良かったのに」。 源氏は少納言に言った。 「親切や慈悲という問題では決してありません。何か深く激しい感情であることは、明白です。その感情が、わたしをこれほど長期にわたって懇願せずにはいられなくしたのです！ わたしが初めてあの子どもを目にしたその時から、わたしの心の中に、不思議な愛情を帯びた感情が彼女に対して生まれたのです。そしてそれは、この世に限ったものと言うことのできない、そんな愛情へと変わったのです。これは単なる馬鹿げた想像ではありますが、わたしは彼女の声が聞きたいのです。わたしが退出する前に、彼女を呼んでいただくことはできませんか」。 少納言は言った。 「あの子は、気の毒に、私たちの心配事などつゆ知らず、別の部屋で寝ています」。 しかし彼女がそう答えていると、ザナーナ・ハーナ（女性の居住区）の中を、誰かが歩く足音が聞こえた。そして突然、こう声がした。 「おばあさま！ 山で私たちを訪ねていらした源氏皇子がお出でになっているのですよ。あの方を中へ呼んでお話ししたらよろしいのに」。 家の侍女たちはみな、不名誉なことだとの思いから、言いだした。 「お黙りなさい、黙るのです！」 子どもが答えた。 「いいえ、いいえ！ おばあさまが言っていたもの。もしあの皇子を目にしたら、病気も良くなるだろう、って。わたしは馬鹿なことを言ったのではないわ」。源氏はこれを聞いてとても喜んだが、家の侍女たちは、娘が道理をわきまえたことに口出しをしたことを、不適切で厄介なことだと考え、彼女たちはまるで最後の言葉を聞かなかったかのように振る舞った。源氏は正式に会うのを諦めた。そして、間違いなく彼女の振る舞いは完全に子どもらしかったが、彼女を教え仕込むことはいかに容易で、なんと楽しいことだろうか！ そう考えながら家へ帰った。</p>
<p>70 翌日、光源氏は尼君への見舞いととも紫の上へも 結び文をおくる</p>	<p>翌日、彼は正式に訪問した。あちらへ到着すると、彼はいつものように、小さな紙の切れ端にこの詩を書いて送った。 「初めて幼い鶴の声を聞いてからというもの、わたしの船は水草の間で動けなくなるという奇妙な趣味を持つようになりました」。 この詩句は、その娘に宛てたものだったので、少し大きめの文字で美しく書かれていた。侍女たちはそれを見るなり言った。 「これを娘の記帳に貼りつけるべきだわ」。 少納言はこう書いて源氏のもとへ送った。 「わたくしの女主人は、あと一日も生き永らえることはできないだろうと察し、山の寺院に送り届けてほしいと望まれましたので、すでに出立なさいました。あの方がその時まで生きておられれば、あなたがお見舞いにいらしゃったことを伝えられるよう、手配いたしますよう」。 この手紙に、彼はとても感化された。 秋の夕暮れは、彼の心の中に不思議な動揺を生みだしていた。しかし、彼の思考は別の方へ向いていたにも関わらず、この嵐の時期の間中、彼は頭の中にこびりついて離れないあの女性と不思議な縁を持つあの娘を自分のものにしたい、という願いが日増しに強くなっていった。彼は、彼女を初めて目にした夕暮れのことを思い出した。そして、尼僧が書いたあの詩句が思い浮かんだ。 「か弱い葉の世話をしてくれる人が現れるだろうか…」 彼女は一生、わたしの幸せの素であり続けるだろう。もしかしたらいくつかの立場から、後になって、子供時代の期待をすべて叶えることができないかもしれない。それでも、この賭けはするべきだ。彼はこの詩句を詠んだ。 「サフラン色の根より出でて心の端に生える草、いつわたしの手に入るのか見てみることにしよう」</p>
<p>71 十月に朱雀院の行幸が予定され、舞人は練習など多 忙な日々を送る</p>	<p>10月に、天皇は紅い葉の祝宴に出席するために、朱雀院〔スーザークーン〕を訪れることになっていた。そこで踊る者はみな、ひととき高貴な家柄の少年たちだった。天皇は自ら皇子たちや貴族たち、その他の高貴な家々の中から人選した。そして、皇子や大臣以下全ての者が、休みなしにその練習に取り組んでいた。</p>
<p>72 尼君の死去という知らせが届き光源氏は母更衣との 死別を思い出す</p>	<p>源氏はふっと、山の友人たちをもう何日もずっと見舞っていないことを思い出し、ある特別な使者を送った。その使者はサンニャースイーのところからこの返答を持ち帰った。 「前月 20 日に、あの世への旅立ちの知らせが参りました。これは人類の定めではありますが、彼女との別離はわたしにとってとても辛いことです」。 彼はこうしたことや、それと同様の事を書いて寄こした。源氏はそれを読み、人生の無常と不実という苦々しい想像に耽った。そして、死にゆく女性とその将来をあれほど懸念していた、あの娘の運命は一体どうなったであろうか？ 彼は、自分の母親が亡くなった時のことをよく覚えていなかったが、いくつかのぼんやりとした記憶が今でも頭の中を漂っていた。そのせいで、彼の追悼の手紙に熱い思いが生まれた。その返答は少納言が幾分か自分の重要性を示しながら寄こした。</p>
<p>73 夜、光源氏は自分から、忌みの期間が終わった紫の 上の邸を訪れる</p>	<p>経衣を着せて埋葬する儀式や喪の期間が終わると、その娘は再び都へやって来た。この知らせを聞いて、源氏はしばらく時が経つのを待ち、ある静寂な美しい夜に、自らあちらを訪れた。彼は、この陰鬱で崩れ落ち、半ば荒廃した屋敷は、あの娘に大変悪影響を与えるだろう、と考えた。彼はまた、以前通された、あの小さな部屋へと案内された。少納言は尼僧が亡くなった時のことを、しゃくりあげながら詳細に伝え、彼もまたそれに驚くほど感化された。彼女は言った。 「彼女の母親に対して、あの家でどれほどひどい仕打ちがされたかを覚えていなければ、この娘を父親（兵部卿皇子）のもとへ送り届けましたものを。もしこの子どもが、自分がどこへ行こうとしているのか、あちらの人々がその子に対してどう思っているのかを知らないような、腕に抱かれているような子供であったなら、わたしは今でもそうしていたでしょう。しかし彼女は、好意的に接してくれないかもしれない、見知らぬ少年少女たちの中に放り込むには、もう大きくなりすぎました。彼女の年離れた母方の祖母は、最期の日までずっとそう言い続けておりました。あなたはいつもわたし達に親切にしてくださいました。もし彼女が、例え少しの間であろうとも、あなたのところへ行くのだと分かれば、わたしの頭からひとつのとても大きな重荷が消えることでしょう。わたしはあなたに、後々のことを尋ねて、戸惑わせるようなことはいたしません。わたしは、彼女があと何歳か年上であったなら、あなたと結婚させることができたのに、ただそれだけが残念でなりません。しかし育て方のせいで、彼女年齢より幼稚なのです」</p>

<p>74 光源氏は少納言の乳母に紫の上への気持ちを伝えて歌を詠み交わす</p>	<p>源氏は言った。  「わたしに何度も彼女が幼いということを語る必要はない。あたかもわたしを突き動かしたのは彼女の幼さと無力さであるかのようだが、しかしわたしは、（このことを自分自身や、君に対して隠すつもりはない）もう一つの近い縁が、私たちふたりの魂を結びつけたのだと思っている。私たちがどんな決断をしたのかを、彼女に伝えたいのだが。彼は、こう問いかけた一篇のナズムを詠んだ。  「海藻の小木を自分の腕の中に抱こうと岸辺まで打ち寄せるあの波のように、彼女も後退するために前へ進むのだろうか？」。  それから彼は尋ねた。  「彼女はそんなにひどく驚くだろうか？」。  少納言は、彼に娘を是非とも連れて行くように、と言いながら、彼のナズムへの答えを別のナズムで返した。その中で彼に対し、彼女が彼の意図を理解するまでは、彼女が「波とともに、海藻のように流れるだろう」との期待を抱かないことです、と忠告した。この気さくで親しげな調子で、彼はそれが気に入ったが、さらにこれだけ言った。  「彼女に引き合わせることなく、わたくしがあなたを返すなどと、どうして思われたのでしょうか？」。  娘を待っていた時、彼は自ずとこう口ずさんでいた。  「山の住人にとって恋をするのがこんなにも困難なのはどうしてだろう？」  家の侍女たちは彼をしげしげと見つめ、とても感銘を受けた。そしてしばらく、この瞬間のことを忘れられなかった。」</p>
<p>75 尼君を恋い慕って泣く紫の上は、訪問した光源氏を父と勘違いする</p>	<p>子どもは自分の寝床に伏して、母方の祖母のために泣いていた。彼女の守り役の女性のひとりが言った。  「あるお方が、大きなラバーダを着て、あなたと遊びに来ていますよ。もしや、あなたの父君ではありませんか？」。  これを聞いて、その子は飛び起きて言った。  「乳母！ラバーダを着たその方はどこな？その方はわたしのお父さまなの？」。  そう言って、彼女は部屋の中へ駆け込んだ。」</p>
<p>76 少納言の乳母は紫の上を年よりも幼い様子であると光源氏に伝える</p>	<p>源氏は言った。  「いいや、君の父親ではないよ。でも、君が親しくなってくれたらいいなと望んでいる者だよ。おいで…」。  人々の話し方から、彼女は源氏が大変な要人であることを悟った。そして、「ラバーダを着た方」と言ったことに対して、彼はひどく腹を立てたことだろうと感じ、彼女は真っすぐ自分の乳母のもとへ行った。そして、ひそひそ声で言った。  「乳母！わたし、眠たいの」。  源氏は言った。  「もう、わたしに対して恥じらいを覚えないでくれ。眠いのなら、おいで。わたしの膝に頭をのせて寝ると良い。わたしの傍へ来て、話もしてくれないのかい？」。  少納言は言った。  「どれだけ野蠻か、ご覧になってください」。  そして、彼女を源氏の方へ押し出した。彼女は彼の傍に、完全に無関心で立っていた。そして、柔な衣装に髪が零れ落ちるようなやり方で、手で髪の内側をなぞったり、肩のまわりにくっついた髪の毛の房を触ったりしていた。」</p>
<p>77 幼い紫の上の手を強引にとらえる光源氏に少納言の乳母は困惑する</p>	<p>突然、源氏は彼女の手をとった。しかし、親しくない人物とこれほど親密なやり取りをすることへの恐怖に、彼女は突然、悲鳴をあげた。  「わたしは、寝たいて言ったでしょう」。  そして手を振りほどき、ザナーナ・ハーナへと去っていった。彼はこう言いながら、彼女の後を追いかけた。  「わたしのかわいい人！ わたしから遠くへ逃げたりしないでくれ！君の母方の祖母が亡くなった今、彼女に代わって、わたしを愛するんだ」。  少納言は強い衝撃を受けた。彼女は言った。  「だめです、だめです。これはやり過ぎです！このような愚かしいことを、この気の毒な娘によくもできましたね？ 誰かにわたしを愛するんだ、などと言ったところで、何の得もありませんよ。そうではありませんか？」。  源氏は答えた。  「今はそうかもしれない。だが、誰かの心の中に何かに対する思いが溢れたら、例えばわたしの心の中がそうであるように、不思議なことが起こるものだというのを、そなたも目にすることになるだろう」</p>
<p>78 あられが降り風が激しく吹く夜、光源氏は紫の上の御帳の中に入る</p>	<p>霰が降っていた。そして、とても荒れた恐ろしい夜だった。彼女をこの人佯しい荒廃した屋敷に、夜を過ごすよう残して行くのかと思うと、彼はとまどった。そこへ留まる口実を作って、彼は言った。  「真ん中の扉を閉めなさい。わたしはこの恐ろしい夜に、ここで見張りをしよう。みな、わたしの近くへ来なさい！」。  そう言いながら、彼は娘を自分の手に抱え、まるでそれがまったく自然なことであるかのように、寝床へ連れて行った。侍女たちはあまりにも驚き、驚愕して、自分のいるところが微動だにできないほどだった。」</p>
<p>79 少納言の乳母がため息をつく中、光源氏は紫の上に一晩中寄り添う</p>	<p>自分の攻撃的な態度がゆえに怯えていた少納言は、間に割って入る理由もない、と心の底では判断していた。彼女もまた、片隅に座ってすすり泣いていた。初め、娘はこの上なく怯えていた。彼が彼女に一体何をしようとしているのか理解できず、ひどく震えていた。源氏が彼女を抱き上げ、華奢で冷たい肌が触れたときには、鳥肌を立てたほどであった。彼はそれに気が付いたが、それでも優しくゆっくりとその子の上着を脱がせると、きちんと横たえた。その後、娘がまだ怯えているのを悟っているかのように、とても上品で柔和な調子で話し始めた。  「君は、たくさんの美しい絵やおもちゃ、それにお人形があるようなところへ、わたしと一緒に行きたくないかい？」。  そしてこのような、彼女が興味を持っている話を、彼は感情を込めて熱心にしたため、彼女はすぐに彼と打ち解けたが、長いこと落ち着かず、なかなか寝付くことができなかった。」</p>

80 女房たちは、悪天候の中での光源氏の訪問が心細さを慰めたと話す	嵐はまだ続いていた。ある女性が、ささやくように言った。「もしこの人がここにいてくださらなかったら、私たちはどうしていたのか！ わたし自身について言えば、とても怯えていたに違いないわ。ああ、私たちの小さな女主人が、彼の歳に近かったらよかったのに！」少納言はまだ幾分信用していなかったので、ずっと源氏の近くに座っていた。やっとのことで、風の勢いも弱まり始めた。夜も大分更けていた。しかし、これほど夜遅くの帰還は、誰も驚かすことはできなかった。源氏は言った。「この困難な時分に、例え数時間であっても、残して行くことが我慢できないほど、彼女が愛おしくなってしまった。わたしが好きな時に彼女に会えるようなところへ連れて行きたいと思っているのだ。彼女がこんな屋敷に怯えないとは、驚くべきことだ」
81 尼君の四十九日後に、兵部卿宮は紫の上を邸に引き取る意向を示す	少納言は言った。「わたしが記憶しております限りでは、彼女の父君が引き取りに来ると言っていました。しかし四十九日を過ぎるまでは難しいでしょう」。源氏は賛同するような調子で言った。「彼女の父親が養育をするのが自然なことでしょう。しかし、いままで彼女の面倒は他の者たちが見ていたのです。ですから、わたしよりも父親の方を好む理由はないでしょう。わたしも、ほんの少し前からしか彼女を知らないが、疑う余地なく、わたしのほうが父親よりも彼女を愛しています。」そう言って、彼は娘の髪をなでた。そして渋々と何度も何度も後ろを振り返りながら、部屋を出た。
82 紫の上と別れた後、光源氏はかつて通った女性の家の門を叩かせる	その時、とても濃く白い霧が立ち込めていた。そして葉っぱの上には、霜のようなものが降りていた。突然、彼の心の中に、ああ、これが本当に恋愛沙汰だったら良かったのに、という思いが浮かび、気が沈んだ。彼は、家へ帰る途中、よく好んで通っていた屋敷の前を通ることを思い出した。彼は扉を叩いたが、返答はなかった。そこで彼は、声の大きな使用人にこの詩句を詠むように言った。「朝霧が、世界中を夜のように暗くしてしまいましたが、姉（妹）の扉の前に立ち止まらずに去ることは、わたしにはできそうにありません」。この詩句を二度詠んだところで、女性が洒落込んだ使用人を扉口に寄こした。使用人はこの詩句を詠むとすぐさま、再び屋敷の中へと立ち去った。「もしこの霧に囲まれるのが嫌だったのなら、曲がりくねって絡み合った小枝でできた玄関が、あなたの道を塞ぐことはないでしょう」。彼は待っていたが、再び誰かがやってくることはなかった。日が出てから、このように無気力に家へ戻りたくはなかったが、他にどうしろというのか？
83 光源氏は紫の上のかわいらしい面影が恋しくて文を書き絵をおくる	自分の宮殿に着くと、長いこと横になって、娘の話や仕草を思い出して、うれしくなって微笑んでいた。屋近くに起きると、彼は彼女に宛てて一通の手紙を書こうとした。しかし、相応しい言葉が見つからなかった。そして何度も筆を置いたりした後、手紙の代わりに、何か素晴らしい絵を送ろうと決めた。
84 父兵部卿宮は少納言の乳母に、紫の上を引き取ることをうち明ける	ずっと前にした約束通り、その日、兵部卿皇子は亡き尼僧のところへお出ましになった。その場所は、彼が覚えていたよりもずっとひどく荒廃して、古臭く、荒れ果てているように思われた。潰れそうな部屋部屋に僅かばかりの人間で住むのは、どれほど苦痛なことだろうか。四方を見回して、彼は言った。「子供が、ほんの一瞬であったとしても、この様な屋敷に住むべきではない。わたしは、彼女を今すぐ連れて帰る。わたしの屋敷にはたくさん空きがある。それから、君（少納言に向かって）も、特別な使用人としてあちらで暮らすのだ。一緒に遊べる子どもたちもいるし、娘はあちらで良い暮らしを送るだろう」
85 紫の上の着物がしおれているのを目にした兵部卿宮は、娘を憐れむ	彼は娘を自分の傍に呼び、その服から夜、源氏が抱きかかえたために移ったイトル（香油）の素晴らしい芳香が漂っているのに気が付き、彼は言った。「君の服はイトル（香油）のなんていい香りがするのだろう。しかし、少し汚れているのではないかい？」そう言った瞬間、彼は娘がまだ喪中であることを思い出して、彼は傷ついた。彼は会話を続けて言った。「わたしはよく、彼女の母方の祖母に言っていたんだよ。時々、彼女をわたしのところへも寄こしてください、わたし達のやり方にも慣れるように、とね。だって、本当に奇妙な養育だろう。何年もの間、彼女は昼夜、体調が悪化し、魂が削られていくような女性と一緒にいたのだ。しかし、何が原因で、彼女はわたしにひどく腹を立てていた。そして他にも、思うに未だに完全になくなったわけではないが、引っ掛かりがあってね」。少納言は言った。「そういうことでしたら、この場所はとてもひどいところではありますが、彼女自身、行くにふさわしい娘になるまで、あちらへ連れて行くべきではないかと思います」
86 少納言の乳母の言葉と紫の上の様子に兵部卿宮はもらい泣きをする	何日もの間、娘は大変な嘆きと悲しみに捕らわれていた。そして、彼女は何も少しも食べていなかったのも、とてもやせ細っていたが、それにも関わらず美しかった。彼は娘の方を愛情に溢れた眼差しで見つめて言った。「もう、泣くのはやめなさい。人が死ぬというのは、誰にもどうにもできないことだ。わたし達はそれに勇敢に堪えなければいけない。だが、もうすべて大丈夫だ。わたしがやってきたのだから。」遅くなっていた。彼は、もうあまり長いこと留まることができなかった。立ち去り間際、彼は、娘が彼の保護下に置かれることに慰められていないどころか、おいおいと泣いているのを目にした。皇子の目からも、涙の粒が数滴零れ落ちた。そして彼は、彼女を慰める精いっぱい努力をした。「そんなに悲しまないでくれ。今日か明日、君を連れて来てくれるよう使いを送るから。そうしたら、わたしと一緒に暮らせるんだよ。」そう言って彼は去っていった。娘はまだ泣いていた。彼女には、どうやって気を紛らわしていいのかわからなかった。
87 紫の上は幼いながらも、自分の身の上と今後の事を思っ涙を流す	彼女は、自分の将来のことを考えてこれほど不安がっているのでは決してなかった。なぜなら、彼女はまだこうした問題について考えてすらいなかったからだ。それどころか、何年もの間、昼夜ともに過ごしていた人との別離のことだけを考えていた。まだ子どもであったのに、残酷な目にあい、彼女はいつもしていた遊びをすることもなくなった。屋間は時々、元気を取り戻すことがあったが、夜になると、少納言がこの状況がいつまで続くのかと考え、彼女を慰めることができないことに困惑して自ら泣き出してしまふほど、落ち込んでしまうのだった。

<p>88 光源氏は宮中へ行く自分の代わりに、惟光を紫の上の屋敷に遣わす</p>	<p>突然惟光が、源氏は訪問するつもりだったが、王宮からどうしても避けられない仕事が舞い込んだ、娘の気の毒な様子がとても心配だったので、ご機嫌伺に彼を送った、との知らせを持ってやってきた。この伝言を伝えると、惟光は源氏が夜、家の警護をするようにと派遣した彼の使用人たちを中へ連れてきた。少納言が言った。「このようなど親切は、どうにもふさわしくないとされます。源氏皇子は、彼の家来がここを警護することを、大事にとらえていらっしゃるのでしょうか。しかしもし、娘の父君がそれを聞いたら、わたし達侍女どもが、娘をひとりの既婚の男性に委ねたとの非難を受けることになります。すべてはお前たちのせいだと思います。と云われることでしょう。」</p> <p>それから彼女は振り向いて、同僚の侍女たちに言った。「いいこと、娘にもこの見張り番たちが来たことを父親に話させてはいけませんよ。」</p> <p>しかし残念なことに、娘はこれらの禁止事項を理解することができなかった。</p>
<p>89 少納言の乳母は、屋敷を訪問した惟光へ自分の考えと不安を訴える</p>	<p>少納言は、惟光にあれこれ訴えた後、また言った。「しばらくの後、この娘は何としても彼の妻になるだろうと、わたしは疑っていません。なぜなら、この娘の運命にはそう書かれているように思えるのです。しかし今も、それから当分、彼が曖昧な言葉でわたしに言ったような類の話はすることはできません。それを彼も理解していれば、わたし達もみな理解しています。ですから、彼が一体何を望んでいるか、理解できずにいるのです。今日もつい先ほど、兵部卿皇子が来た時に、彼はわたしに、彼女から目を離さないように、どんな類の不注意もあってはいけない、と命じられたのです。打ち明けますが、彼がそう言った時、よく考えもせずに許してしまった、あなたの主人の節度のない振る舞いを思い出したのです。」</p> <p>そう言ったものの、彼女は咄嗟に、惟光が彼女の言葉を、彼女が意図していない内容に変えて伝えてしまうのではないかと、恐れた。そして物悲しそうに頭を振ると、黙り込んだ。彼女のこの考えは、そう間違ったことでもなかった。なぜなら惟光は、源氏が一体どんな節度のない振る舞いをしたのか、と考えていたからだ。</p>
<p>90 光源氏は惟光から父兵部卿宮が紫の上を引き取る予定であると聞く</p>	<p>惟光の話聞いて、源氏の心はその娘のことでいっぱいになった。そして今すぐにそこへ参上したい気持ちになった。しかし、文盲な者たちのところにこうして繁々と通うのも、勘違いのものになるかもしれない、娘を実際の歳よりも上だと思って、馬鹿げた言いがかりをして回るだろう、と危惧していた。彼女を自分の宮殿に連れてくるのが、最も良い。一日中、彼はさまざまな手紙を送り、日の入りに惟光は再びその屋敷を訪れて、とても大事な用があり、源氏はまた来られなかった、と言い、この怠慢に対する詫びを述べた。少納言は、娘の父君が突然、明日娘を迎えに来ると決めたので、みな忙しくしておりお迎えすることはできない、使用人たちはみなこの古く荒れ果てた家を離れることに感化されている、ここに長い間住み、そして今、新しく大きな屋敷へ行こうとしているもので、と手短かに答えた。彼女は彼のそのほかの質問にも、同じくらい手短かに答えた。そして針仕事に精を出し始めたので、惟光は帰らざるを得なかった。</p>
<p>91 左大臣邸に来ている光源氏は惟光に紫の上を連れ出すことを命じる</p>	<p>惟光の話聞いて、源氏の心はその娘のことでいっぱいになった。そして今すぐにそこへ参上したい気持ちになった。しかし、文盲な者たちのところにこうして繁々と通うのも、勘違いのものになるかもしれない、娘を実際の歳よりも上だと思って、馬鹿げた言いがかりをして回るだろう、と危惧していた。彼女を自分の宮殿に連れてくるのが、最も良い。一日中、彼はさまざまな手紙を送り、日の入りに惟光は再びその屋敷を訪れて、とても大事な用があり、源氏はまた来られなかった、と言い、この怠慢に対する詫びを述べた。少納言は、娘の父君が突然、明日娘を迎えに来ると決めたので、みな忙しくしておりお迎えすることはできない、使用人たちはみなこの古く荒れ果てた家を離れることに感化されている、ここに長い間住み、そして今、新しく大きな屋敷へ行こうとしているもので、と手短かに答えた。彼女は彼のそのほかの質問にも、同じくらい手短かに答えた。そして針仕事に精を出し始めたので、惟光は帰らざるを得なかった。</p>
<p>92 思案のあげく、光源氏は滞在中の左大臣邸から夜明け前に出かける</p>	<p>源氏は言った。「わたしは家に戻ってやらなければならない、とても重要な用事を思い出しました。それほど長い間、外出するわけではありませんから。」</p> <p>そう言うと、使用人たちですら彼がいつ出て行ったのかわからないほど、ひっそりと出て行った。彼のラバーダは彼の部屋から持って来られた。そして彼は、馬に乗っていた惟光だけを共に連れ、出発した。</p>
<p>93 少納言の乳母が応対に出るものの光源氏は制止も聞かずに奥へ入る</p>	<p>ずいぶん長いこと扉を叩いて、門を開けさせるのに成功した。門を開けたのは、この秘密ごとに加担していない使用人だった。惟光はその人に、車をできるだけ静かに中に引き入れるように、と言って、自らは正面の扉へ向かった。彼は、少納言が誰かが来たのだと気が付くように、扉をカタカタ鳴らして咳払いをした。彼女が扉までやって来ると、彼は言った。「わたしの主人がお待ちです。」</p> <p>少納言は言った。「ですが、娘はいまぐっすり眠っています。皇子がこんな時間にいらっしゃるとは、どういうことでしょうか？」</p> <p>彼女は、おそらく夜のそぞろ歩きからの帰る途中でこちらへ寄ったのだろう、と思ってこう言った。源氏は近よりながら言った。「娘が父親の家へ行ってしまうと聞きました。しかし、彼女が行ってしまう前に、大切な話がありました。」</p> <p>少納言は皮肉っぽく言った。「あなたがしたいという話について、彼女は十分配慮することでしょう！ 10歳の娘に大切な話とは…！」</p> <p>源氏はザナーナに立ち入った。少納言は怯えて悲鳴を上げた。「あなたは、そちらに行くことはできません。年老いた女性たちが何人も、服も着ずに寝ているのです…。」</p> <p>源氏は言った。「彼女たちはみなぐっすり眠っています。御覧なさい、わたしは子どもだけを起こしているのですよ。」</p> <p>そして、子どもの上に屈んで言った。「朝霧が出始めましたよ。起きる時間です！」そして少納言が何か言う前に</p>

<p>94 光源氏は父宮の使いであると嘘をついて、寝ている紫の上を起こす</p>	<p>娘を腕に抱いて、優しい声で起こし始めた。半ば夢見心地の中で、彼女は、父親が迎えに来たのだらうと思った。彼女の髪のもつれをほぐしながら、源氏は言った。「おいで、君の父親が、君を迎えに行つて宮殿まで連れてくるように、とわたしを遣わしたんだよ。」</p> <p>父親でないのを認め、彼女は一瞬呆然とし、怯えてうつむいた。</p> <p>源氏は言った。</p> <p>「君の父親か、わたしか、君は考えなくて良いのだよ。同じことだからね。」</p> <p>そう言いながら、彼は彼女を抱きかかえると、部屋の外に出た。惟光と少納言は、驚きの余り2人とも同時に叫んだ。</p> <p>「これは、どうしたことですか。」</p> <p>この先、彼はどうしようというのか？</p>
<p>95 二条院へ誰か来るようにと指示して、光源氏は紫の上を連れて行く</p>	<p>源氏は言った。</p> <p>「わたしが君に、ここだと彼女とあまり会うことができないので、どこか最適な場所に彼女を連れていく準備をしよう、と言つたので、君は不安になったようだね。聞いたところによると、今君は、わたしがもっと会いづらくなるような所に、彼女を送り出そうとしているそうではないか。そういうわけで、君たちの中からひとり、わたしと一緒に来る準備をするんだ。」</p> <p>今や、彼が娘を連れ出そうとしていると分かつた少納言は、怯えて、ある独特な動揺に見舞われた。そして言った。</p> <p>「あなたは、何と悪い時をお選びになつたのでしょうか。今日、彼女父親が、彼女を連れに来ます。わたしは彼に何と言つたら良いのでしょうか？ もし、あなたがもう少しお待ちくださいれば、きっと、万事うまくいくに違いありません。このように性急に事を運んでも、あなたにとって何の得もないでしょう。しかし、気の毒な使用人たちが、厄介ごとに巻き込まれることになります。」</p> <p>源氏は言った。</p> <p>「そういうことなら、できるだけ早くこの者たちも、わたしの後を追つて来れば良い。」</p> <p>少納言を絶望状態に残したまま、彼は車を中に呼び寄せた。子どもは、傍らで、驚いた様子で立ちつくして泣いていた。彼が目的を果たすことを阻止する術は何もなさそうだった。そこで彼女の乳母は、昨日の夜縫っていた娘の服をまとめると、一番上等な服を着て車に乗り込んだ。</p>
<p>96 少納言の乳母は困惑するもの紫の上のことを思つて涙をこらえる</p>	<p>源氏の家はそこからそれほど遠くなかつたので、彼らは夜明け前に到着した。屋敷の西の対の正面に停まり、源氏が降り立つた。娘をそつと抱きかかえて地面に立たせた。これらすべての出来事が、夢のように思えた少納言は、未だにこの家に入るべきかどうか、ためらっているようだった。源氏は言った。「もし気が乗らないのなら、君が中に入る必要はない。もう娘は無事にここに到着したのだから、わたしは満足だ。もし戻りたいなら、言いなさい。わたしが君をあちらに送り届けよう。」</p> <p>彼女は躊躇いながら、車から降りた。これほど唐突に、これらすべてのことが起きた、それだけさえ、彼女を困惑させるのには十分だった。彼女は、兵部卿皇子が彼の娘が行方不明だと知つたら、どう思うだろうか、とも心配していた。実際、この娘はどうなってしまうのだろうか？ 何らかの理由で、彼女の女主人はみな奪われてしまつていた。延々と泣き続けて、恐怖を覚えると、彼女は涙を乾かし、祈り始めた。</p>
<p>97 紫の上のために、光源氏は通常は使わない対屋に調度などを整える</p>	<p>屋敷の西の対は長い間、誰も住んでいなかった。そのため、完璧に整えられていたわけではなかつたが、惟光が少しの間に要所要所に衝立やカーテンを付けた。源氏のためにも、帝王のカーテンを下ろして、潜在の簡易的な支度を整えた。自分の夜具を、彼は屋敷の別の場所から取り寄せると、就寝しに行った。</p>
<p>98 二条院へ連れてこられた紫の上は、気が悪くなり体をふるわせる</p>	<p>そう離れていないところに寝床が敷かれた娘は未だ困惑していて、自分が置かれたこの新しい環境に狼狽していた。彼女の唇は震えていたが、悲鳴をあげる勇気はなかつた。ついに彼女は、涙ぐんだ子供っぽい声で言った。「わたし、少納言のところで寝たいわ」。源氏はこの話を聞いていた。言った。「君はもう大きくなつたのだから、乳母の傍で寝るのは適切ではないよ。君がゆったりと横になっているその場所で眠るよう、努力なさい。」</p> <p>彼女はひどい孤独感を覚え、長いこと横たわつたまま泣いていた。乳母は心配のあまり、寝床へ行つつもりなどまったくなかつた。残りの夜を、彼女はグラーム・ガルデシュ(邸宅のそばに立つ使用人の住まい)で泣きながら、周りのことなどまったく気に留めない様子で過ごした。</p>
<p>99 少納言の乳母は、輝くばかりの立派な二条院で間の悪い思いをする</p>	<p>やや明るくなると、彼女はあちこちを見回した。感嘆するような柱や彫刻だけでなく、まるで宝石でできた床のような中庭に敷かれた小石さえも、彼女は初めのうち畏怖の念を覚えたが、女性しか住んでいない屋敷にいるのではないとの思いが、彼女の心に安心感を生み出した。</p> <p>ちょうど、たくさんの見知らぬ人々が用事でこの屋敷に出入りする時刻だった。何人もの男が彼女の窓の傍を通つていったが、彼女は、その人たちがひそひそ声でこういつているのを聞いた。</p> <p>「ここに住むのに、誰か新しい女性がやつて来たという話だぞ。一体、誰だろう。間違はなく、誰か大切な女性だと思ふね！」</p>
<p>100 かわいらしい女童を呼び寄せた光源氏は休んでいた紫の上を起こす</p>	<p>屋敷の他の対から、沐浴のための水が運ばれてきた。それから、朝食用にゆでた米。源氏は朝もかなり遅くなってから起きた。彼は少納言に言った。</p> <p>「娘をひとりぼっちにしておくのは良くないから、昨夜、君が下がる前に、数人の女の子たちにここへ来て暮らすよう言つておいた。」</p> <p>そういうと、屋敷の東の対からその少女たちを連れてくるようにと、ひとりの使用人を遣わした。彼は特にできるだけ小さな女の子たちを、と命令した。こうして、4人のかわいらしい小さな小さな女の子たちがやつて来た。</p> <p>紫は源氏のラバーダに包まり、まだ寝ていた。やつとこのことで彼女を起こすと言つた。</p> <p>「もう、悲しんではいけませんよ。見てご覧。もし、わたしが君をこれほど愛してはなかつたなら、君のことをどうしてこんなに気に掛けるだろうか？ 小さな女の子たちは品行正しく、言うことを聞かなければいけないよ。」</p> <p>このようにして、彼女の教育が始まつた。</p>
<p>101 紫の上の気をひこうと、光源氏は面白い絵などを見せて相手をする</p>	<p>やつと少し落ち着いて彼女の方を見ると、彼が考えていた以上に彼女はずつと美しく思われ、彼らはすぐに愛情に溢れた会話をするようになった。彼は彼女に見せようと、素晴らしい絵や玩具を取り寄せ、彼女を喜ばせるために、できる限りの手を尽くした。次第に彼は、朝早く起きることを、彼女に承諾させた。濃い茶色の布でできたありきたりでみすばらしい服を着て、悲しみを忘れて遊び、笑っている彼女は、見ているうちに源氏まで幸せな気分になるほど美しかった。</p>
<p>102 紫の上は光源氏が留守にしている間に、二条院のあちこちを見回す</p>	<p>源氏が東の対へ立ち去ると、彼女は外へ出て、庭を散策し始めた。木々の間や池のほとりを歩き、露に覆われた花々を喜んで眺めた。そして、あの色とりどりの服を着た見知らぬ人たちが行き来しているのを目にすると、ここは本当にいい場所だと思つた。それから彼女は鏡やカーテンに類稀な絵が描かれているのを見て、それらに心奪われた。</p>

103 留守にする光源氏は紫の上のために手習いの手本などを残していく	源氏は2、3日宮殿へ行かなかつたばかりか、時間のすべてを、娘を喜ばせるために費やした。彼は自分でも多くの絵を描き、娘が自分のアルバムに挟むようにと、一枚ずつ彼女に見せた。彼女は、今までみたどんな絵よりも、それが一番気に入った。それから彼は、武蔵野（ムーサーシー）という名の詩の一節を彼女のために書留めた。彼女はサフラン色に黒いインクで書かれたその太々とした文字がとても気に入った。少し小さな文字で、そのひとはこの詩も書いた。 「本の根を見ることはかなわないが、それでもその若芽、つまり武蔵（ムーサーシー）湿原に生える濡れた若木を愛している」。
104 光源氏は紫の上へ手習いを教え、人形などの家を作って一緒に遊ぶ	彼女がそれを堪能していると、源氏が言った。 「こっちをご覧なさい！ 君も何か書いてみなさい」。 その少女は、まったく気に留めない魔法のような調子で彼の方を見ながら言った。 「わたし、まだきちんと書けないわ」。 源氏は噴き出した。 「まだきちんと書けないからって、何だというんだい？ わたしが君をすっかりこのまま許すなんて、あり得ないよ。わたしが、今日は君に教えてあげよう」。彼のほうをちらちらと横目で見て、彼女は書き始めた。彼女が子どもらしい仕草で筆を握っているのに、彼は言いようもない喜びを感じた。突然、彼女は叫んで言った。 「あ、わたし駄目にしちゃったわ」。 そして、書いていたものを恥ずかしがって隠した。しかし、彼は書いたものはすべて見せるように無理強いした。見ると、このナズムだった。 「あなたの脳裏になぜ武蔵が浮かんだのか、わたしには理解できません。それに、わたしは戸惑っています。あなたはどの若木のことをわたしの親戚だと言ったのですか？」。 この詩は子供らしい大きな、大きな字で書かれていて、確かに今のところは拙かったが、将来的には上達するであろう兆しも見て取れた。彼女の筆跡と、亡き尼僧の筆跡は大変よく似ていた。彼は、良い手本を与えれば、すぐに上手に書けるようになるに違いない、と確信した。 その後、彼らは人形の家を作り、源氏がしばらく、このところ頭の中にこびりついていたあの心配事を忘れてしまうほど、長いこと一緒に遊んでいた。
105 事情を知らぬ兵部卿宮は紫の上の失踪を嘆き、少納言の乳母を疑う	兵部卿皇子が紫を連れに家へやって来ると、あちらに残っていた侍女たちはこの上なく不安になった。源氏は、少なくともしばらくの間は彼女について誰にも何も教えない、との約束を彼女たちに取り付けていた。そして少納言も、それが最善策だと賛同していた。それゆえ彼は、少納言がどこへ行くか告げずに娘と一緒に連れて行った、ということしか彼女たちから聞き出すことはできなかった。皇子は大きな災難に見舞われた。恐らく、彼女の母方の祖母が、乳母の頭の中に、とって父親の宮殿に行くのは娘にとって好ましくない、という話を植え付けたのだろう。だから、娘は良い扱いを受けないであろうと、率直に言わず、少納言は聡明さを働かせて、機会があれば彼女を連れてどこかへ行くのが良いと考えたのであろう。彼は、大変気を落として家へ戻っていった。そして侍女たちに、彼女に関して何か分かったらすぐに知らせるように、と言いついて行った。そのせいで、気の毒な彼女たちはさらに狼狽した。彼は山に住むサンニャースイーのところにも問い合わせたが、そこから何もわからなかった。彼には、彼女がとても愛らしく、興味深い娘に思っていた。それをこのように失ってしまうことは、とても悲しいことだった。
106 継母の北の方は、紫の上を意のままにできなくなったのを残念がる	兵部卿の妻は、もうずいぶん前に娘の母親に嫌悪することはなくなっていて、子供の然るべき世話について、頼りにしてもらえないことに腹を立てていた。
107 紫の上は尼君を慕って泣く時があるものの、光源氏にもなれ親しむ	次第に、紫の家のすべての使用人たちがその屋敷へやって来た。彼女と遊ぶために連れてこられた小さな女の子たちは、自分の仲間にとっても喜んで、すぐにお互い一緒に喜んで遊び始めた。 皇子がどこかへ外出しているときや、仕事で忙しいときは、静かに過ぎていく晩には大抵、尼僧の母方の祖母を思い出して泣いていた。しかし彼女は、たまにしか見ていなかった父親のことは、まったく思い出さなかった。今や、彼女には「新しい父親」がいたし、彼への愛は増す一方であった。
108 光源氏は、かわいらしい紫の上を「風変わりな秘蔵っ子」だと思う	彼がどこから戻ってくると、まず彼女が会い、それから面白い遊びや会話が始まるのだった。彼女は何の戸惑いも、恥じらいもなく、彼の膝の上に座っていた。これ以上素晴らしい仲間など、考えられなかった。大きくなったら、彼女はこれほど信頼してくれなくなるかもしれない。彼女の性格に、新たな一面が現れるかもしれない。彼が、誰か他の人のことをより気にかけていると疑ったりしたら、機嫌を損ねるかもしれない。このような状況においては、ありとある期待外れな事が起きるものだが、今現在の状況においては、彼女は興味深い玩具であった。もし、彼女が本当の彼の娘だったなら、伝統と習慣が、これほど気兼ねなく、そしてこれほど長い間、一緒の時を過ごすことを許さなかつただろう。しかし彼は、この状況においては、そういった類の配慮は必要ないと考えていた。

●中国語訳『十帖源氏』データ

小見出し	十帖源氏 校訂本文	十帖源氏 現代語訳	『十帖源氏』巻一「桐壺」（中国語・母語話者／庄婕淳さん訳）
ナシ	<p>1 丁裏・2 丁表</p> <p>光源氏物語は、村上天下皇女十宮大斎院より、一条院の後上東門院へ「めづらかなる草子や侍る」と、御所望の時、式部をめてして「何にてもあたらしく作りてまいらせよかし」と、おほせらる。式部、石山寺にこもりて、此事を祈り申す。折しも、八月十五夜の月、湖水にうつりて、物語の風情空にうかびければ、先、須磨の巻より書たる也。巻の数は天台六十巻、題号は四諦の法門「有門空門亦有亦空門非有非空門」也。一には詞をとり、二には歌をとり、三には詞と歌とを取、四には歌にも詞にもなき事也。始は「藤式部」といひしを、此物語一部の内むらさきの上の事を勝れておもしろく書たるゆへ、「紫式部」といひかへらるゝ也。観音ノ化身ト云々。檀那院僧正天台一心三観血脉許可也。堤中納言兼輔一惟正(傍・=因幡守)一為時(傍・=越前守)一女(傍・=紫式部)母は為信(傍・=摂津守)女堅子(「四には」から2丁表)</p>	<p>『源氏物語』の誕生</p> <p>〈村上天下皇女十宮大斎院〉が、〈一条院〉の後である〈藤原彰子(上東門院)〉に「新作の物語はありませんか」と、お望みになりました。〈彰子〉は、〈紫式部〉を呼んで「がんばって《物語》を新しく作ってきてください」と、おっしゃいました。《紫式部》は、《石山寺》に滞在して、この事を祈りました。すると、《八月十五夜の満月》が、《琵琶湖》の水面に映って、物語の風情が頭に浮かんだので、まず、須磨の巻から書いたそうです。『源氏物語』の巻の数は天台の教典六十巻をもとにして(現在の『源氏物語』は五十四巻)、巻の名前は四諦の法門、「有門、空門、亦有亦空門、非有非空門」という文を参考にして名付けました。第一には物語の本文から、第二には和歌から、第三には本文と和歌から、第四には和歌にも本文にもないところから、巻の名前を決めました。もともと「藤式部」と呼ばれていたのを、この物語の一部で(紫の上)のことをとでもすばらしく書いていたことから、「紫式部」と呼び名が変えられたのです。〈紫式部〉は、観音の化身だという伝説もあります。檀那院僧正に天台一心三観の血脉を許されたのです。</p> <p>紫式部の系図 堤中納言兼輔一因幡守惟正一越前守為時一女(紫式部) 母は摂津守為信女の堅子です。</p> <p>(注)一般的な説とは異なる部分もあります。類似した系図が『源氏物語』の注釈書である、『湖月抄』にあります。</p>	<p>〔1丁裏〕</p> <p>源氏物語の誕生</p> <p>村上天下皇行第十の公主選子内亲王(大斎院)询问一条院の皇后藤原彰子(上东门院),道:“可有新作的物语?”于是,彰子召来紫式部,嘱咐道:“努力创作出新的物语”紫式部在石山寺为此事进行祈祷。正当此时,八月十五夜的满月,映在琵琶湖的水面上,而物语的风情,也由此浮现于她脑海中。据说她是因此景而由须磨卷开始动笔的。源氏物语的卷数以天台宗教典六十卷为本(现行源氏物语是五十四卷),卷名以四谛的法门,即“有门,空门,亦有亦空门,非有非空门”之句为参考命名。第一是取自物语本文,第二是取自和歌,第三是取自本文与和歌,</p> <p>〔2丁表〕</p> <p>第四是不因和歌或本文决定卷名。紫式部本被称为“藤式部”,后因物语中描述紫之上的部分十分出彩,于是她的称呼也就变成“紫式部”。也有说紫式部是观音化身的传说。是由檀那院僧正传授了天台一心三观的教义。</p> <p>紫式部の家系図 堤中納言兼輔・因幡守惟正・越前守为时・女儿*(紫式部) 其母为摂津守为信的女儿坚子。</p> <p>注:与一般说法有部分不同。</p>
ナシ	<p>2 丁裏</p> <p>絵</p>	<p>〈絵1〉八月十五日の夜、石山寺で、紫式部が、『源氏物語』を書きはじめた場面(2丁裏)</p>	<p>〔2丁裏〕</p> <p>図一 八月十五之夜,紫式部于石山寺中起笔写作源氏物语。</p>
<p>1 ある帝の御代に、身分は高くない更衣への帝寵を女御方は憎悪する</p> <p>「いづれの御時〜」(0001／五①／一七)</p>	<p>3 丁表</p> <p>いづれの御時にか、女御かうみ、あまたさぶらひ給ける中に、いとやんごとなきゝにははあらぬが、すぐれてときめき給ふありけり。〔割・いづれの御時とは、醍醐天皇をさしていへり。／時めき給ふとは、「きりつぼの更衣」の事也。〕</p> <p>梨壺、照陽舎。 桐壺、淑景舎。 藤壺、飛香舎。 梅壺、凝花舎。 雷鳴壺、襲芳舎。</p> <p>此きりつぼにすみ給ふかうみを、御てうあひあれば、きりつぼのみかどゝも申也。あまたの女御かうみそねみて、</p> <p>(「いづれ」から3丁表)</p>	<p>(桐壺)</p> <p>いつの時代のことでしょうか、女御や更衣などといったお后が大勢いらした中に、特に高貴な身分ではなく、帝にとでも愛されていらっしゃる女性がいまして。〔「いつの時代」とは、醍醐天皇の時代のことです。帝に愛されていらっしゃる女性というのは、桐壺の更衣です。〕宮殿の梨壺という建物は照陽舎の別名です。桐壺という建物は淑景舎の別名、藤壺という建物は飛香舎の別名、梅壺という建物は凝花舎の別名、雷鳴壺という建物は襲芳舎の別名です。(お后の名前は、それぞれの住んでいる建物の名前前で呼びます)</p> <p>この桐壺に住んでいる更衣を愛されたので、この時の帝のことを〈桐壺の帝〉ともいいます。大勢の女御や更衣たちはうらやんで、毎日〈桐壺の更衣〉が帝の近くにいることに、嫉妬をしばかりしました。</p>	<p>是哪一朝的故事吧,女御更衣等众多后宫妃嫔之中,有一位女性出身并不非常高贵,却得到天皇特别的宠爱。(“哪一朝”是指醍醐天皇的时代。受帝宠的女性,是指桐壺)宮殿中梨壺是照陽舎の別名。桐壺是淑景舎の別名,藤壺是飛香舎の別名,梅壺是凝花舎の別名,雷鳴壺是襲芳舎の別名。(妃嫔的称呼来自其所居的宮殿的名称。)因宠爱这居住在桐壺的更衣,这一位天皇也被称为桐壺天皇。众多妃嫔因桐壺更衣每日侍侍帝侧而衔恨,嫉妒无比。</p>
<p>2 帝から寵愛される桐壺更衣は、周囲からの嫉妬が集中し病弱となる</p> <p>「朝夕の宮仕〜」(0031／五④／一七)</p>	<p>3 丁裏</p> <p>あさゆふの御みやづかへにつけても、心をのみうごかし、うらみををふつもりや、あつく成ゆき、〔割・をもき／病也〕物心ほそげに、里がちなるを、みかど、いよ／＼あはれにおぼして、人のそしりをも、えはゞからせ給はず</p> <p>(「おぼして」から3丁裏)</p>	<p>そうやって、他の后たちの恨みをたくさん作った結果でしょうか、体が弱くなっていました。〔重い病気で〕心細い感じがして、実家に帰っていることが多い(桐壺の更衣)のことを、帝は、これまで以上にたまらなくお思いで、人々が悪口を言っているにも、愛情をお止めになることができません。</p>	<p>许是因这怨恨日积月累,更衣的身体日渐虚弱。(病情严重。)更衣因心中不安,而频繁归省,天皇对其愈加怜惜,周围的谗言也无法阻止他的深情。</p>
<p>3 中国の楊貴妃まで引き合いに出される桐壺更衣は、帝の愛情に頼る</p> <p>「唐土にも〜」(0073／五⑥／一七)</p>	<p>「もろこしにもかゝる事のおりにこそ、世もみだれ、あしかりけれ」と、あぢきなう、人のもてなやみぐさになりて、楊貴妃のためしむき出つべう成ぬ。</p>	<p>中国でもこういう恋愛関係が原因となって、世も乱れ、とんでもないことにもなったと、世間の人もおもしろくない気がして、人々の惱みの種にもなり、中国で(玄宗皇帝)を夢中にさせた(楊貴妃)の話に例えられそうになりました。</p>	<p>中国也曾有因这样的恋爱关系而使世间大乱,酿成大祸。于是世人皆不以为然,为此担忧,并以中国的玄宗皇帝盛宠的杨贵妃喻之。</p>
<p>4 桐壺更衣は父大納言の没後に入内し、孤立無援の宮中で心細い生活</p> <p>「父の大納言〜」(0103／五⑧／一八)</p>	<p>此かうみの父はなくなり、母北方、いにしへのよしあるにて、御かた／＼にもをとり給はねど、事とある時は、より所なく、心ほそげ也。</p>	<p>この〈桐壺の更衣〉の父はすでに死んでいて、母親の〈北の方〉は、由緒のある家柄出身であり、古風な人なので、他のお后たちにも負けないようにしています。しかし、何か大事なことがある時には、頼るところがなく、心細い様子です。</p>	<p>这位桐壺更衣的父亲已经去世,母亲北之方出身旧家,崇尚古风,事事力求不逊色于其他妃嫔。不过,一旦有大事发生,无处可以依靠,也因此心中不安。</p>

5 美しい玉の男御子が誕生し、帝は第一皇子よりこの弟宮を寵愛する 「前の世にも〜」(0136 / 六① / 一八)	さきの世にも御契りやふかゝりけん、きよなる玉のをのこみこさへ生れ給ぬ。〔割・其を光君と／いふ也〕一のみこは、右大臣の女御の御はらにて、うたがひなきまうけの君と、かしづき聞ゆれど、此君の御にほひには、ならび給ふべくもあらず。	〈桐壺の帝〉と〈桐壺の更衣〉は前世でも約束が深かったのでしょうか、美しい玉のような皇子までも生まれました。〔この人を〈光源氏(光る君)〉といいます。〕第一皇子は、〈右大臣の女御〉が生んだ子供なので、間違いなく皇太子になるだろうと、世間の人々も大切にしているのですが、この〈光源氏(若君)〉の美しさには、とうてい勝つことができません。	〔桐壺帝与桐壺更衣〕或许前世因缘深厚，一位如美玉般的皇子诞生了。〔这位皇子便称为光源氏(光之君)〕第一皇子是右大臣家出身的女御所生，世间的人都认为他会成为皇太子，因此十分看重他。但说到底，他的相貌还是及不上光源氏的美貌。
6 帝は桐壺更衣を厚遇し、弘徽殿女御は我が皇子の立場に疑いを抱く 「はじめより〜」(0184 / 六⑦ / 一九)	4丁表 此みこ生れ給て後は、みかど御心ことにきてたれば、坊にもみ給ふべきなめりと、一のみこの女御は、おぼしうたがへり。 〔「御心」から4丁表〕	〈光源氏(若君)〉が生まれてからというものは、帝はこの〈光源氏〉をとても大切にしていって、しゃいましたので、〈光源氏〉が、皇太子になるのではないかと、第一皇子の母である後は、心の中で心配しています。	自光源氏出生以来，天皇十分看重他。第一皇子的母妃想着莫非光源氏会被立为皇太子，心中十分担心。
7 「人より先に〜」(0248 / 六③ / 一九)	ナシ	ナシ	ナシ
8 更衣の局は東北隅の淑景舎で、参上の折毎に酷い嫌がらせを受ける 「御局は桐壺〜」(0288 / 七③ / 二〇)	あまたの御かた／＼を過させ給ひ、ひまなき御前わたりに、人の心をつくし給ふも、ことほり也。あまりうちしきりまうのぼり給ふお／＼は、うちはしわた殿、こゝかしこの道にあやしきわざをして、御をくりむかへの人のきぬのすそ、たへがたう、まさなき事ともあり、又ある時は、えさらぬめだうの戸をさしこめ、こなたかなた心をあはせ、はしたなめわづらはせ給ふ時もおほかり。	帝が、たくさんした後たちの部屋の前を素通りして、何度も何度もお通いになることに、他の后たちが嫉妬しているのも、もっともなことです。あまりに〈桐壺の更衣〉が帝に呼び寄せられる回数が多くなっていきます。すると、打橋や渡殿といった宮殿の廊下など、〈桐壺の更衣〉が通る、あちらこちらの道にいたづらがされていました。それは、見送りや出迎への侍女の着物の裾が、まったく我慢できなくなるような、とんでもないことなどです。またある時は、〈桐壺の更衣〉が、絶対通らなければならない中廊下の扉を開けて、こちらとあちらで協力し、〈桐壺の更衣〉を閉じ込めて、ひどい目にあわせたり困らせたりすることも多いのです。	天皇途经许多嫔妃的院舍，却从不停留，独宠桐壺更衣。次数一多，其他的嫔妃心中嫉恨，也是难免的事。随着桐壺更衣被天皇召的次数增多，打桥或渡殿之类宫殿里走廊，凡桐壺更衣必经的通道，处处遭人设计，致使送别或迎接的侍女的衣裾，变得令人无法忍受。实在是非常过份的事。有时，是锁上桐壺更衣必经走廊的门，串通一气，将更衣困在其中，刻意为难，使其困顿不堪。这样的事情也经常发生。
9 帝は桐壺更衣への虚待を不憫に思い、局を淑景舎から後涼殿に移す 「ことにふれ〜」(0344 / 七⑨ / 二〇)	4丁裏 みかどいとゞあはれと御らんじて、後涼殿にもとよりさぶらひ給ふ。かうみを、ほかにうつし、此かうみのうへつほねに給はる。そのうらみ、ましてやらんかたなし。 〔「そのうらみ」から4丁裏〕	帝はますます〈桐壺の更衣〉をかわいそうに思って、後涼殿という所に前から部屋をもらっていた身分が低い后を、他の場所へ移し、〈桐壺の更衣〉のもう一つの部屋としました。部屋を他に移された後の恨みは、とうてい晴れることがありません。	天皇愈发怜惜桐壺更衣，便将原居后凉殿的低位嫔妃迁往他处，将其作为桐壺更衣的另一处居所。 〔4丁裏〕 而被迁出的嫔妃心中的怨恨，到底也是难以消除。
10 若宮は三歳で袴着の儀式をし、成長と共に憎しみが賞賛へと変わる 「この御子三つ〜」(0378 / 七⑩ / 二一)	みこ、みつに成給ふとし、御はかまぎの事、一の宮のにもとらず。御かたち心ばへ、ありがたくめづらしきまで見え給へば、此君をば人々もえそねみあへず。	〈光源氏(若君)〉は、三歳になった年、袴着の儀式をしました。その様子は、第一皇子がこの儀式をしたときにも負けないほどです。見た目や性格が、めつたにないほど素晴らしいので、〈光源氏(若君)〉を他の后たちも憎むことができません。	光源氏(公子)三岁时举行了着袴的仪式。仪式之盛大，不逊色于第一皇子之时。光源氏相貌与性格都极为出色，所以，其他的嫔妃们也无法讨厌他。
11 若宮が三歳の夏に桐壺更衣は重病になり、御子を宮中に残して退出 「その年の夏〜」(0439 / 八② / 二一)	其年の夏、御母御休所〔割・更衣の事也〕、わづらひて里へまかでんとし給へど、つねのあつしさに、御めなれて、いとまさらにゆるさせ給はず。日々にをもり給て、いとよはうなれば、更衣の母、なく／＼そうして、みこをほとゞめさせ、みやす所ばかりまかで給ふ。	その年の夏、母の御息所〔〈桐壺の更衣〉のことです。〕は、病気になって実家へ帰ろうとしますが、〈桐壺の更衣〉がいつも体が弱いことに、帝は慣れてしまい、帰ることを絶対に許しませんでした。日に日に病気が重くなってきて、ひどく衰弱したので、〈桐壺の更衣〉の母は、泣きながらお願いをして、〈光源氏(若君)〉を宮中に残したまま、〈桐壺の更衣(御息所)〉だけ帰ることになりました。	那年夏天，光源氏之母御息所〔即桐壺更衣〕因为生病，而请求回家。但是因为她身体一向病弱，天皇也已经习惯，于是并未同意。就这样，更衣的病情日渐加重，身体异常虚弱，桐壺更衣的母亲泣泪恳求，方得以将她带回娘家，而把光源氏留在宫中。
12 帝は絶え入らばかりの桐壺更衣をご覧になるにつけ途方に暮れる 「限りあれば〜」(0488 / 八⑦ / 二二)	5丁表 うつくしき人の、おもやせあるかなきにきえものし給ふを御覧じて、きしかたゆくすゑ、よろづの事を契りの給へと、御いらへもきこえず。まゆもたゆげにて、われかの気しき也。かぎりあらんみちにも、をくれさきだゞじとぢぎらせ給けるを、打すてゞはえゆきやらじと、の給はするを、 〔「にて」から5丁表〕	帝は、かわいらしい〈桐壺の更衣〉が、やつれて意識がはっきりしない様子を御覧になって、今までのことや将来のこと、いろいろなことを約束したりするけれども、〈桐壺の更衣〉は、返事をするでもできません。つらそうな顔をして、意識を失った状態です。帝が「死への旅にも、共に行こうと約束したのに、私を残してはいけませんよ」と、おっしゃるのを、	天皇看着娇美的更衣因病憔悴，意识不清，对着更衣许下千般誓愿，而更衣已经无力回应。神情苦涩， 〔5丁表〕 失去意识。天皇帝，曾经誓要共死，如今可不能徒留我一人。
13 輦車の宣旨を受けた桐壺更衣は、帝に歌を残して里邸へと退出する 「輦車の宣旨〜」(0537 / 八⑭ / 二二)	女も、いみじと見奉りて、 かぎりとして わかるゝみちのかなしきに いかまほしきはいのちなりけり てくるまのせんじなどの給はせて、まかで給ふ。  ※「てくるまのせんじ」は本文(池田本)では、更衣の歌より前におかれている。	〈桐壺の更衣(女)〉も、とても嬉しく思い、次のように和歌を詠みました。 かぎりとしてわかるゝみちのかなしきにいかまほしきはいのちなりけり 帝は、〈桐壺の更衣〉に輦車に乗ることを許し、〈桐壺の更衣〉は実家に帰りました。	听到这，桐壺更衣(女)也非常开心，咏了如下的和歌。 かぎりとしてわかるゝみちのかなしきに いかまほしきはいのちなりけり 天皇特许桐壺更衣乘辇车，就这样，桐壺更衣回到了娘家。
14 心塞がる帝は眠れぬ夏の短夜に、桐壺更衣の死を聞き悲嘆に暮れる 「御胸つと〜」(0608 / 九⑦ / 二三)	みかど、御むねふたがり、御使の行かふ程もなきに、夜なかつぐる程に、たえはて給ふ、きこしめす。御心まどひ、何事もおぼしわかれず。	帝は、胸がつかまるほどに悲しんでいます。帝のお見舞いの使者が行って帰って来るほどの時間もたっていないほどに、「夜中を過ぎるころに、〈桐壺の更衣〉が息を引き取りになりました」と、お聞きになります。帝は、気も動転して、もう何の分別もつきません。	天皇心中满是愁绪，十分感伤。派去探望的使者一去一来，似在瞬间之间，便传来夜半将过，更衣便已经去世的消息。天皇但觉天旋地转，思绪混乱。

15 三歳の若宮は母君の死により、服喪のため宮中から里邸へ退出する 「御子へ〜」(0644 / 九⑩ / 二四)	5 丁裏 みこをばかくても御らんぜまほしけれど、れいなき事なれば、まかでさせ給ふ。みこも何事ともおぼさず。人々のなきまどひ、うへも御涙のひまなくなかれおはしますを、あやしと見奉給ふ。(「ひまなく」から5 丁裏)	帝は、〈光源氏(若君)〉をごんな時でも御覧になりたいと思うけれど、喪中の人が宮殿にいることは前例にないので、〈光源氏〉を母君の実家に帰せました。〈光源氏(若君)〉も何が起きたのかもわかりません。〈光源氏〉は、周りの侍女たちが泣きわめき、帝も涙がとまらなくなっていらっしやるのを、何だか変だと見えています。	此时天皇非常想将光源氏(若君)留在身边,但是居丧之人留在宫殿并没有前例,只好将光源氏送归母家。光源氏并不知发生了何事。只是看着周围的侍女大声哭泣,天皇也不禁泪下,心中觉得奇怪。
16 桐壺更衣の葬送は鳥辺野で行われ、母は娘と一緒に泣き焦がれる 「限りあれば〜」(0684 / 一〇② / 二四)	かぎりあれば、をたぎといふ所にて、けぶりになし奉る。母君も、おなじ煙にと、なきこがれ、御をくりの女ばうの車に、したひのりて出給ふ。	きまり通り、愛宕という所で、葬儀を行いました。母君も、〈桐壺の更衣〉と一緒に、火葬の煙となって消えてしまいたいと、泣いて、見送りの侍女の車に、追いつくようにして乗ってかけました。	照着惯例,在爱宕举行了葬礼。更衣的母亲哭着要与女儿一道化为飞灰,如追赶般坐上了送葬的侍女的车。
17 「むなしき〜」(0712 / 一〇⑤ / 二四)	ナシ	ナシ	ナシ
18 桐壺更衣に三位追贈の宣命がくだり、女御更衣たちは憎しみを増す 「内裏より御使〜」(0741 / 一〇⑧ / 二五)	内より御使ありて、三位のくらみをくり給ふ。	帝から使者があつて、亡くなった〈桐壺の更衣〉に三位の位をお贈りになりました。	天皇也派来使者,赠予死去的桐壺更衣三位的官位。
19 聡「もの思ひ知〜」(0775 / 一〇⑩ / 二五)	ナシ	ナシ	ナシ
20 「はかなく〜」(0809 / 一一① / 二六)	ナシ	ナシ	ナシ
21 帝は若宮を恋しがり、野分だつた暮に鞍負命婦を更衣の里に遣はす 「一の宮を〜」(0850 / 一一⑤ / 二六)	みかどは、一の宮を見給ふにも、わか宮の御恋しさのみおぼし出つゝ、女ばう、めのとなどをつかはし、ありさまこしめす。野分たちはた寒き夕ぐれ、ゆげいの命婦をつかはさる。	帝は、第一皇子を御覧になつても、〈光源氏(若君)〉を恋しく思い出してばかりいて、侍女や乳母などをつかつて、〈光源氏〉の様子をお聞きになります。風が強くて肌寒い夕暮れに、〈鞍負の命婦〉という女官を〈桐壺の更衣〉の母の所へ行かせました。	天皇看着第一皇子,却愈发相信光源氏,于是派侍女与乳母去探望光源氏。寒风凛冽,寒气入骨的傍晚,名为鞍负命妇的女官出发前往桐壺更衣母亲的居所。
22 「夕月夜の〜」(0877 / 一一⑨ / 二六) ~ 25 「『しばしは〜」(0987 / 一二⑦ / 二八)	ナシ	ナシ	ナシ
26 帝からの文は、若宮と共に参内するようにと懇ろに促すものだった 「目も見え〜」(1043 / 一二⑬ / 二八)	勅書の歌 みやぎ野の露ふきむすぶ風のをとに小萩がもとをおもひこそやれ	帝からの手紙に書いてあつた和歌です。 みやぎ野の露ふきむすぶ風のをとに 小萩がもとをおもひこそやれ	这是天皇的信上写着的和歌。 みやぎ野の露ふきむすぶ風のをとに 小萩がもとをおもひこそやれ
27 「命長さの〜」(1094 / 一三⑥ / 二九) ~ 30 「上もしか〜」(1256 / 一四⑪ / 三一)	ナシ	ナシ	ナシ
31 月が沈む頃、命婦の歌を受け祖母君は惜別の情を車中の命婦に伝える 「月は入り方〜」(1315 / 一五④ / 三二)	6 丁表 命婦、かうみの母にあひて、 すゞむしのごゑのかぎりをつくしてもながき夜あかずふるなみだかな くは君 いとゞしく虫のねしげきあさぢふに露をきそふる雲のうへ人 (「すゞむし」から6 丁表)	〈鞍負の命婦〉が、〈桐壺の更衣〉の母に会って詠んだ和歌です。 すゞむしのごゑのかぎりをつくしても ながき夜あかずふるなみだかな くは君 いとゞしく虫のねしげきあさぢふに 露をきそふる雲のうへ人	下文は鞍負命婦と桐壺更衣の母亲会面时咏的和歌。 すゞむしのごゑのかぎりをつくしても ながき夜あかずふるなみだかな  (为回应鞍负命妇咏的和歌,桐壺更衣的母亲(祖母君)咏了以下和歌。) 祖母君 いとゞしく虫のねしげきあさぢふに 露をきそふる雲のうへ人
32 鞍負命婦の帰参に際して、祖母君は桐壺更衣の形見の装束等を贈る 「をかしき御贈〜」(1358 / 一五⑩ / 三二)	をくり物あるべきおりにもあらねばとて、かうみの残しをき給へる御さうぞく御くしあげのてうど、そへ給ふ。	良い贈り物をする場合にはありませんので、〈桐壺の更衣〉が残した着物や装飾品を、手紙にそえてあげました。	这并不是馈赠佳礼的时候,于是更衣的母亲将桐壺更衣留下的衣物与装饰品,付上书信交予他。
33 「若き人々〜」(1378 / 一五⑫ / 三二)	ナシ	ナシ	ナシ
34 桐壺帝は女房と語り明かし長恨歌の絵を見ながら命婦の帰参を待つ 「命婦へ〜」(1420 / 一六③ / 三三)	みかどはふけてもおほとのごもらず、せんざいの花御覧するやうにて、女ばう四五人さぶらはせて、御物語せさせ給へり。	帝は夜更けになつてもおやすみにならず、庭先に植えてある花を眺めながら、侍女を四、五人そばに控えさせて、お話をしていらっしゃいました。	夜深了,而天皇仍未就寝,与四五侍女边赏着庭前的花草,一边闲话。

35 帝は里邸の様を命婦から聞き、とり乱した祖母君の返書に心を遣う 「いと細やか〜」(1469 / 一六⑧ / 三三)	御返し奉るうば君の歌。 あらし風ふせぎしかげのかれしよりこはぎがうへぞしづごゝろなき	帝の手紙に対して詠んだ、〈桐壺の更衣〉の母の歌です。 あらし風ふせぎしかげのかれしよりこはぎがうへぞしづごゝろなき	这是回复天皇的信，桐壺更衣的母亲所咏的和歌。 あらし風ふせぎしかげのかれしよりこはぎがうへぞしづごゝろなき
36 「いとかうしも〜」(1504 / 一六⑩ / 三四)	ナシ	ナシ	ナシ
37 帝は若宮の将来を約束し、贈物から長恨歌の叙に思いを重ねて歌う 「かくても〜」(1543 / 一七③ / 三四)	6丁裏 うば君の物語わか君の事などそうして、をくりもの御らんぜさすれば、 〈御〉たづねゆくまぼろしもがなつてにても玉のありかをそことしるべく (「うば君」から6丁裏)	〈桐壺の更衣〉の母(祖母君)の話や(光源氏(若君))のことなどを話して、贈り物を見せると、帝は次のように和歌を詠みました。 〈帝〉 たづねゆくまぼろしもがなつてにても玉のありかをそことしるべく	女官奏上桐壺更衣母亲的话与光源氏的情况，并献上礼物。之后，天皇咏了以下的和歌。 帝 たづねゆくまぼろしもがなつてにても玉のありかをそことしるべく
38 「絵に描ける〜」(1572 / 一七⑦ / 三五)	ナシ	ナシ	ナシ
39 帝の心を踏みこむように、弘徽殿女御は傍若無人な遊び事に耽る 「風の音〜」(1615 / 一七⑩ / 三五)	一の宮の御母、弘徽殿は、久しくうへの御つぼねに参り給はず、月のおもしろきにあそび〔傍・あ=管絃〕をぞし給ふ。人々かたはらいたしと、きゝけり。	第一皇子の母、〈弘徽殿の女御〉は、長い間帝の側に呼ばれず、月の美しい夜に合奏をして遊んでいます。殿上人や侍女たちは、「具合の悪いことだ」と、その合奏の音を聞いています。	第一皇子の母亲弘徽殿女御久不得天皇宣召，在此月色澄美之夜合奏管弦取乐。殿上人与侍女听到合奏的乐声，都觉得这实在是不合时宜。
40 更衣の里邸に思いを馳せて悲しみ歌う帝は、眠ることすらできない 「月も入りぬ〜」(1660 / 一八③ / 三六)	みかど、うば君のもとをおぼして、 雲のうへもなみだにくるゝ秋の月いかですむらんあさぢふのやど	帝は、〈桐壺の更衣〉の母(祖母君)の生活を心配して、次のように和歌を詠みました。 雲のうへもなみだにくるゝ秋の月いかですむらんあさぢふのやど	天皇担心桐壺更衣的母亲的生活，咏了以下的和歌。 雲のうへもなみだにくるゝ秋の月いかですむらんあさぢふのやど
41 「朝に起き〜」(1693 / 一八⑦ / 三六)	ナシ	ナシ	ナシ
42 「さるべき契〜」(1731 / 一八⑩ / 三七)	ナシ	ナシ	ナシ
43 若宮参内で不吉な予感、弘徽殿女御は息子が四歳の春に立坊し安堵 「月日経て〜」(1762 / 一九② / 三七)	7丁表 月日へて、わか君参り給ぬ。きよらにおよずけ給へば、いとゆゝしうおぼしたり。あくる年の春、一の宮春宮にさだまり給ふにも、此君をひきこさまほしうおぼせど、世のうけひくまじき事を、はゝかり給て、色にもいでさせ給はず。 (「さだまり」から7丁表)	月日が過ぎて、〈光源氏(若君)〉が宮殿にやってきました。美しく成長したので、神につれていかれたりしないかと大変不安に思われました。翌年の春、第一皇子が皇太子に決まったときも、帝は、〈光源氏〉に第一皇子を越えさせたいと思いましたが、世間が納得しないことだと、遠慮して、表情にも出しません。	时光流逝，光源氏终于被接回宫中。他长得十分美貌，观者皆叹，恐其所为神明所附身。第二年的春天，第一皇子被立为皇太子时，天皇也曾想越过第一皇子立光源氏，但终究顾虑世人不会接受，而不露声色。
44 祖母君は期待も虚しく潰え若宮六歳の年に無念さを残したまま死去 「かの御祖母〜」(1805 / 一九⑥ / 三七)	彼うば君、なぐさむかたなきゆへにや、うせ給ぬれば、又これを、かなしびおぼす。	あの〈桐壺の更衣〉の母(祖母君)は、心を慰めることもなかったからでしょうか、亡くなってしまいましたので、またしても帝は、悲しいことだと思ひになります。	桐壺更衣的母亲若在天有灵也会感到欣慰吧。虽已去世，每当想起，天皇心中仍觉得悲伤。
45 若宮七歳の読書始めの後は、その聡明さと美貌に弘徽殿女御も感服 「今は内裏に〜」(1844 / 一九⑩ / 三八)	若君七つに成給へば、文はじめさせ給て、	《光源氏(若君)》は《七歳》になりましたので、読書始めの儀式をして、	光源氏七岁的时候，举行了开始读书的仪式。
46 若宮は二人の皇女方より優雅で学問や音曲にも秀でる超人さを発揮 「女御子たち〜」(1904 / 二〇② / 三九)	御がくもんはさる物にて、琴笛のねにも、雲井をひびかし給へり。	勉強はいうまでもなく、琴や笛といった楽器もよくできて、宮殿の人々を驚かせました。	他不仅读书聪明，还擅长琴与笛之类的乐器，让宫中的人惊叹。
47 高麗の相人は鴻臚館で右大弁の子として来た若宮を顧て不思議がる 「そのころ〜」(1955 / 二〇⑥ / 三九)	其比こまうどのさうにん奉りて、	そのころ《高麗人の相人》がやってきて、	这时从高丽来了个相面的人，
48 「弁も、いと〜」(2019 / 二〇⑩ / 四〇)	ナシ	ナシ	ナシ
49 「帝、かしこき〜」(2075 / 二一⑤ / 四〇)	ナシ	ナシ	ナシ

50 帝は宿曜道の判断も参考に、若宮を皇位継承権のない源氏にと決断 「際ごとに〜」(2120 / 二一⑩ / 四一)	此君のざえかしこく、かたちのきよなるにめで奉りて、ひかる君とつけ奉り、をくり物どもさゝげけり。此君をたゞ人にはあたらしけれど、源氏になしたてまつるべくおほしをきてたり。	この《光源氏(若君)》の学問の才能がすぐれていて、《容姿も美しい》のをほめたたえて、「光る君」と名付け、贈り物などを差し上げました。帝は、この《光源氏(光る君)》を皇族から外すのは惜しいけれど、源氏の名をつけて、臣下にするように決めました。	他赞美光源氏学问出众，姿容秀美，便称光源氏为光之君，并献上礼物。天皇虽然觉得将光源氏剔出皇族十分可惜，但还是决定赐姓源氏，将他降为臣下。
ナシ	7 丁裏 絵	〈絵2〉光源氏七歳のときに、迎賓館で、光源氏が高麗の相人に占いをしてもらっているところ(7 丁裏)	图2 光源氏七岁时，高丽的相面人在迎宾馆中为他相面
51 更衣が忘れられず世を疎ましく思う帝に、先帝の四の宮の噂が届く 「年月こそ〜」(2147 / 二一③ / 四一)	8 丁表 年月にそへて、御休所の御事すれさせ給はず、御心なぐさむかたなし。先帝の四の君、御かたちすぐれ給へる事を、ないしのすけ、そうして奉らせ給へり。〔割・其を藤つぼと申也〕 〔「年月」から8 丁表〕	年月が過ぎてても、帝は、〈桐壺の更衣(御息所)〉のことを忘れることがなく、心をなぐさめることもできません。前の天皇の四番目のお姫さまで、見た目がとても美しいということを、〈典侍〉という女官が、主人である帝に伝えました。〔その人を、〈藤壺〉といいます。〕	岁月流逝，天皇无时不想念桐壺更衣，无有可抚慰之物。自名为典侍的女官，天皇听说先皇的四公主十分美貌。这个人便是藤壺。
52 典侍は先帝の四の宮を亡き更衣に生き写しだと奏上し帝の気を引く 「母后世になく〜」(2173 / 二二② / 四一)	昔の御休所によく似給て、	昔の〈桐壺の更衣(御息所)〉によく似ていて、	她与桐壺更衣长相相似，
53 「母后、「あな〜」(2233 / 二二⑧ / 四二)	ナシ	ナシ	ナシ
54 「さぶらふ人々〜」(2264 / 二二⑫ / 四二)	ナシ	ナシ	ナシ
55 藤壺は皇女の身ゆえに誰に気兼ねもなく、帝の寵愛もしいに移る 「これは人の〜」(2295 / 二三② / 四三)	人のきはもまさり給へば、をのづから御心うつりにけり。	身分も高いので、帝は、〈藤壺〉に自然とお気持ち移っていきました。	而身份高贵，天皇也就自然将心意转向藤壺。
56 源氏の君は常に父帝の傍にいて、若く美しい藤壺の姿を透き見する 「源氏の君は〜」(2327 / 二三⑤ / 四三)	源氏の君は、みかどの御あたりさり給はねば、藤つぼにもしげくわたり給ふ。	〈光源氏〉は、帝の近くから離れないので、〈藤壺〉ののところにも《帝》と一緒によくついでいきます。	光源氏不离天皇左右，所以也经常与天皇一同前往藤壺的居所。
57 「母御息所も〜」(2370 / 二三⑨ / 四三)	ナシ	ナシ	ナシ
58 「上も、限りなき〜」(2396 / 二三⑪ / 四四)	ナシ	ナシ	ナシ
59 弘徽殿と藤壺が険悪な中、世の人は光る君とかかやく日の宮と賞讃 「こよなう〜」(2433 / 二四① / 四四)	光君に立ならび、御おほえもとリ／＼なれば、かゞやく日の宮ときこゆ。	〈光源氏〉と〈藤壺〉は、《帝》にそれぞれにとても愛されているので、〈藤壺〉のことを、〈光源氏〉の「光る君」に対して「輝く日の宮」とも呼びました。	光源氏与藤壺都备受天皇的宠爱，于是，随着光源氏被称为光之君，藤壺也被称为昭阳之宫。
60 光源氏は十二歳で兄東宮に劣らぬ元服の儀式を帝の主導で執り行う 「この君の〜」(2483 / 二四⑤ / 四四)	源氏の君、十二にてげんぶくし給ひ、	《光源氏》は、《十二歳》で《元服》と呼ばれる成人式をして、	光源氏在十二岁时举行了被称为元服的成人仪式，
61 「おはします〜」(2537 / 二四⑩ / 四五)	ナシ	ナシ	ナシ
62 「かうぶり〜」(2580 / 二五① / 四五)	ナシ	ナシ	ナシ
63 左大臣は娘を春宮ではなく光源氏の元服の添い臥しに心積もりする 「引き入れの〜」(2623 / 二五⑥ / 四六)	ひきいれの大臣の、みこぼらの姫君を、そひぶしにとさだめ給ふ。〔割・其あふひの上也〕	《左大臣(引き入れの大臣)》の娘で、皇女の母親をもつお姫さまを、妻にすることが決定しました。〔その妻が〈葵の上〉です。〕	并娶了左大臣(主持成人仪式的大臣)的女儿，这位女儿是由皇女所生。这位妻子便是葵之上。
64 「さぶらひに〜」(2658 / 二五⑨ / 四六)	ナシ	ナシ	ナシ

ナシ	8丁裏 絵	〈絵3〉光源氏十二歳のときに、宮殿で光源氏が元服の儀式をした場面（8丁裏）	图3 光源氏十二岁时，在宫中举行元服仪式的场景。
65 左大臣は帝から二人の結婚を催促されると返歌で応諾して拝舞する 「御盃のついで〜」（2703／二五⑭／四七）	9丁表 〈御〉 いとなき はつもとゆひにながきよを ちぎるこゝろは むすびこめつや 左大臣御返し。 むすびつる 心もふかきもとゆひに こきむらさきの いろし あせずは （〈御〉から9丁表）	〈帝〉 いとなきはつもとゆひにながきよを ちぎるこゝろはむすびこめつや 〈左大臣〉は返事として次のように歌を詠みました。 むすびつる心もふかきもとゆひに こきむらさきのいろしあせずは	天皇咏道： いとなきはつもとゆひにながきよを ちぎるこゝろはむすびこめつや 左大臣回应，咏了以下的和歌。 むすびつる心もふかきもとゆひに こきむらさきのいろしあせずは
66 左大臣や親王たちは禄を賜い、この日の元服の儀式は春宮より盛大 「左馬寮の〜」（2730／二六④／四七）	左のつかさの御馬、藏人所の鷹すへて、給り給ふ。みはしのもとに、上達部みこたちつらねて、ろくどもしな／＼に給り給ふ。	左馬寮という役所が所有する馬に、藏人所という役所が所有する鷹を添えて、〈左大臣〉にあげました。宮殿の階段のところに、上級の貴族や親王たちが立ち並んで、引出物などを位に応じて帝からもらいます。	天皇将左马寮养的马，与藏人所养的鹰一道赐予左大臣。宫殿的台阶上，上层贵族与亲王伫立，按照身份接受天皇的赏赐。
67 元服した光源氏は左大臣邸に迎えられ、娘の葵の上と初々しく結婚 「その夜〜」（2768／二六⑧／四七）	その夜、おとゞの御里に源氏の君までさせ給ふ。〔割・源は十二才／あふひは十六也〕	その夜、〈左大臣〉の家に〈光源氏〉は行きました。〔〈光源氏〉は十二歳、〈葵の上〉は十六歳です。〕	这一夜，光源氏去了左大臣的家。此时光源氏十二岁，葵之上十六岁。
68 「この大臣の〜」（2800／二六⑩／四八）	ナシ	ナシ	ナシ
69 左大臣家の藏人少将は右大臣家の四の君と政略結婚して牽制し合う 「御子ども〜」（2833／二七①／四八）	おとゞの子藏人少将には、右大臣殿の四の君をあはせ給へり。	〈左大臣〉の息子の〈藏人少将〉は、〈右大臣〉の〈四の君〉と結婚することになりました。	左大臣之子藏人少将与右大臣的四女儿成了亲。
70 光源氏は藤壺を理想の女性として慕って想い悩み、葵の上とは疎遠 「源氏の君は〜」（2863／二七④／四九）	9丁裏 源氏の君は、うへのつねにめしまつはさせ給へば、心やすく里ずみもし給はず。藤つぼの御ありさまをたぐひなしとおぼし、さやうならん人をこそ見め、にるものなくもおほしけるかなとおぼせば、おほいどのゝ君には心もつかず。 （「里ずみ」から9丁裏）	〈光源氏〉は、帝がいつも自分の側近くにお呼びになるので、ゆっくりと〈左大臣〉の家に落ち着くこともできません。〈光源氏〉は、〈藤壺〉のことを世の中にめったにないものと思つて、〈藤壺〉のような女性と結婚したい、〈藤壺〉と似ている女性もいないなあと思うので、〈葵の上（大殿の君）〉とはあまり親しくなりません。	光源氏经常受天皇宣召，随侍左右，无法常住在左大臣家。光源氏认为藤壺的人品世间少有，想与如藤壺般的女子成亲，常常想着世间有如藤壺般的女子，于是与葵之上并不十分亲近。
71 宮中での光源氏は藤壺の存在を慰めとし、左大臣家は温かく気遣う 「大人になり〜」（2912／二七⑨／四九）	おとなになり給てのちは、有しやうにみすの内にもいれ給はず。御あそびのおり／＼、ことふえのねにきゝかよひ、ほのかなる御こゑなくさめにて、内ずみのみこのましようおぼえ給ふ。	大人になってからは、子供の時のように〈藤壺〉と同じ御簾の中にも入れません。合奏をする時々に、琴や笛の音色に気持ちをこめ、かすかに聞えてくる〈藤壺〉の声を慰めにして、〈光源氏〉は宮殿でばかり過ごしています。	成年之后，光源氏再也不能像小时候一样与藤壺同处帘幕之中。唯有合奏之时，寄情于琴笛之声，以依稀传来的藤壺的声音为慰藉，于是，光源氏终日在宫中度过。
72 「内裏には〜」（2976／二七⑭／五〇）	ナシ	ナシ	ナシ
140326_伊井小見出し付加	ナシ	ナシ	ナシ



執筆者一覧（敬称略・掲載順）

伊藤 鉄也

（国文学研究資料館／総合研究大学院大学・教授）

清水 婦久子

（帝塚山大学 教授）

庄 媿淳

（立命館大学 大学院博士後期課程）

藤井 由紀子

（清泉女子大学 准教授）

土田 久美子

（青山学院大学／東京工業大学 講師）

浅川 槇子

（国文学研究資料館 研究員）

加々良 恵子

（国文学研究資料館 補佐員）

## ◆ 編集後記

2013年10月からはじまったこの科研も3月末日で最後となります。このジャーナルは2014年の11月に第1号を刊行し、以後、年に2回のペースで発行してきました。

内容は研究会や国際集会でとりあげられたテーマから、最新の翻訳情報を含んだ論文まで多岐にわたります。言語に関しては、英語はもちろんのこと、スペイン語・フランス語・ロシア語・イタリア語・中国語・ハンデル・ヒンディー語・ウルドゥー語とこの1冊のジャーナルを開けば、世界旅行ができるような豪華な顔ぶれとなりました。

毎回、みなさまにはご多忙の中、原稿をお願いするばかりでしたものの、おかげさまで本科研では最終号となる『海外平安文学研究ジャーナル』第6号をお届けすることができました。

この場をかりて篤くお礼申し上げます。

(浅川槿子)

数年に渡った科研も、本号でひと区切りになります。科研サイトに登録されたデータを見ていると、こんなにも多くの国が日本の古典を翻訳していたのか、と改めて驚きを覚えます。国によってさまざまな翻訳事情があって、平安文学の翻訳であっても物語に異文化が影響していることを知りました。正確に伝えることが良いのか、その土地に合わせてわかりやすく伝えることが望ましいのか、永遠の課題ではないでしょうか。科研を通じて、翻訳に限らず、人と人とのコミュニケーションには必ず付いて回る問題ではないかと感じました。

発行スケジュールの都合もあって、関係者の方々にはご無理をお願いすることも多かったと思います。お忙しいなかをご協力いただき、本当にありがとうございました。今後も古典文学が果たす役割や与える影響を見守って行きたいと思います。

(加々良恵子)

## 研究組織

### 研究代表者

伊藤 鉄也 (国文学研究資料館／総合研究大学院大学・教授)

### 研究分担者

野本 忠司 (国文学研究資料館／総合研究大学院大学・准教授)

### 連携研究者

マイケル, ワトソン (明治学院大学・教授)

清水 婦久子 (帝塚山大学・教授)

荒木 浩 (国際日本文化研究センター・教授)

ラリー, ウォーカー (京都府立大学・准教授)

藤井 由紀子 (清泉女子大学・准教授)

高田 智和 (国立国語研究所・准教授)

### 研究協力者

高木 香世子 (マドリード・アウトノマ大学・准教授)

緑川 眞知子 (早稲田大学・講師)

土田 久美子 (青山学院大学／東京工業大学・講師)

須藤 圭 (立命館大学・助教)

川内 有子 (立命館大学・大学院生)

テレサ, マルティネス (立命館大学衣笠総合研究機構・客員研究員)

庄 捷淳 (立命館大学・大学院生)

畠山 大二郎 (愛知文教大学・講師)

村上 明香 (インド・アラハバード大学・大学院生)

浅川 槇子 (国文学研究資料館・研究員)

加々良 恵子 (国文学研究資料館・補佐員)

科学研究費補助金 基盤研究 (A) 2013 年度研究報告書  
「海外における源氏物語を中心とした平安文学及び各国語翻訳に関する総合的調査研究」  
課題番号 [25244012] 研究代表者 伊藤 鉄也

# 海外平安文学研究ジャーナル 6.0

Journal of Heian Literature Research Overseas Vol.6.0

2017 年 03 月 30 日 発行

〈非売品〉

編集兼発行者 国文学研究資料館 伊藤鉄也

<http://genjiito.org/>

「海外平安文学研究ジャーナル」

<http://genjiito.org/journals/>

I S S N 2 1 8 8 - 8 0 3 5

© 伊藤鉄也

本書を無断で複写・複製・転載することは  
法律で認められた場合を除き禁じられています。